

夜が明ると、私は身支度して天幕を出た。妻も出て来た。彼女の天幕の一夜は、如何に過ぎたか。

* * *

天幕内には、薄暗い一つの吊ランプの明りで、七つほどのBedが数へられ、入口近く、二つあいたのが、見えた。けれども、此處は婦人のみの天幕なので、夫の手提をあげかり、提灯を渡して、わたくしひとり留つた。

あらい鼠毛のがさがさする毛布には、蝨す虫が居さう。私は、白かなきんの裏のついた蒲團の方をえらんだ。それにしても、夫はどうして居るだらう？ さつき通つた、あの天幕内の混雑では、寢臺がありさうもない。沙の上ではあるまいか、と、自分ばかりが、勿體ない。夫の上を祈つて、Caseを枕にかへ、靴をぬいで、Bedの下に置いた。

黒い服を着た、四十前後のシリア女らしいのが、近くのBedに腰かけて居て、隅の方に寝て居た女に、何か言葉をかけて居た。やがてわたくしに、フレンチユが話せるか、ときく。わたくしは、否のんと答へた。と、其女が、何かいひいひわたくしに近よつて来て、わたくしの左の手くびを一すまくつた。わたくしは其だしぬけに、びつくりさせられた。が、すぐ合點がいつた。時をたづねたのだつた。流行の腕時計をはめて居る、と思つたのらしい。わたくしは、手提の中から、小さな時計を出して見て、十一時二十分、と教へた。

黒服の女は、退屈したといふ様子で、エジプトあたりでよく見

うけた、水を通してのむ喫煙の道具をとりよせて、のんで居る。それから、ランプの下の小卓に、Decanterとコップがそなへてあつたが、立つて其水をのんだりもする。わたくしの靴が、入口近くあるので、其女は、其處に置いては、盗まるといけない、奥の方に入れてお置きなさい、と手まね入りで、注意してくれたりした。

わたくしは、つかれて、Bedの上に、着のみ着のまま、夫のとんびを上へ、裾には蒲團を二つ折りにかけて、身を横たへた。間もなく、さつき同車した宿の主が、天幕に来て、宿帳にわたくしの名をひかへ、10pをとつた。寢臺の代であらう。

やがて又、ズック張のや、木や板で組みたてたりした、三つのBedが運ばれた。すると金玉の光りまばゆきネツクレエスをかけた、白絹の婦人が、赤ん坊と、二人の召使女をつれて、はいつて来た。これも、シリア女であらう。レデイは、薄いスカーフをとり、ネツクレエスをはぎ、ブラウスをぬいで、侍女に渡し、わたくしの嫌つたあらい鼠毛の毛布のBedに、赤ん坊の頭に腕をかひ、添乳しながら、静かに身をよこたへた。わたくしも、眼をとぢた。

少しうとうとなつた。體がかゆく、少しはさむくもあり、眼がさめて、夫の上が氣にかかる。

私はそうと起きて、靴をはき、手を淨めに天幕を出た。

降るかと思ふ空の星。冷気が、身にしむ。沙其自身が鳴くやうな、虫の聲。天幕の外には、荷物持ちなどするboy達であらう、天幕に身を投げかけて、何にもかけず、着のみ着のまま、或は一人、

或は二三人かたまつて、眠にころげおちて居るのが、薄くらがりに
氣味わるくも、亦あはれにも、見ゆる。わたくしは、そうと其間を
少しあるいて見た。何處でか、夫を見出したい、と心に念じて居る。
眞夜中の天幕のあたりは、鼾の聲がもれきこゆるばかり。何處をた
づねやうもなかつた。恐ろしいやうで、もう動けない。只此静けさ
のうちに、夫も幾分の休息は得られるであらう、と思つて、わたくし
は天幕にかへつた。

夜が少ししらんだやうだ。そろそろ靴をはきはじめて居ると、
天幕の外から

“おい、よくねむれたかね。まだはやいよ。四時前だ。”と夫の
元氣な聲。

いそいで天幕を出た。而して悪ない顔を見合はせた。

顔をあらつて部屋にかへり、髪を結ぶ。いま起き出た土人の娘、
十六七のが二人、アラブ語で、何かいつて、わたくしに手を出す。
が、わからぬ。わたくしの頭を指さす。結び方を見せよ、といふの
か、と思つて、わたくしが頭を彼等の方に向けると、一人が、わた
くしの頭の鐵ピンを、一本ぬいだ。さうして、自分達の靴のボタン
を、かけるのであつた。

わたくしは、其不作法に、ぎよつとさせられた。さうして、娘
たちがかへすピンを、沙の上になげ捨てた。けれども、其わたくし
を見る娘達の無邪氣な顔を見ると、氣の毒にもなつた。

あ い

* * * * *

天幕に寝る費を厭ふて、天幕外に寝て居る家族がある。大形の
支那かばんの上に、小娘が二人、ショオルにくるまつて、すやすや
眠つて居る。

私は、柵のはりがねを越えて、其處に今咲いたばかりの、滴る
やうな緋色のひな芥子を摘んだ。五月初と云ふに、此處らの柘榴は、
花盛りである。

少女の一人が、支那かばんの上で、眼をさまして、私の手にし
た花を見ると、欠伸をしながら、起き上つて、出て往つた。やがて、
歸るを見れば、彼女の手にも、ひなげしが一束燃えて居た。

齎らされたばけつの水で、形ばかりの洗面を済ます。朝食を注
文すると、天幕外の沙の上に、小さな食卓と椅子を据ゑてくれた。
私共は、そこでパンを噛り、紅茶を飲むだ。それから、私は全熟卵
を、妻は Fried eggs を食べ始めたが、蠅が入つて居たので、“これ
こそ本當に Fly Eggs” としやれて、彼女はナイフを差措いた。

私は、去三月末、エルサレムに往きがけに、此處で買つた Ora-
nge を忘れかねた。丁度其處に、妻のピンを失敬したシリア娘二人
が、胡瓜を抱いて來たので、私も、前の場所に往つて見た。勿論季
節は過ぎて居たが、まだ相應にオレンジを賣つて居る。容は少し小
さいが、Orange 八個を、2pで買つた。それから、Almond 核三十
を、7Pで、白い胡瓜二本を、同じく1Pで買つた。

天幕は純然たる土人の宿で、唯一人の白人も終に見かけなかつた。つまり、私共は、親類の天幕に泊つたのであつた。

其二 H A I F A

(一)

五月二日、朝の七時四十分に、汽車が南から来た。即ち、先頃私共の乗つた汽車で、カンタラから来たのである。昨夜の人足の若者二人が持ち込む荷物と共に、先づは無事に空いた車室に納まる。

汽車は、シャロンの野を、北に走る。車窓の朝風涼しく、線路の左右は、露にずぶ濡れの野花が美しい。エリコからもつて来た鹽をつけて、ラッドの胡瓜を食ふ。Almond nuts も、うまい。

右の義手に革の手套をはめた、四十左右の男が、来て話す。露西亞人で、父はオデツサに今も居る。持つて居る時計が、ヘブル字なので”露西亞生れの猶太人と分かつた。右の手は、二十年前に失つたさうな。土木の技師で、今ヤツファで仕事をして居るが、妻と娘二人がハイファに居るので、今日は其方へ行くのであつた。私程にも話せぬ英語で、要領を得にくい。“私の子供は、ドクトルです。”と云ふので、其様な大きな子供があるのかと思ひ、一轉して子供が病氣で醫師にかけて居るのか、と思ふたら、其所謂ドクトルは、Daughter であつた。彼は私に、日本語では、父は何、母を何と云

ふ？それから、一から十までを何と云ふ？と聞いては、手帳を出して、左の手でさつさと書き留めて居た。それから、此は娘にみやげと云ひつつ、大きなボオル箱を持って来た。披くを見れば、セルロイドの大きな女兒人形で、美しいエボテなどかけたヘブル風の服装をして居る。其包紙が、漢字を刷つた支那の紅紙なのを、珍らしく見た。妻は、娘にみやげに、と、バスケットから、朝鮮餡の數塊を出して贈つた。

私は、此汽車は、サマリアから、エズレルの平原を経て、ハイファに行くのであらう、と思ひ込んで居たら、最初土耳其政府が敷設した其線路は、今放棄され、汽車はラッドから地中海に沿ふて、一直線にハイファへ北走するのであつた。色づきそめた大麥小麥の畑。海近くを思はず砂丘と、冬青見た様な木。稀には、土石の色の跡などもある。平遠のあなたに、昔のカイザリアの港の跡を、彼方とばかり望んで過ぎる。

地中海に出た。

軍用自動車が、往來する。カアキイ姿が、多くなる。

十時半ハイファ着。向ふの方には、十一時にダマスコへ出る汽車の窓に、カアキイが鈴生りして居る。

ハイファは、今パレスチナ駐屯英吉利軍の本營で、日にやけた英吉利のカアキイが、港町に溢れて居る。

(二)

十三年前の六月、私はパレスチナの見物を終へ、ガリラヤ湖の南端から、汽車で此ハイファに来て、君士丹丁堡行の便船を待つて、六日程 Hotel Nassar に泊つた。主人 Nassar 君は、基督者のレリア人、小男の甲斐々々しい風の人で、細君は英語が骨らしく、言ふ毎に眉をしかめて居た。

私共は、荷物と二臺の馬車で、Hotel Nassar に往つた。途中の町の容子も、見覚えがない。Hotel Nassar も、思ひの外に小さなもので、入口の模様なども、違つて居る。主人は、晝寝をして居た。英語を話さぬ土人の給仕が、私共を二階に案内する。海が見ゆる室は、英吉利の士官が借り切つて居る。私共の與へられた小さな室は、昔豫言者エリヤが、其頂にひれ伏し、雨を祈つて、終に地中海の雲を呼び起した、縁疎らなカルメル山に面し、山腹を這ふ白い道路、岬角に立つ修道院、つい聲がかけられる。窓の直ぐ前には、隣屋敷の風車が、絶えず海風に廻つて居る。

午餐に食堂に下りる。海邊で、食卓に珍らしく魚がある。エルサレムでは、一月あまりの逗留に、唯一度魚を食べた。同卓の若い男と老若二人の婦人の一組を、希臘人かと思ふたら、アルメニア人であつた。エルサレムのオトマン銀行の支配人で、戦争中追放されて居たが、今歸るのだ。オトマン銀行は、佛蘭西のであるさうな。ラッドの宿泊の事など、聞いて居た。私共が、大鳥の締入で現はれたので、女達は殊に悦び、妹と云ふ若い婦人は、妻の衣服の型をとりたいた、と云ふて居た。私共がまた一應エルサレムに歸ると聞いて、

お會ひになりたければまたエルサレムで、と若いアルメニアは鷹揚である。

土耳其の武器や、鹿の頭、色色のものごちやごちやと飾つた其食堂を、よく覚えて居らぬが、二階の廣間は、記憶がある。其處の小さなピアノは、六日の船待ちに退屈した私が、昔無茶苦茶にたたいたあのピアノに違ひない。それから海に面した北東隅の室は、私が其時腸加苔兒上りの騎馬旅行の疲れに、寝たり起きたりした、其室である。覗いて見たいが、ふさがつて居る。此前の順禮行に、エルサレムで買った罐切りと共に、此 Haifa の店で買った小形のナイフは、私共の食籠に入れて、今度も持つて来て居る。

日よけをしめて、少し晝寝。

夕方、階段を下りると、玄關側の小さな房で Sofa にかけて、他の土耳其帽と話して居る土耳其帽の小男が、如何にも背て居るので、突と入つて問へば、果して主人の Nassar 君であつた。N さんも、ほのかに私を覚えて居る。聞けば、私と同年だが、N さんは餘程老けて居る。僕麻質斯で、跛をひく。戦争中、土耳其人の爲に、大分虐待されたさうだ。

晚餐の時、私は妻に N さんを紹介し、而して日本の子供を描いた扇一本を N さんに贈り、日本では扇の事を末廣と云ふて、前途を祝ふ、と説明を加へる。それから、英譯不如歸を一冊贈つた。十三年前日本の古郵券を送る約束をして、今度も持つて來なかつた。その事を云ふと、N さんにやりと笑ふて居た。何は兎もあれ、戦亂

を含むだ十三年の後に、再びパレスチナに来て、Olivet House は閉ぢても、エルサレムでは Hensman さんに會ひ、Haifa に来ては、主人も家も其ままの Nassar Hotel に泊ることが出来るのは、ありがたい事である。

エルサレムに無かつた電燈は、Haifa にもなかつた。そのかはり、エルサレムにない蠅が、Haifa には無數に居る。全く Haifa だ。十三年前には、こんなに居なかつた。戦争の結果であらう。蠅嫌ひの私共は、食卓に下りる毎に、食卓の白いカプアを蚊飛白にしてのける蠅の群に、太息を禁じ得ない。其處に有り合ふ新聞を巻いて、ぱたと一撃に十五六疋は斃すが、後から後からやつて來るので、掃蕩の勇氣も挫けて、匆匆に食事を終へては、二階に逃げ歸るのであつた。

夕食後、私共の室の扉をたたいて、あとで N さんの末子と知つた十五六の男の子が來て、“Bath is ready” と云ふた。先刻 N さんに頼んで置いたのである。往つて見ると、それは W. C. の直ぐ隣、小さなランプをともして、暗く、きたなく、はりがねを取柄にした半切の石油罐に熱湯を入れた、それきりであつた。驚いた私共は、戦後いくらかたたぬ此處はハイファである事を、忘れて居たのだ。Cairo で R 少佐が、夫人同伴では Haifa 直行はお氣の毒、と云ふたも、思ひ合はされた。

兎も角も、汗を流して、寢に就く。

地中海が、夜もすがら、磯に碎ける。

其 三

Bahaism の爺さん

(一)

1906年の夏、ヤスナヤボリヤナに逗留中、トルストイの爺さんは、私に一通の英文の手紙を見せた。それは Abbas Effendi と云ふ人の手紙で、世界が一になるべくならねばならぬ何ヶ條かの綱要を書いたもの、であつた。悦ばしい手紙、とトル爺さんが云ふて居た其手紙の發信者は、シリアのアツカの住人であつた。アツカは、私がつい三週間前に六日も船待ちの逗留したハイファの港と、同じ灣内にあつて、舟で往つても、馬車で往つても、一時間半には過ぎぬ。西向きに弓形のアツカの灣の、本をハイファとすれば、末がアツカで、私の逗留した Hotel Nassar の二階から見ると、緑の灣を隔てて白いアツカの港が手にとる様に見えるものだ。私はアツバスの手紙を見て、あのアツカに住む人であつたか、會つて來ればよかつた、と思ふた。トルストイ爺さんは、Abbas の父がもと波斯の貴族で、信仰の爲追放されたと云ふ事を語り、Bahaism について少し話した。云はば、トル爺さんが、私を Abbas Effendi に紹介したやうなものである。

それから、四年過ぎて、トルストイ爺さんは死んだ。私は私の

生活と戦闘に没頭して、Bahaism については、私は唯其概念をもつに過ぎなかつた。Bahaism は約七十餘年前、波斯の一青年 Bab が唱道しはじめた四海同胞絶対平和の教で、Bab が殺されて後、波斯の貴族 Bahaollah が二代目となり、其爲に波斯を追放されて、シリアのアツカに幽せられ、約四十年、幽居から愛と平和を宣傳し、其死後子の Abdul Baha が三代目を嗣いで、Abdul Baha 即ち Abbas Effendi である事を知つた。それから、雑誌などにあらはれる記載から、私は日本にも Bahaism に心を寄せる者が居る事を知つた。然し私の知る所はそれに止まつた。今度の私共の旅行は、エルサレムの仕事を除いては、何を當と云ふ事もなく、氣まぐれの旅である。誰を訪ね何を調べる、と云ふはつきりした目的はない。個人にも、公的にも、宛てた唯一本の紹介状も持つて居ない。本當の漫遊である。然し十三年ぶりに、ハイファに來て見れば、もとより私の頭にあつた Abbas Effendi、十三年前トルストイ爺さんが紹介した其 Abbas に會つて見やう、の氣も起るのであつた。

さうだ。會つて見やう。

(二)

五月三日の朝、主人のNさんをおねると、食堂側の部屋から白い寝衣姿で出て來た。Aさん訪問にアツカに出かけると聞いて、Aさんなら、アツカではなく、今此ハイファに來て居ます、直ぐ近所

です、悴に案内させませう、と云ふ。此處に居てくれた、とはありがたい。まるで、待つて居たやうなものだ。

朝の九時少し過ぎると、私は鼠リンネルの詰襟にバナマ帽、妻はカイロ仕入れの白茶の服に緑玉の頸飾をかけ、凜として下りる。Nさんの末子 Fareed と云ふのが、私共を案内してくれる。

朝来一しきり、小雨が過ぎたが、今は奇麗に霽れた。白い陸の日は熱く、青い海の花は涼しい。私共は、F少年と話しながら行く。今年十四歳。明日兄弟エルサレムの學校に行くと言ふ。Abbas さんは、數年前にアツカから此ハイファに引越して來たのさうな。

Aさんの宅は、近かつた。カルメル山の麓の大道から折れて少し上ると、アツカの灣の綠潮を見下ろす高臺に、花園に圍まれて立つて居る立派な洋館が、それであつた。門番の土人に、少年が來意を告げると、門番は私共を待たして、奥に往つた。左側の園中に、小高く四角な小舎が見える。Aさんは、今あの中に居るさうです、とF少年は告げる。

門番が歸つて來て、いざと私共を導く。花園の花美しく咲いた中を通つて、薔薇の蔓の這つた玄関から上る。歐風に裝飾された、天井の高い、可なり潤い客間に導かれる。三十疊程の潤さに、緑のカアベツトを敷きつめ、唯一脚の卓子を置いただけで、中央をあげ、窓側、壁際に椅子、Sofa など數多くならべてある。私共は、F少年と、壁際の椅子にかけた。

眼鏡をかけた土耳其帽の人が入つて來て、立上る私共と握手す



عبدالله
حضرت بابا'اللهی ادریس
میرا ہر ایک کو ایک شاخ سے
تمام دنیا کا پھل
ہم نے اعلان کیا ہے
ہم نے اعلان کیا ہے

Abdul Baha'ullah
His Holiness Baha'ullah address-
ing all mankind says:-
"O ye people of the world! ye are
all the fruits of one tree & the
leaves of one branch".
He has declared us "Owners of
the world of Humanity".

Translated by Shoghi Effendi
Haifa, Palestine
(quoting of Abdul Baha'ullah)
May 20 1919

る。少し若過ぎると思ふたが、“あなたが Abbas Effendi きんでお出ですか”と問ふと、“いや、私は His Excellency の卑い従者の一人です。”と眼鏡の人は答へた。後で、彼は波斯の人、名を Azizullah S. Bahadur と云ふて、Beirut の大學出で、Bahai 教徒の若手で錚錚たる者と知つた。

“あなた方は、閣下にお會ひになれて、お仕合はせてす。閣下は、あなた方を、息子息女の如く、歓迎なさるでせうから。”と眼鏡の人は云ふた。

“さうです。而して、彼の方も、私共にお會ひになるのが、悦喜でせう。”

と私は云ふた。

淡褐色駱駝毛の、寛濶な、亞刺伯風の長いマントを被た、白の巻頭巾、白髯の爺さんが、入つて來た。Abbas Effendi である。七十五歳と後で聞いた。私はもつと若いつもりだつた。爺さんを見出した事は、一の失望で、他の悦喜であつた。爺さんは、私を右に、妻を左にかけさせ、而して懇に握手した。赤黒い顔には、悦喜が溢れて居る。白い帛で頭を巻き、後で妻の話によれば、白いシャツ、白茶紋織支那縮緬の着物に、黒いアルパカの袍を重ねて、例の茶褐色のマントの下から、赤い Sandal の足が出て居る。

爺さんと共に、眼のくるくるとした土耳其帽の絹袖服の若者が、向ふの窓側の椅子にかけた。爺さんの孫の一人 Rabbani と云ふ若者で、眼鏡の人と同時に Beirut 大學を出た人であつた。爺さん英

語を話さないで、孫のR君が通譯役をつとめる。

私は先づ十三年前、トルストイ爺さんのヤスナヤボリヤナで、初めてA爺さんの手紙を見た事を話した。A爺さんは、トルストイ爺さんが晩年 Baháism の事を書きかけて居たが、果さなかつた事を話した。

それから、A爺さんは、孫の舌を通じて、一般的説話をはじめた。ちつとも私の顔を見ず、唯空を見て話す。細く和らかな聲である。

“二種の人がある。先人の有つたもの、若くは爲した事を、其ま真似て行く人。これは子驢馬が親驢馬を模倣すると同様で、一向つまらぬ。他は常に独自の考をもち、不斷眞理を求むる人である。世には驢馬の子が多い。然し日本人はさうでない。”

而してA爺さんが亞米利加に往つた時、日本人藤某を拾ひ上げた話をし、卒業後は、彼が此處に来る、と云ふ話をした。

爺さんが一言云へば、孫が一言譯する。爺さん此方の顔を見てくれと思ふが、爺さんは顔も見ずに、唯言葉を練り出して行く。

私は、耶蘇を何と見るかを、爺さんに問ふた。

爺さんは、孫の口によつて答へた。耶蘇は Divine が自づからを現じた鏡の一つである。

私は、私の父の事を話し、爺さんの白髪を見ると、父の白髪を見る心地がする、と云ふた。

爺さんは、日は恒に輝やく云々と答へる。

爺さんは一向疲れぬと云ふ。然し私はここらで切り上げやうと

思ふた。間接の話は、間がぬけるし、而していくらたたいても此上新音が出さうにも思はれぬ。私は、私の胸を跳らすやうな言を、此爺さんから聞き出さう、と云ふやうな非望を止した。

私は紫革の Autograph book を出して、自署を請ふた。万年筆を出しかけると、孫のR君は、祖父の日用のを持つて来やうと、急ぎ立つて、持つて来た。それは、矢立のやうなものであつた。爺さんは、筆の軸かと思ふ様なペンを抜き出して、其墨壺に浸し、Autograph book に右から左へとペンを軌らしはじめた。キユウ、キユウとペンの軌る響が室に満ちる。波斯字は、亞刺比亞字と同じく、右から左へ書かれ、私共の眼に差別はつかぬが、異なるさうである。爺さん書き終ると、R君が英譯して聞かせる。而してあとで譯語を書いてくれた。

“アブヅル バハ アツバス

神聖バハウラは全人類に告げて宜はく、

‘ああ爾等世界の民よ、爾等はすべて一の木の果實にして、一の枝の葉也。’

彼は‘人情世界の一なる事を’告げ玉ひし也。”

私は眼鏡の人に、“Thank you very much” は、波斯語で何と云ふかを問ふた。“フエエリイ、モト、シヤツケラム。”“フエエリイ”の發音がむづかしい。A爺さんは、少しぢれて、それを發音して聞

かせ、“Very”の意味だと教へた。私は起立して、爺さんに向ひ、“フエエリイ、モト、シャツケラム”と言ふた。次いで、妻も立つて、同じ言を云ふた。爺さんは喜んだ。日本に來たいと思ふて居る、と云ふ。若い者が喜ぶでせう、と私は答へる。

少し前に、土耳其帽が二人入つて來た。一人は、水煙草を吸ふて居た。

老僕が銘銘に小さな珈琲の碗を持つて來る。熱い珈琲を啜り果てると、碗を卓子の上にさし置き、私共は立上つた。而して爺さんに握手し一禮し、他の人人に一揖して、客間から園に出た。

(三)

R君は、Autograph book に譯文を記入すべく退く。B君は、私共を園に導く。B君が少し園の花を妻に折つてくれる。B君の話によれば、爺さんには四人の娘があつて、何れも米國に遊學し、今はそれぞれ嫁いて居る。一人は女醫で、復活祭の頃、エルサレムのホテルの食堂で、私共に言葉をかけたのが、それであつた。媼さんは、娘の家に住んで居る。何故爺媼は同居しないのか。其仔細は、午後ホテルにお訪ねする時お話する、とB君は云ふ。

R君が出て來た。Autograph book に譯文を記入してくれた。ダマスコの菓子をくれた。油つこい然しうまい菓子。Bahaiism の小菓子をくれた。Bahaiism は米國に信者が多いさうで、私共が歸途

に米國を通ると聞いて、米國 Bahai 教徒の重なる者の Address などくれた。日本の信者で“トキジロウ”と云ふ娘があると云ふ。“トキジロウ”は男の名だと云ふと、R君少し考へて、“フヨ”と云ふ盲目娘だつたと云ふ。“フユ”だらう。それから、B君は一枚のはがき大の刷り物を見せた、日本から來たと云ふて。それは、平和の太陽が日本を中心にして六大洲に金光を放射して居る圖で、“世界の平和博覽會は日本國へ”“日本國より、光明なる平和の光は”等の語が、各國語で欄外に記されてある。他の一面には、“平和を愛する魂の言葉”として、日英兩語で十ヶ條を記し、“平和元年、平和を愛する魂岩…”とある。私は驚いた。足下から鳥が立つた。いや鳥が私共より先き廻はりして居たのだ。私は氣恥かしく思ふた。エルサレムの宣言が鳥齋がましい。然し私は直ぐ思ひ直した。平和の望は、すべてにある。新紀元は、世界に磅礴して居る。而して日本が日の本として世界平和の中心であらねばならぬ事は、日本の清新な魂が皆示されて居る。それは、人間業ではない。あるものが、せしむるのだ。此様な刷物をアツベスに送つたり、私共を遣はしたりするのも、矢張それである。一切の光は、光らねばならぬ。而して一切の光は、必光る。先後、遲速、大小を争ふ要はない。光は、唯光ればよい。

私共は、R.B. の兩人に導かれて、先刻門に入る時左手に見た書房を見るべく、階段を上つた。それは、天井の低い、石造の小舎で、六疊程の素床に、粗造の Sofa と枕があり、テーブルには新聞と、巻蓆と、マツチと、放置してある。小さな窓からは、アツカの

灣の緑の潮が空に接して居る。爺さんは、此處の清涼と眺望が好きで、よく來ては冥想したり、手紙を書いたりするさうである。EastのSpokesmanとしてWestに向つて語るには、地中海岸の此ハイファは恰好な場所、と云ふたら、世界の光たる者を、と兩人は不満な顔をした。

R君は、書齋の外で私共の寫眞を撮つた。私に、帽子を脱つて、太陽を見よ、と云ふ。私は云はるるままに、帽を脱つて、目を見た。昔は、黒眼鏡をかけて、猶眩しい時があつた。

階段を下りて、園を歩く。十歳ばかりの男の子が二人來る。これも爺さんの孫で、其父母はテベリア湖畔に居るさうな。私共がテベリアに往つたら、手紙を出して置くから、會つてくれ、とR君云ふ。園には、色色の花が咲いて居る。隣の庭には、緋色の扶桑花や、名を知らぬ紫の灌木花が咲いて居る。R君は、小さな白百合、石竹、薔薇など、一握にあまる美しい花束を妻にくれた。それから、園丁を呼んで、菜樹園の戸を開かせた。若木の柑橘には、五月初旬と云ふに、黄金果がまだ累累と生つて居る。爺さんは、果實を見るが好きなので、斯く摘まずに置いてあるさうな。“左様。食ふより、見る方が好い事も、ありますからね。”と私が言ふと、“閣下が正に其通り言はれます”とR君が言ふ。孫の口からだけに“His Excellency”が馬鹿に耳に立つた。私共は無論食ふ。

“一つお摘みなさい”と云はれて、私共はある木から各一頭をちぎつた。それは、日本の温州蜜柑であつた。“Mandarin”とR君

は云ふ。支那物である。枇杷の木がある。日本から來たものと云ふ。菜樹園の一隅小高い處に、小さな建物がある。それは、葡萄酒搾醸場で、其石口をR君は指さして、“葡萄をしぼる時は、あれに口つけて飲めます。”と云ふ。

爺さんは、大抵菜食をして居る。睡眠は不足。體はあまり丈夫でない。

私共が菜樹園を出て、門の方へ行くと、爺さんが十人餘りの赤帽の人人とBenchにかけて居た。私共は、ふたたび爺さんと握手する。それから、後刻を期して、R. B.の兩君と門前で別れ、案内のF少年と共に正午ホテルに歸つた。

(四)

午餐の席で、主人のNさんは、私共に、一人の英吉利士官と、Beirutのシリア紳士を紹介した。士官は、ラッド——ハイファ間の鐵道線路に傍ふたある村に屯して居る。考古學に興味をもつ人で、附近から見出した古錢二枚見せた。一枚には、羅馬皇帝の像がある。羅馬の話から、私は例の“耶蘇基督の先驅は、バプテスマのヨハネでなくて、羅馬であつた如く、英吉利は、再來の耶蘇の先驅であらねばならぬ。”と云ふ説をのべた。士官は悦んで名刺をくれた。Abbasには、倫敦で會ふたことがある、と云ふ。何時英吉利に來るかを問はれ、Christmas dinnerは多分倫敦で食ふだらう、と答へる

と、流石のんきの英吉利士官も驚いて居た。私共ののんきな歩きぶりは、物に驚かぬ西洋人もよく驚いて居るのが多かつた。シリア紳士は、此ホテルに Omar Khayyam を亞刺比亞語に反譯した人がある、と知らしてくれた。

二時頃、R君とB君が来た。私共は二階の客間に請じて、茶菓を出し、それから朝鮮餡を出した。朝鮮餡の幾片を、A爺さんにみやげに持つて往つてもらふ。R君は、枇杷を一房持つて来た。

爺媪別居について、B君は、此處の風習が、婦人の顔出しを好まぬから、と云ふ。私は追窮しなかつた。

R君は、爺さんと英吉利に往つた時の話をした。Suffragetteに爺さんは演説して、婦人參政はまだ早い、と云ふたら、皆不平であつたが、然し子もちの牝動物は牡より強い、と云ふたら皆悦び、婦人參政運動の爲に Suffragette が受くる禁錮の長短で會から贈る金銀、銅と勳牌が別たれて居る、其金牌など持つて来て爺さんに贈る Suffragette もあつた、と云ふ。

波斯にも、今は宣傳自由になつて、大分宗徒がある。

“回教徒、基督者、猶太教徒、佛教者——色色の異種異類の一人が一堂に集つて、懇談愉悅の容子を、お目にかけたい。”とR君は曰ふ。

私は“新春”や“順禮紀行”を出して、兩人に見せた。B君は、私の父が、八十歳で耶蘇教の洗禮を受けた事に、うたれて居た。“老年になると、習性が固まつて、自己革命をする事は、なかなか困難

なものです。”と云ふ。B君は、分かつた若者である。兩人共まだ無妻さうな。R君は、私が十三年前 Tolstoy 爺さんを訪ふた事を聞いても、如何してもそれを頭に入れたくない容子だつた。乃祖父以上にトルストイ爺さんが Prefer された事が、不快でならなかつたのだ。

私共は、回教について少し話した。私は謂ふ、回教は、行き詰まつて居る。

すると、R君は、耶蘇教も、と云ふ。勿論耶蘇教も。私は、カアライルが“若し耶蘇基督が倫敦に來たら、倫敦は如何するだらう？——多分何某さんが dinner に招くだらう。”と云ふた言や、エマアソソが“昔の Stoic は一人として Stoic でない者はなかつた。然し今の基督教國で、何處に基督者がある？”と云ふた言などを引いて、形體は駄目、生命が入らねば、と云ふ意味を述べた。所謂佛敎で印度は救はれぬ。所謂回教で近東諸邦は救はれぬ。所謂耶蘇教で西洋諸國は救はれぬ。皆一度本尊を投出す要がある。其處から新しい生命が起る。ふるい宗教はふるい時代と共に逝き、新天地の新宗教は大陽の如く遍ねく光被するものでなければならぬ。

Omar Khayyam を翻譯したシリア人に私共を紹介した後、四時頃二人は歸つて往つた。

私共の話をそれとなく聞いて居た佛蘭西人が、英語で話しかける。もと士官で、日露戦争の少し前に日本に居たと云ふ。

(五)

後で、Baháism の小冊子を見る。私共のよく云ふ事の一部が、美しく言はれて居る。分れんとし、一にならんとする二つの世界精神の中で、一にならんとするそれが殊に高調されて居るそれはBaháismに限らず、私共に限らず、當代の正氣な人間が、誰も思ひ、誰も望む事なのである。“亞刺比亞人は東の伊太利人で、波斯人は佛蘭西人だ。”とカアライルは云ふた。優雅な波斯から生れた Baháism には、自づから優雅な詩味がある。若い日の出を無理にたたき落されたやうな教祖の青年 Bab, 二代目 Bahaolla, 今の三代目の Abbas, 皆それぞれに詩人だ。東方色彩、東方香味が、勿論我儕東方の心を牽く。高天原が波斯にあるかも知れなかつたり、語學者が波斯語と日本語の間に近い脈を辿つたり、波斯と日本は案外近い親類で、本家新家の間には本來血が通ふて居らうし、Zoroaster の裔が、古事記の裔と、二十世紀の初頭に、亞細亞の西の端と東の端で、似たやうな聲を出すのに、不思議はない。世界に照らうとする意氣に於て、Baháism は日本の先驅である。

何は兎もあれ、白い人人の前に色ある人人の頭が上らぬ今日に於て、既成宗教を大つかみにして、人種の色を絶した大同團を築き上げ、其上に鎮座しやうとして居る、此黒爺の了簡は、小さくない。科學も文明もつとめて取り入れ、三代目にして全世界の精神的統一を成就せんず山氣と覇氣と、何にせよ昔東方征伐の十字軍が初めて

上陸したアツカの灣に居を据ゑて、時に歐米にまで乗り出し、逆に西洋を征伏しやうとして居る東方氣魄は、まことに痛快な爺さんである。

然し、私共が爺さんから受けた印象は、そんなに力強いものではなかつた。七十五の老齡の致す所であらうか。私には別の解釋がある。Baháism の所説が、漠とした總括であるやうに、Abbas 其人に、何となく空疎な處がある。腑に落ちないものがある。私は思ふ。彼は苦しんで居ないのだ。彼の父は、相應に苦しんだらしい。然し子は父程に苦しんで居ない。苦しみが足らねば、力が足らぬ。うま味が足らぬ。榮冠の輝きは、十字架の程度に比例する。矢張十字架を負はぬ者は、十字架無用は叫ばれぬ。Abbas に足りないものは、齡ではない、十字架だ。彼は苦しみ足りぬ。故に其人格が何となく軽い。

Baháism の小冊子を見ると、“バハイの教義は耶蘇基督の教義と同様の基礎に立つ。但耶蘇は人類幼稚の時に來り、バハイは人類の成長進歩した時代に應じて來た。”と云ふて居る。而して Abbas 自身私共に、耶蘇は神の現じた鏡の一つ、と云ふて居る。昔パウロは、耶蘇のまだ血腥い十字架の上に自己を押立てたが、Abbas Effendi は、耶蘇千九百年間の成果を押領して、軽く其上に腰うちかけ、耶蘇其ものを彼も神鏡の一つと手輕に一邊に押し片づけて居る。故障を云ふ者が無いから、千九百年前耶蘇と云ふ人間が現在生活したナザレの山里から十里に過ぎぬ此ハイファに大胡蹠をかいて、傍

若無人に振舞ふ此爺さんが、耶蘇に對して何程の光であるかは、時が之を判きねばならぬ。パウロを叱つた私は彼 Abbas に向つても、“頭が高い!”と一喝浴びせたい念がむらむらと起る。

然しそれはあまりに狭量である。日が出なければ、松明がはりの明星も入用だ。あまりに日の出が長びけば、明星も仰がれて日を氣どる。さうだ。英吉利人が平和の君の道作り人夫なら、Bahatism の三代、Abbas Effendi も平和の君の松明持ちの一人たるを失はぬ。彼は終に先驅者である。

私は思ふ、マホメツドが沙漠の魂を一に糾合する爲に遣はされたやうに、Bahatism の Mission は、回教國の教化融化にある。佛教が昔日本の猛氣を和らげたやうに、Bahatism は回教徒を和らげねばならぬ。脚下の本務を忘れて、空しい世界の呼號をつづけたら、彼は其天賦を空しうするのだ。

Abbas には十字架がない。Bahatism には戦闘がない。戦闘がない處に生命がない。Bahatism は去勢宗教である。それは無籍者の宗教とも云へる。Bahaolla は波斯を逐はれ、其子 Abbas は歸り得べくしてまだ波斯に歸つて居ない。印度の土から釋迦は生れた。耶蘇は猶太人である。Socrates が希臘人なら、孔丘は支那人である。マホメツドも沙漠から生れた。か生られぬ宗教に、力があらう筈はない。Bahatism は美しい空中の樓閣だ。日が出れば、松明の要はない。Bahatism は日が出る迄の松明がある。乃祖が昔一つの限られた天を共にいただき、一つの限られた地に共に載せられたとし

ても、二千有餘年一系の歴史を有し、太古自然神教の地盤に、儒教を取り入れ、佛教を取り入れ、耶蘇を取り入れ、而して今新に生るる如く瑞瑞しい日本の日が出る時、松明がはりの明星は悦んで褪せ去るに、何の躊躇がいらう?

耶蘇の前には、バプテスマのヨハネが來た。ヨハネは耶蘇の先驅である。猶太人の傳説は、Me siah の前に豫言者エリヤが二たび現はれると云ふ。耶蘇はバプテスマのヨハネをエリヤと見た。耶蘇はヨハネから洗禮を受けた。然しヨハネは自分の分を知つて、“我は必衰ふべし”と云ふた。而して適當の時に死んだ。

Haifa の海から、Carmel の山が起る。Carmel の山は、昔豫言者エリヤが、雨を祈つたり、さまさまの跡を遺した山である。其 Carmel の山腹に、Bahatism の三代目 Abbas Effendi は、家を構へて居る。

エリヤの山に居る彼は、即ちエリヤだ。知らず識らず其位置に居らされて居るエリヤだ。耶蘇の先驅をバプテスマのヨハネがした——二代のエリヤ。三代のエリヤ Abbas ——彼は日本の先驅である。

私共は、今あらためて、日本から、カルメル山下の彼を呼びかける。

“爺さん、御苦勞。最早日本の日が出た。早早本國波斯にお歸り。而して赤帽の教化を頼むだぞ。”

第 六 NAZARETH

其 一 ナザレへ

(一)

五月四日。今日は、私共が馬車でナザレへ赴く日である。朝食終つて、仕度整へ、下りて玄関側の小さな客間に行くと、Nさん夫妻、嫁入ざかりの二人の娘、中學齡の二人の息子、N夫人の妹などが別を告ぐべく集まつて居る。此様な大きな子供があつて、あの戦争の苦勞を閲しては、Nさんが老けるも無理はない。そのくせ、細君はそれ程老けては居ない。あなたはいつまでも若くしてお出だが、何か魔法を御存じなのですか、と私は言ふたが、十三年前より一層英語が下手になつたやうな細君に、私の洒落は到頭落ちなかつた。今日は日曜で、ダマスコ仕入の黒白縞の絹の着物で娘達はしやれて居る。姉妹は Beirut の學校出で、少し英語を話す。妻が持ち合せの少許の英語で、女同志衣服の話が出る。日本の美しい絹を買つて下さいと娘達が云へば、妻は娘の叔母さんが裁縫職なので、歸途に寄つたら、濃藍縮緬の羽織を Blouse に仕立て直してもらふ、などの相談をして居る。私は食堂に往つて、宿帳に斯く記入する。

“It is very gratifying, after passing thirteen years, to come again from far-off Nihon to this Haifa, to stay again at Hotel Nassar's, especially to find the host and the hostess with all their family happy and prospering, in spite of the hardships of the recent war. May God bless them over and over!”

Nさんが讀んで、喜んで居た。而して、産物の手編みのレヌスをみやげにくれた。

Nさんは、足の不自由な小さな體をまめに働かして、私共の手荷物に片端から宿札を張つたり、ダマスコの宿に紹介状をくれたり、それから其従弟と云ふ、當時テベリアの軍政署に勤務して居る人に、引合はせたりする。

やがて馬車が來た。Nassar の人々に別を告げて、乗る。朝の九時。

(二)

青い玉の頸かけをした、三頭挽きの乗合馬車。乗合だが、特に相談して、借切りにした。馭者座に、馭者と下使ひの若者が乗つて居る。前の區劃に、私共が乗つて、後ろの方には、數々の荷物を積んだ。

汚ない市場を過ぎ、町をぬけ、しばらくダマスコに通ふ鐵道線路に依つて、カルメル山下の白埃立つ道を駛る。妻は、昨日 Abbas

さんの庭から貰つた花束を、新聞に包み、馬車の帷の紐に結びつけて置いたが、がたびし馬車がする拍子に、花束が落ちたので、馬車を駐めて、拾つてもらふて、しかと結びなをした。

石多く、樹木疎らな、カルメル山下の路。柴を頭にのせて、女達が山から下りて来る。桑は緑に、柘榴の花は朱に燃える。北には、遠くレバノンつづきの山が聳えて、アツカの野は、大麥小麦穂に出て、薊、野芥子、春菊、錢葵、さまざまの野花が、これにまじつて、銀鈴をふる様な虫の音がして居る。涼しい風が吹く。

穗麥 まじり 千草 花 さく アツカの野

小虫 鈴ふる 五月の 朝

土耳其帽かぶつて、劍とびすとるを腰にした、若いカアキイの土兵が、馬車を呼びとめ、馭者と何か話すと、攀ち上つて、馭者座に腰かけた。馭者の肩をたたいて、借切りではないか、と注意をすると、直ぐ其處までですから、と云ふ。それならば可。年少兵士は、私共の住む柏谷の、機關兵で肺病でなくなつた、長さんに背て居る。馬車が進んで、鐵道線路にはなれ、昔烈しい豫言者エリヤが、偶像教の豫言者何百人を打殺して投げ込んだ、と云ふキシヨンの小川を、北へ渡らうとする時、騎馬の土兵を見ると、長さんは馬車を下りて、紙包を件の騎兵に手渡し、此方には何の挨拶もなしに、さつさと往つて了ふた。

馬車は、キシヨンの小川の橋を渡つて、一つの丘を上りはじめた。桃色の“つゆあふひ”が此處其處に満開して居るのが、如何にも美しい。上りつつ、ふりかへると、アツカの海が、背後に青い。

つゆあふひ 咲ける 丘邊を 辿りつつ

ハイファの海 を かへり 見しかな

何かは知らず、白い花が、路傍に咲き亂れて居る。カイロで買った袖珍亞刺比亞——英語字典を取り出し、“白い”と云ふ語を探がして、馬車の後から歩いて来る若者に、花を指しつつ、“Abyad zarah”と云ふと、若者は合點して、せつせと花を採りはじめる。もう澤山、“Haji”と云つても、分からぬかして、到頭其白い花やら、つゆあふひやら、一抱程も持ち込んだ。それを馬車の蹴込みに入れて行く。虫が鳴いて居る。白い蝶が飛ぶ。風が吹く。雲が浮く。小鳥が飛ぶ。好い氣もちだ。此處は、一體何處だらう？ 武蔵野か？ 妻の故郷菊池街道か？ 私の故郷水俣の山道か？ 否、否、私共はナザレに行きつつあるのだ。行きつつある。而して歸る氣もち。久しぶりに歸る氣もちだ。夫の郷は初めての女房連れて餘程久しぶりに旅かへりの心地だ。路加傳の放蕩息子が成人して、女房連れての凱旋、とも云へやう。一向異郷の旅ではない。

丘を上り果てて、馬車は今平野に下りはじめた。エスドレロンの平野が、丘と丘との間に、入江の如く入り込むて居る平地である。

原の大麥小麥は、餘程色づいて居る。牛の群、黒い羊の群が、小さく見える。畑に溢黒く、漁網など張つたやうに、平太張つて居るのは、ベドインの天幕である。體は茶褐、面ばかり白い牛が、のそりと私共の馬車を見送る。本道の新に鋪かれた石ころを避けて、時々馬車は軟かな草地を行く。

青玉の 頸うちふるひ 三頭の

馬車は 下り行く エスドレの 野に

五月四日 風冷やかに 麥を吹き

雲影 度る エスドレの原

面白の 牛 人を見る エスドレの

麥原 ほのに 色づきにけり

(二)

丘と丘との間の入り野を過ぎて、また一つの丘を上ると、私共の馬車は、丘の上のわびしい三家村に駐まつた。Jeide と云ふ村である。時計は、正午を指して居る。軛をはなれた私共の三頭の馬は、鼻を鳴らして、槽の水を飲み、食ひ、而して若い一頭は、顔を洗ふてもらふて居る。馱者達も、圓い煎餅形の大パンを出して、右

にパン、左にチイスの片を握りもち、交互に喰ひはじめた。里の子が四人、欲しさうに眺めるので、馱者は少しパンを裂いて與へた。私共も、馬車の上で、新聞包の辨當を、網袋から出した。パン、全熟卵、羊肉のフライが二片。Orange 二個。Nさんが今朝私共の網袋に入れてくれたのである。犬が二疋やつて來た。其一疋は、乳のだらりと下つた牝犬である。Mutton の骨をやる。昨日 Bahai の若い二人の來客に出した残りの菓子を、私共は持つて來た。馱者と、若者に、一つ宛。土人の子供四人に、一つ宛。それから、残り一つを、私共も分けて食べた。思ひがけないものを手にした子供は、縁陰の大地にべつたり座つて、舐めるやうに喰ひはじめた。妻が、あれを、と指すので、見ると、桃色の襦袢を被た五歳位の女兒が、頸に刺青して居る。

男の子がまた二人來た。菓子は皆になつたので、妻は残りのばんをやつた。

卵のからや、ばん屑を、新聞紙にくるんで、投げる。群の子供の一人が、突と跑けて往つて、新聞をあけて見て、何もなかつたので、またもとの地びたに座つた。

“あなた御覽なさい、まだ皆があのお菓子を食べて居ます”
と妻が云ふ。

此戰爭中、土人はひどい目に遭ひ、レベノン地方では、一村の七割まで餓死した村があつた、と云ふ事を、私共は後に知つた。此處の子供等は、何年にも、此様なうまい菓子を食ふた事はないのだ。

だから、生涯もつづけとばかり、をしみをしみ食ふて居る。

向ふの緑も深い梅檀の蔭に、カアキイの英兵が五六人、シャツ肌になつて、電信丸太に腰かけて、憩ふて居る。子供子供した兵士の一人、梅檀の紫の花と、緋の野芥子を、カアキイのヘルメット帽に挿したのが、私共の馬車に来て、話をする。此次の村に屯して居ると云ふ。日曜で、遊びに来たのだ。

馬車とめて 晝餐をすれば 里の子等も
瘦犬も 皆 まらうど して

梅檀の 花の紫 緋の 野芥子
ヘルメット に 挿せる 兵士の休暇

ナザレの方から、乗合馬車が二臺、やつて来て、此處に駐まつた。此處は、ナザレ——ハイファ間の、丁度中途なのである。

(三)

午後一時、私共の馬車は Jeide の村を後に、また平野に下りた。カルメル山つづきに、遠く指ささるる回教の遙拜所は、追々後になり、サマリアの山山が、南方遙に霞むて居る。西の海風吹くなへに、雲の影が野を渡り、丘を這ふ。土の家の村が見ゆるを、駁者

に問へば、Jebata と云ふ。

サマリア の 山は 霞みて エスドレの
麥原 わたる 雲の影 はも

馬車は野を過ぎて、やや高い丘地を上りはじめた。車を軽くすべく、若者は下りる。大形の軍用自動車は、連りにナザレの方角から来る。私共の馬車は、それをよけて、傍路を上る。少し行くと、また来る。また来る。およそ三十臺も来た。何かと思へば、今日は日曜で、皆ナザレに遊びに往つたのだ。初の數臺は、黙つてやり過ぎしたが、やがて、私はがくり點頭をしたり、“Good afternoon”と云ふたり、面白半分舉手したり、しはじめた。日にやけた若いカアキイ等、大悦びで、微笑、點頭、舉手、“Good day”色色のものを以て、私共を迎へては、過ぎて行く。五月初だが、西風が今日は寒く、私は馬車の上で夏外套を被り、妻はショオルにくるまつて行く。

山の上の淋しい村を過ぎる。道傍の一寸立派な石造家屋が、無人で、荒れて居るのは、獨逸の何かでもあるのか、と思ふ。

路は村をぬけて、山の岨、打開けたる處に来た。忽ち、エスレの大平野が、私共の眼の下に展げられた。私共は、手を拍いた。何と云ふ美しい眺望か。眼の届く限り、野は色さまさまの毛氈で、敷きつめられて居る。紫の色して居るのは、休息して居る土の色。さまざまの緑と黄とは、或は熟れ、或は未だしき大麥小麥の畑の色。

それが、何れも、長方形の色紙をはぎ合したやうに、奇麗に列んで居る。其上を、雲の影が、浮き模様はやうに、紫に染め染め動いて行く。妻は、讚嘆の聲を絶たない。“こんな、美しい景を、見たことは、ない!”と彼女は幾度もくり返へすのである。馬車で来て好かつたと云ふ。それは、ハイファからあの平野の中央のアフウレまで、汽車で来て、アフウレからナザレへ上る路もあるのであつたから。

パレスチナの穀物倉と稱へらるる此エスドレ野は、ほぼ三角形をなして、其底邊、東南のゼニンから、北西端のハイファまでは、二十四哩に及んで居る。少しの起伏はあるが、山の上から見れば、大きな平盆を見る様である。私共の眼は、此美しい色紙の湖から、それを圍む四方の山山に走る。

東は、頭の尖つた小ヘルモン山、ギルボア、頭の圓いタボル山。ヨルダンのあなたの山山は、其向ふにほの青い。此處に一村、彼處に一落、山に傍ふて指さされる。南は、野の末を限るサマリアの山又山。其東南の隅の山下に、白いものの點點と見ゆるは、ゼニンの村である。十三年前には、あのゼニンに一夜泊つて、馬で此野を過ぎて、ナザレに来たのだ、と私は妻に語る。

突然、妻が笑ひ出した。而して、下の平野を指した。其指先を辿つて、私も笑ひ出した。蟻の行列を見つけたのである。否、蟻と見たのは、駱駝の行列であつた。それは、本當に、蟻のやうに小さい。然し、長い頭をさしのべて、のつしりのつしりハイファの方へ歩いて行くは、正しく駱駝の行列である。豆人寸馬と云ふが、寸駱

は初めてだ。アフウレの停車場は、馭者に教へられて、ぼつちりそれと認めたが、鐵道線路は、眼を見張つても、見る事が出来なかつた。

紫に 黄に 淺綠 深綠

色紙 ならぶる エスドレの原

野の 山に 盡くる あたりに 白きかな

昔 宿りし ゼニンの 村里

“ナザレに逗留中に、また来て見やう。”馬車の一轉毎に、段々右の方に退き去る此眺望を、見かへり、見かへり、私共は斯く云ひ合ふ。

エスドレの野の大景を、惜しくも尻眼にかけて、馬車は山の上の坦坦たる白い大道を、北東に駛る。見覚えある陥擠山の懸崖が現はれた。彼處からナザレ人が、耶蘇を、突き落さう、としたさうだ、と私は其ざらざら今も磔のまろび落ちさうな、白茶の山側を指して、妻に教へる。やがて私共の經て來たハイファ街道は、ゼニンやアフウレから上つて來る街道と一つに合ふて、ナザレは近くなつた。

無花果や橄欖、しやぼてんの生籬、の間にぼつりぼつり土石の人家が白く見える。往來する女達娘達が、何れもきつぱりとした装をして居る。今日は、日曜であつた。

唯ある家の前で、土耳其帽の若い土地者が、私共の馬車をとどめて、乗らうとする。馭者は、懐から何か書いた紙片を出して、それを件の赤帽に突きつけ、果ては向ふの胸ぐらをとつて、恐い顔して怒鳴りはじめた。赤帽も負けじと怒鳴る。私共の若者も、何か聲高に怒鳴る。馬車をめぐつて、人立ちがする。借切りだから乗せぬ、いや乗る、の争か、と思はれるが、よく譯が分からぬ。如何なる事か、と見て居ると、それでも、二三人仲に立つ人があつて、馭者は憤々しながら馭者臺に戻つて來た。而して、白埃立つ街道を、少し駛ると、町の南のはづれ、人氣もなきさうな長方形の建物の前に駐まつた。Hotel Germania である。時計は、午後三時を過ぎて居た。

扉が開くと、片目盲いた痘痕の土耳其帽が階段を下りて來て、兩手に私共の荷物を提げながら、階段を上つて、南西の隅のNo. 4. に導いた。

約束の馬車賃 350 P の外に、骨折りの 50 P をやると、馭者は顔を崩して喜んだ。而してにお伴を、と云ふ意を示したが、少なくとも一週間はナザレに逗留と答へたので、深深一禮して歸つて往つた。

其 二 ふるさと ナザレ

其 一

Hotel Germania

(一)

エルサレムが英軍の手に落ちたは、1917年の十二月であつたが、ナザレが落ちたのは、1918年の九月二十日で、私共の來る八ヶ月前は、此處にも若干の血が流れたのだ。現に私共の室にも、獨逸兵が五人泊つて居た、と云ふことである。

Hotel Germania は、名の如く、獨逸ホテル、である。主人 Heselschwerdt 君は、戦争中心配の餘、病死した。其兄弟は、佛蘭西で戦死した。H君の寡婦 Maria さんは、人の好い三十前後の婦人で、エネボルケ、テオドラと云ふ五歳に三歳の女兒がある。H君の姉さんの Frieda と云ふしつかりした四十女が、亡弟の跡をうけて、主人所をやつて居る。獨逸女中が二人。土人の女中が三人。三々ばかりの片眼痘痕の赤帽かぶつて松の木のをやうに丈高な土人の僕と其妻。これだけがホテルの手足である。客の大部分は、もとより

英吉利の將校兵士。私はある時、戯れに士官の一人に云ふた。昔マホメッドが猶太人を虐殺した。すると、其寡婦が恐れ入つた體で、マホメッドを馳走して、毒を盛つた。直ぐには死ななかつたが、それでマホメッドの體は臺なしになつた、と云ふ事である。獨逸婦人が猶太婦人だつたら、諸君は安心して此處のパンは食はれまい。士官は苦笑して居た。後で主婦F女は、それと聞いて、驚として居た。より若い他の獨逸婦人は、復讐するなら毒は盛らぬ、わたくしは軍服を被る、と、つんとした。

(二)

海拔約千五百呎の山の上のナザレ。蝾螺の殻の口のやうに、靉昧の山の窪みに出來た山の邑である。Hotel Germania は、其南の入口近く、街道に傍ふて居る。山に據つて建てられて居るので、表口の扉を入つて、可なり高い石階を上るが、第一階の裏は、直ぐ丘つづきになつて居る。私共の爲に供へられた室は、此第一階の南西の隅にあつた。十五疊位の室。天井も壁も白く塗られ、床は白い石疊。唯二つの Bed の前にのみ、幅狭いカアベツトが敷かれて居る。西と南に鐵格子の窓がおのおの一つ。外は狭いながら裏庭になつて居る。西の窓から、葡萄の新緑美しい Arbor を見越して、扉外は橄欖樹其處此處に、病院などの建つて居る丘腹から、青空につづいて居る。此窓を中にして、隅と隅とに白蚊帳を垂れて極めて低

い Bed が二つ。卓子一。椅子二つ。北の壁つきに、硬い Sofa が一つ。扉の鍵と、洗面器及水さしを二つにする事は、頼むて出來たが、二週間の逗留に到頭筆筒はなく、更に一脚のてえぶるを借りたら、軍醫の使つたものと覺しく、むせかへるやうな沃度仿謨の臭がした。それは、はげしい悲哀を閑した人の心の如く、汚くはないが、^{きたま}血の氣の無い室である。

其處に、私共は導かれたのであつた。

十三年前、私がエルサレムから馬で來て、二日泊つたナザレの宿は、此ホテルであつたか。であるやうでもあり、無いやうでもある。私の泊つたホテルは、もつと暗い感じの家であつた。少なくとも此室でなかつた事は、定である。

(三)

室に落ちつくと、私共は茶を呼ぶ。勿論電鈴があるでなし、出かけて命ずるのであつた。片目の赤帽がやがて運んで來た。見れば、Tmy に砂糖がないので、特に持つて來てもらふ。薄いパンが四切れ。茶は薄くて、變な香味がある。其後、ある日、裏庭で“つゆあふひ”の花を乾してあるのを、何にするかと問へば、それは茶に入れるとの事で、さては最初のあの茶の變な香味は、“つゆあふひ”の入つて居る爲であつたか、と得心がいつたのであつた。

ハイファに、電燈がない位だから、ナザレは勿論の事で、私共

の室には、蠟燭がついた。其光で、夫妻大島に着換へる。土人の女中達が、珍らしがつて、はなれぬ。女中の二人は、共に Jamireh と云ふ。二十七八のは、少し英語を話すが、二十歳ばかりの方は、獨逸語か佛蘭西語しかいけぬ。今一人大柄の十六の娘は、Rosé と云ふ。赤い更紗を着て、頭を包み、鋪石にかたかた云はして支那下駄をはいて居る。新嘉坡あたりでよく見たものが、此處にも来て居るを、珍らしく思ふ。戦争中に始まったのであらう。

“Dinner's ready.”

と赤帽が覺え立ての英語で案内に来たのは、もう夜の九時近い頃であつた。私共の室を出て、少し往つて左手に、“Speise Saal” と記した、長方形の立派な室が、それであつた。ランプが一つついて居る。食卓は、私共の外に、カアキイが六人。少し語を交へる。スープ。Mutton stew。オレンジに菓子。Decanter の水が冷たく、うまい。

歸つてくつろいで居ると、片目の赤帽が、紙に書いたものを持って来た。先刻食卓に居つた中の猶太人の兵士二人が、私共と話したい、上がりませうか、お出下さいませうか、と云ふのだ。私共は蠟燭を手にして、兩人の室に往つた。私共は椅子に、兩人は各自の Bed にかけて、蠟燭の光で話す。

米國生れの猶太人で、一人は新聞記者 Agronsky、他は教師 Fisher と云ふ。Spokesman の A さんの巻舌が、私の耳に分かりにくい。然し兎も角も話せるだけ話す。

A さんは手帳を出して、日本政府が Zionist Scheme を賛成する宣言を、私共に讀み聞かせた。それは初耳であつた。今年一月の日附である。私はエルサレムで書いた公開狀の大意を話して、“還元”の時代だから、猶太人がパレスチナに歸るは當然である可き事を述べた。A さんは、猶太人が建國の念願に固い事をのべ、随分亞刺比亞人土耳其人の嫉悪で、妨碍され、虐殺されるが、五人殺さるれば、十人歸住する、いまにパレスチナに確固とした根據を据ゑる、と云ふ。それから、A さんは、日本に猶太人の移住は、如何なものであらう、と云ふ。私は明白に言ふた。日本には、餘地がない。それからまた私は言ふた。“もと自分は、世界人種の混淆を主張して居た。然し今は殊別を欲する。混血は、退化の場合が多い。”A さんは、其點については、猶太人は殊に嚴しくて、自身の血を重んずるから、と云ふた。

私共は握手して、自室に歸つた。

(四)

私共がナザレの第一夜を送るべき各自の Bed は、ついぞ見た事もない極めて低い Bed で、床上一尺五寸には過ぎない。横になつた寢心地は、亦私共の今迄に経験しないやうな、安定な、氣もちのよいものであつた。

それは他郷、異郷の客床ではない。

年と云ふ限りを忘れて久し振り久久振りにふるさとに歸つたら、其寝心地はまさに斯様であらう、と思ふやうな Bed であつた。
然だ。私共はナザレに來たのだ。いや、歸つて來たのだ。此二つの Bed は、やつと私共を待ちつけたのに違ひない。

其 二 五 月 五 日

(一)

五月五日。昨日ナザレに着いて、今日は五月五日である。五月五日は、私共の結婚記念日。今日は、其第廿六回である。銀婚を、日本の恒春園に祝ふて、金婚への第一歩、第二十六回の結婚日を、千九百年前のふるさとナザレで迎ふるも、恵まれた子女の私共である。

朝食には、パンにつける蜂蜜が殊に佳い。昨夜のA君と、少し食卓で話す。A君は、日本の革命思想について問ふた。私は言ふた。
“日本の皇室と、人民の間には、國初以來の家族的關係がある。如何様な事があつても、露西亞のニコラス帝の運命は、日本では繰り返へされぬ。日本は、其ままだに新まる。然し、Bolshevikism は、世界を通じて、空氣にある。禦がうとして、禦げるものではない。如何にそれを消化して行くか、が各民族の試験です。

(二)

今日の佳節を、山上りして祝ふ可く、朝食後、私共は洋服に更

へ、地圖を片手に、ホテルを出る。ナザレの上の山、Nebi Sein に上らう、と謂ふのである。少し行くと、左手道傍に、Hotel Nazareth がある。十三年前、私が来て二晩泊つた宿は、此だつた。Hotel Germania ではなかつた。

石を鋪いた狭い巷を上る。兩側を歩道にして、中を馬、驢馬も通へば、雨の出水も流るるやうになつて居る。繪葉書や封筒、書翰紙など買はうとしても、そんなものはない。町を出ぬけて、山頂への路にまごつく。土人の女達が五六人、争ふて手編みのレエスを賣りつけやうとする。珈琲を馳走するの、櫛を買ふてくれの、と妻にたかる。Nebi Sein への路を聞くと、孤兒院への路を教へる。孤兒院ではない、とふり切つて、皆がわいわい云ふを、かまわず、少し下る。而して、なほまごまごして居ると、十三四の土人の娘、赤い更紗をかぶつて、支那下駄をはき、手にハンモオスの一束を持つて、ちぎつては食ひ食ひ來かかつたが、それと聞いて、案内して上げませう、と英語で云ふ。私共は、悦んで後に跟着、今下りた路を上る。ハンモオスをちぎつてくれる。矢張生豌豆の味である。唯有る扉の前に来て、これが自家です、と云ひつつ、一寸扉をたたいて、何か云ひ入ると、いざ、と前に立つて行く。Bahaiab Nassar と云ふて、十二歳。姉の一人はハイファに、一人は嫁して亞歴山に居る。亞歴山のは小商人で、私も少し往つて居ましたが、小さい家で、とませた事を云ふ。尼さんの學校で佛蘭西語を習ひ、英語は四ヶ月しか習はぬと云ふ。双眼鏡や袋など持つてくれる。數へ年の十四だ

から、私が此前ナザレに來た年に生れたのだらう。誕生日を聞くが、どうしても解せない。

今は閉されて居る男子部孤兒院の構内を通りぬける。野生春菊の花盛りである。念の爲に、一枝摘んで、黄いろい花と葉の香を聞けば、疑ひもなく“しゆんぎく”である。此邊では喰はぬらしい。恒春園の如に蒔いて、野菜の料にすべく、少し其種を採收する。

頂上に來た。がらんとした青空の下、草の中に、回教禮拜所の墟が残つてゐる。外には何もない。案内の勞を犒ひ、10Pの銀貨をやる、と、娘は悦んで去つた。

私共は、二人になつて、ゆつくりあたり見廻はす。

北方のヘルモン山は、今日は雲があつて見えない。然し、西の方には、昨日其處から來たハイファ、アツカの海が青く、南はタボル山、小ヘルモン山、エスドレロンの平原の大部分が見える。丘の上は、美しい野花が種々咲いて居る。薊の種類が殊に多くて美しい。白い蝶がまた花程に多く飛んで居る。花を摘み、また花の種を探り、悠悠と遊ぶ。海拔千五百餘呎の山上、日はほかほかして、風は清しく、好い五月五日である。九月九日高きに登る、其古事の後に、五月五日の登高もわるくない新事である。

丘の背は、急勾配の麥畑。收穫前の大麥小麥が、風を迎へて、さやさやと天驚絨の波をうたせる。さや、さや、さや——斯様ないみじい音を、私共は曾て何處の地、何時の生に聞いたであらうか？

春の雲が空を度る。それが、向ふの山腹に濃い黛色の一處を造

り、また此方の山村を静かに暗くする。日と雲の斯様な美しい戯れを、私共は何れの地何れの世に見たであらうか？

好い五月五日である。

ヘルモン山が見えないのは、遺憾だが、それは又の日に譲つて、私共は尾根傳ひに南に下る。少し下つて、東に折れ、無暗に下ると、恰もホテルの裏に下りて来た。

丁度午餐時で、私共はバレスチナ産の葡萄酒をぬいて、今日の佳節を祝ふた。

(三)

今朝、ホテル前を歌聲拍手賑やかに過ぎ行くを聞いた。それは、村の婚禮であつたさうだ。客間側のバルコニーに出て見た時は、最早見えなかつた。

午後、また通りの物音を聞いて、バルコニーに急ぐ。それは、婚禮でなくて、葬式であつた。エルサレムでよく見たやうな、あの土耳其帽陣羽織彎刀の前衛二人、それから白百合など持った土人の男の子が二列に進み、其後から、花を飾つた棺を、若者共が昇いて来る。僧、尼、土耳其帽や、洋傘がつづく。佛蘭西僧の葬式であつた。

私共の室の西の窓下に据ゑたてえぶるに、頼杖ついて眺める。白雲の相追ふて行く青空の断片。其青空から斜にひいた丘の線。

丘の上腹には、戦争中、英吉利の飛行機の爆弾よけに、つけられたと覺しい、屋根に白い Mark の著しい病院が、寂しく、大きく、其附近の橄欖の樹は、風に吹かれて、白っぽい緑が皆南の一方に靡いて居る。其前景としては、今斜日に金線の葉の透き徹る、嫩らかい葡萄の棚。別して、それに對する食堂側の日蔭に、鞍置いた騾馬が尻尾で蠅を追ひ追ひ立つて居る。と、その間去らずくつついて、子騾馬がじいと立つて居る。好いレンズの獲物だが、寫眞機は六年前に買ったまま、不精故うつちやつて、今度の旅行にも持つては來なかつた。せめては、下手な繪にでもと、Sketch book を出しは出したが、これも久しい怠り故、輪廓すら思ふに任せず、到頭其ままにしてふ。

少ジャミレが話しに來る。亞刺比亞語と、獨逸語と、佛蘭西語と、英語と、身振手様で話す。思はしく出て來ないと、額をたたいて、つ、つ、つと舌鼓うつ。八歳から此ホテルに來て居るさうな。今年十八。二十一になる男と其内結婚するさうで、“1919” と刻した約婚指環を私共に見せて嬉しさう。妻の齡を中てきすと、二十八と云ふ。私共は結婚して二十六年目だが、子供がない、彼が俺の赤ン坊で、此が彼の赤ン坊、と交互に指さしたら、可笑しい事を云ふと、Jamireh は笑ひこけた。

夕食には、Chicken のカツレツがある。エルサレム一月餘の食卓にも、ついぞ無かつた馳走。

實は、今朝裏庭で、鶏のけたたましい啼きを聞いた。やがて、

窓下をあの片目君が、頭の無い鶏を提げて通つた。直ぐ其後から、白い犬が鶏の頭を啣へて跑けて來た。夕方の Cutlet がその化け物であつたのだ。

然し、私は妻には黙つて居た。

其 三

ABDUL

(一)

五月六日。午餐には、英吉利看護婦が二人。見物に來たらしく、Baedeker 側に、食事をしながら互に話して、私共には眼もくれぬ。

食卓の上は、鹽元豆が唯一皿。それに、薄く切つたパンが少し。もつとパンを、と Abdul に云ふ。Abdul は片目の土耳其帽である。アブ君到頭持つて來ない。其くせ、アブさん衝立の蔭で、パンに砂糖をふりかけ、窺とバルコニイの方へ出て、食ふのを、私の嫉妬の眼が見つけた。

あまりひもじいので、午後茶を呼ぶ。パンが極めて少量で、少しも空腹の補ひにならぬ。昨夕、Chicken Culet など食ふた罰で、今日は半斷食を課せられた。

アブさん案内も請はず、疾風の如く室内に跳り込み、茶の道具をさつさと持つて行く。敵いて入れ、と叱る。

昨日、女がレエスを賣りに來た。買ふには買ふが、後で、と私は云ふた。それは、アブの細君だつた。午餐の時、アブさんレエスを食卓に持參に及んだ。一週間以上逗留するから、いづれ其内、と

云ふて置いたが、言葉の意味がよく分からぬか、分つても信じなかつたか、何れにせよ、それ以來の御不機嫌。

アブ君の不機嫌は、直ぐ私共の胃に祟る。意思の疏通が必要だ。私はアブ君説諭に出かけた。アブ君英語が出来る年長の方のジャヨレを呼ぶ。日本人は詐を言はぬ。買ふと云ふたら、屹度買ふ。出發前にはレエスを買ふ。おジャミの通辯で、アブ君得心が往つたと見え、“That's nice”と云ふ。私は其足で主婦のFさんに會つて、室の鍵を頼み、特別に拂ふから、パン、殊に私共の好きなシリアパンを要求したら、持つて来るやう、Abdul に命じてくれ、と頼んだ。主婦は笑つて旨を領する。

私共が着いた日のカアキ組は追と歸つて、Glasgow 附近の者と云ふ頭の禿げたカアキと、Manchester 附近の人と云ふ、食卓で何を出されても、“Thank you”と、尻上りの自ら宥むるやうな聲で言ふ癖のある、四十あまりのと、二人残つた。兩人共に商人らしい。“Thank you”が迷懐したやうに、開戦當時の大英陸兵總數七十萬強で、休戦には五百七十萬に上つて居るから、五百萬は平生人殺しを本業にせぬ俄か兵士であらねばならぬ。兩人も其急成兵士であつた。其人達も歸つたと見えて、夕食には最早見えなかつた。其あとには、新しい若いカアキが現はれた。流行の、前髪を立てた、小柄の男。英語が少しまづいと思ふたら、城西土生れの埃及人。獸醫で、英政府に雇はれ、パレスチナの村村を廻つて、家畜の調査報告をしたり、家畜の衛生講話をしたりする人であ

つた。名は Khafagy。回教徒で、まだ獨身。埃及で埃及人と話す機会を有たなかつた私は、ナザレに来て此若い獸醫を獲たことを喜んだ。

K君は、英吉利人に關する不平を色と打明ける。埃及人一千五百萬、それに高等の學校が五つしか許されない。英吉利人は、埃及人の開發を好まぬ。弱くし、使ひ易くして置くことばかり考へる。それから、英吉利人の押柄無禮の數々に對する恨を漏らす。Safed に馬疫が起り、自動車で迎へに來たので、往つて治療に従事し、いざ歸るとなれば、自動車どころか、馬も碌にくれず、四五日無駄待ちをさせて、到頭徒歩でテベリアまで歸へされた。それに反して、同じ英吉利人でも、ゼニンの知事なんか、何時も自動車で送り迎へして、禮を云へば、皆の爲に働いてくれる人に、さうするは當然、と云ふ云。

K君は回教徒なので、私は左の二ヶ條を問ふた。マホメツドは、Force を是認したか？マホメツドは、一夫數婦を是認したか？K君の答はこうである。Force の使用は、正當防禦に限られ、マホメツドが數婦を娶つたは、事情境遇の然らしむる處である。而してK君は回教道德の美を稱揚し、英吉利の Lord H——が Christian から Mahomedan に改宗した事實を擧げた。それから、回教徒には斯様な美譚がある、と云ふて、一の話話を話した。ある老人が、一夜虚しく國の戸を敲く音を聞きつけ、あけると、若い者が息せきかけ込んで、殺人をした者だが、追手が來るから、庇ふてくれ、と頼む。

自分の天幕に來た者は、保護するが回教徒の意氣、老人は直ぐ若者を庇ふた。間もなく、門を敲いて大勢やつて來た。老人あけると、皆が死骸を舐ぎ込んだ。死骸は老人の子であつた。庇ふた若者が殺したのは、吾子であつた。然し、老人は、死骸をさり氣なく受取つて、皆を去らせ、然る後、件の若者を呼んで、“卿は俺の子を殺した。卿は子の讎だ。然し一旦懐に入つた卿を、俺は殺さぬ。早々に逃げて行かれよ”と路用食糧、煙草すら與へて、去らせた。

私は云ふた。亞刺比亞氣質は、餘程封建時代の日本人氣質に似て居る。一旦緩急的非常の場合には好いが、日常道徳に缺ける處がある。無理な義理、奇矯な俠氣、不自然は永續せぬ。何れの宗教にも、生命がある。生命は、發展進化する。マホメツドは、必要に應じて生れた豫言者であつたらうが、劍を閃かしたり、婦人に無理があつたりは、よくない。回回教が、いつまでもマホメツドの回回教なら、回回教國は必亡びる。何と云ふても、日常道徳と、婦人の愛重が、回教徒には缺ける。英吉利に自由を求むる埃及は、先づ婦人に自由を與へねばならぬ。婦人の問題は、婦人の意見で決す可きだ。それは、埃及問題が、埃及人の聲で決せられねばならぬ、と一般です。

歸ると、私共の室の鍵穴に、ちゃんと鍵が挿されてあつた。

其 四 WAGNERS

(一)

五月七日。朝、小雨。

朝食から歸ると、室が奇麗になつて、桃色のセラニウムの花がてえぶるにいけない。若いジャミレであらう。私共が來てこのかた、氣のせいか、ホテルに生氣が出たやうだ。一番嬉しいのは、今日 W. C. が奇麗になつて居た事。私共の室は、ホテルの第一階の南端で、W. C. は、北端にある。夜、夜半、蠟燭をつけて、ホテルの一端から、他の一端まで、小一丁も廊下を通り、扉をあけての W. C. 通ひも、一仕事だが、水の出がわるかつたり、海の如くなつて居たりする汚ない W. C. を、如何に利用するかが、苦しい問題の一つだつた。氣丈な獨逸女のホテルに此不始末は、こんな所に口惜しい獨逸婦人の腹慰せがあつたのかも知れぬ。免に角 W. C. の改善は、一の重荷を私共から取り去つた。

主婦の F さんが來て、獨逸の若いレデイが二人、お訪ねしたいと申しますが、如何でせう? と云ふ。英語はうまいさうだ。よろしい。午後二時にお出でなさい。

通りがまた賑やかだ。急ぎバルコニイに出て見る。案の定、婚

燈だ。歌聲。手を拍く音。然し花嫁は見えなかつた。其かわり、柴を積んだ駱駝が、往くは、往くは、十七頭までつづいた。あの柴を如何するのだらう？ 後で聞いたら、あの柴で火を焚いて、其ぐるりに環を作つて、夜一夜踊り明かすさうな。柴は友達の進物。面白い。私共が来てまだ三四日の中に、もう幾度か婚禮の行列を見る。五月五日に婚禮したのは、日本の私共ばかりと思へば、此ナザレでも五月は婚禮月であつた。

(二)

午後二時に、獨逸の若い女達が来た。小客間で對面する。主婦のFさんにも、来てもらう。二十代の姉妹で、姓を Wagner, 名を Emma と云ひ、Haannah と云ふ。Eさんは色白、藍鼠のスカアトに白のブラウス。妹のHさんは日にやけ、卵色の夏服、胸にレースを飾つて居る。二兄は俘虜として埃及カイロに居り、伯母はカイロ附近のヘルワンで禁錮中死にかけて居るさうな。昨年九月、ナザレが英吉利軍の手に落ちて以來、此處の獨逸人の男と云ふ男は、或は戦死、或は捕虜、残る女子供も捕虜同様、少しも事情が分からぬので、今日は色々の事を聞きに来たのだ。講和會議は？ 埃及は？ 印度は？ とたたまかけて来る。知る限り、思ふ限りを答へる。印度は？ と問ふ姉の問を、私は好まなかつた。何處から聞いたか、日本の獨逸捕虜優遇については、感謝して居た。獨逸の食糧不足の話が出る。

私共も獨逸行き的心算を告げる。

私はそろそろ説教をはじめた。最早喧嘩は打切り時、世界を擧げて一家と親しむ時。妹のHさんは、戦争中、君士丹丁堡で看護婦をして居た。其處で、聯合國側の非道を散々聞かされ、それまで憎悪と云ふ事を知らなかつたが、あまりの非道に憎悪を覺えた。あなたの仰有る言は、あまり理想的です。これで新世界が来るのなら、世界のごたごたは何の意味でせう？

私は云ふた。“それは癩疹のやうなものです。病毒が出て来るのだ。内攻するより、餘程好い。健康になる前です。”

姉妹は、F女と相見て、成程と云ふ顔をした。

私共ば“新春”を見せ、十三年前私の露西亞行を話して、順禮紀行を見せる。それから、例の茶器を持ち出して、緑茶と、三切の朝鮮餡を九つに切つて、九十九里の落花生と共に饗した。私は緑茶を指して、“Sweet in bitter”“苦味の甘味”を話した。それから、先日英吉利の士官に戯談に云ふた、猶太婦人のマホメッド毒飼を話して、私は云ふた。英吉利軍人などが、敵國婦人のホテルに平氣に遊びに来て、ピアノを弾いたり、飲食甘睡して往くのは、それは獨逸の男子を疑ふ事があつても、獨逸の婦人を信任するのだ。男は女を信ずる。唯母のみ男の子の喧嘩をとど得る。婦人が一致して平和の支配を宣告すれば、戦争は自然に止む。あなた方は、そんな戦争など後にした新紀元を望まないか。

新紀元は望ましいけれ共、平和が女によつて来る事は、十分の

自信と覺悟がない。姉のEさんは“如何すれば好いのでせう?”と問ふ。私は曰ふ。それは、婦人自ら解く可き問題で、男の立ち入る事ではない。

話がうつる。

Eさんはナザレの感じ如何を問ふ。

“大層好い。”

“何の點が?”——空の美しさ。空氣の乾いて清い事。其他いろいろ。然し、勿論耶蘇のナザレだから。ヨセフの家なんか如何でもよい——“然し、あなた方は基督の再臨を如何思ひますか? 基督の復活を信じますか?”

姉妹は、頭を掉つて、“No!”と云ふ。基督の再臨を信ずる Temple Society に屬する阿父阿母の女達は、戦争の悲觀から其様な信仰は失つてしまふたのであらう。妹のHさんは、此様な世界には、とても耶蘇は復活して來ぬ、と云ふ。ナザレに住ても獨逸國人の女に、耶蘇復活の望がないのも、無理はない。長いの鬱憤を聞いてくれる私共が現はれたので、好い訴へ所を得たやうに、皆打明けた留息をつく。主婦のFさんは、“ホテル商賣程、つらいものは、ありません”とこぼす。

Autograph book を出して、姉妹と主婦に書かせる。私共の名刺をやる。妻は今度作つた羅馬字の名刺の使ひぞめをした。それが獨逸婦人に第一に手渡された事を、妻は後で喜んで居た。私は妻の名の“あい”の意味を説明した。

姉妹の兩羽が居るさうな。妻は朝鮮館を日本紙にくるんで、おみやげに、と贈つた。Hさんは、長旅で Madam がお疲れにはなりませんか、何卒そろそろ御旅行なさい、而して此處にも成るべく長く逗留して下さい、と云ふ。それから姉妹言を揃へて、明日是非と私共の往訪を求める。私共が諾したので、姉妹は悦んで去つた。

(三)

私共は運脚靴をはいて、私共の窓下の後園に出た。そこに主婦のFさんも出て來て、色々話す。Fさんは、ハイファで生れ、此ナザレには來て二十六年になる。兩親は、此ナザレで歿した。此ホテルの主人であつた弟は、戦争中に病死し、他の弟は歐羅巴で戦死した。“本當に誰も誰も、此戦争では、ひどい目に遭ひました。”と彼女は長い息をついた。塀で圍ふた三角形の後園。私共の窓から見る葡萄は、新芽滴るばかりの緑に多くの蕾をつけて居る。先日 Abbas Effendi の家のほとりて見た灌木の紫の花が、ここにも咲いて居る。主婦は名を知らぬ。來合せた Abdul も知らない。桑の木がある。主婦は、アブ君に命じて、實を採らせたが、まだよく熟して居なかつた。此邊は、水が乏しいので、桑も少ないが、ダマスコの方は水澤山で、従つて養蠶も盛んだ、と云ふ話をFさんはする。柘榴の花が咲いて居る。Fさん一枝折らうとするので、“いまに實がなるだらうから”と私はとめる。雞が三四羽飼つてある。水氣の乏しい、白

つばい、ぼくぼくした土に、瘠せこけたチシャ、朝鮮蓴、人參、葱などが少し。先日、アブ君が大きい如露でチシャに水注いで居たが、其夕私共はチシャのサラダを食卓にもつた。

主婦は、私共を裏門口に誘ひ、蓋をとつて井を見せた。ナザレ中に、マリアの井と、外一ヶ所の泉があるが、矢張各家に雨水を溜めて居る。これも、やはり、天水の溜である。私共が毎日飲む水。好い水、と埃及の獣醫もほめて居た。ホテルに斯様な井が七つあるさうだ。それから妻は Kitchen を見に往つた。食堂と並んで建てはなし、潤くて好い臺所。獨逸女中の一人は米を撰り、一人は洗ひ物をして居たさうだ。妻は獨逸女の働きぶりに感心して居る。三十位の女中が腕まくりして、汚水の満ちた大きな盥などを両手に引かかえ、食堂外の植木鉢や葎ものなどに一滴もこぼさずにやるのを見ると、全く感心させられる。

前述の通り W, C. が遠い。食堂横の小扉を開けると、直ぐ後園に出られる。私は、人無い折を見ては、後園に出て、まさかに蹲むわけには往かぬが、水肥だけはチシャ畑を肥やす事にした。

今朝程は、小雨が降つたが、午後は好い日になり、夕になつてますます佳い。八日の月がさし入つて、窓の格子縞を床の上にはつきりと落す。星と月とが光り競をする。窓か覗くと、山の上の夕空の一片が、青硝子の様に光つて透明だ。

(四)

五月八日。朝、室の掃除が出来た處に歸つて見ると、美しい白百合と白薔薇が飾つてある。Jamireh が自家から持つて來たのだ。

今日は非常に暑い。後で、それは Sirocco、即ち沙漠風の結果と知つた。ナザレでは、夏は大抵海からの西風が涼しく、五月が却つて暑いといふ事である。

午後三時に十五分と云ふ頃、私共は主婦の Fさんと Wagner 家訪問に出かける。私は大島の上下そろい、靴、ヘルメット帽。妻は大島の綿入、藍鼠縮緬の羽織、靴をはいて、黒の日傘をさして居る。

裏門から出て、直ぐ丘を上る。中央を雨水の掘り壊したひどい勾配の坂だ。シャボテンが茂つて居る。シャボテンの實は七月に熟する。皮をむいて、嚼みしめると甘く、私は大好き、と Fさんが曰ふ。蜜蜂の嘔吐が何處からともなく聞こえる。可なり上つて、回教徒墓地に出る。それから斜に北へ建物の塀に傍ふて行く。

Wagner 家は粉挽業さうな。動力は電氣、他にも製粉所が二三あるが、Wさんのが一番好い、と Fさんは語る。其内塀圍むの門に來た。門はしまつて、粉でも取りに來たのである、土人の女達が塀門に寄りかかつて居る。Fさんが塀門から入つて大きな門を開けると、件の女達が私共を押しのけるやうにどやどやと入り込むだ。此處に出迎へた Hannah さんが笑止な顔をして、私共に詫びるのであつた。門内は石だたみ、右の建物の上が住居、下が粉挽場であらう。突き當りには、物置きの様な建物が見えて、此方には荷馬が繫

がれて居る。案内につれて階段を上る。階段口に黒天鵝絨の服、白のボンネットの内ゆたかなお婆さんが私共を迎へて懇に握手する。阿母である。やがて丈の高い爺さんが縁のない帽を脱り脱り出て来て挨拶する。阿父さんである。私共はバルコニイのついた客間に請ぜられ、妻は椅子に、私は Sofa の端にかけた。壁には、大形のカイゼルの肖像と、小形の獨逸皇太子の額が掛けられ、一隅にピアノを据ゑ、臺に美しい紅い花が飾られて居る。爺さんは七十三、嬢さんは七十。五十年前 Temple Colony の一員として獨逸から移住し來り、エルサレムで結婚し、子女はすべて此ナザレで生れた。子の一人は軍人捕虜として、他の一人は非戦闘員ながら矢張拘禁されてカイロ附近に居り、娘二人父母と共に住んで居る。嬢さんの嫂夫婦もヘルワンに拘禁されて居るが、非常に暑いのに一つホテルに獨逸人八百名も入れられ、皆ひどく弱つて病人など多く、七十越した嫂も病気で死にかかつて居ると云ふ事である。爺さん嬢さん英語を話さず、私の獨逸語は未だ用を辨るに足りないので、話は大概姉妹との間に行はれる。姉妹は前述の事情を述べて、死にかけて居る伯母や、他の拘禁者の、少しくつろぎ得るやう、埃及總督の General Allenby に一筆書いていただけまいか、と云ふ。ヘルワンは、私共がカイロから遊びに往つた温泉場だ。其處は三月も非常に暑かつた。今の暑さが思はれる。それにしめ切つた一のホテルに、八百人詰は、成程こたへやう。私共がヘルワンの温泉に往つた時、馭者が指さし教へた、眞晝中窓も戸もしめ切つたあの大きな建物が、それだつた

か、と思ひ合はされる。Allenby さんに陳情書をお書きなさい、それを封入して、私も一筆書きませう、と答へたので、皆大によろこぶ。

白い服の腕に喪章をつけた、三十左右の婦人が入つて來た。Selma Ehman — 親類の人で、長人は戦死したと H さんが紹介する。次には又一人若い婦人が來る。カイロに捕虜になつて居る息子の細君。名は Maria。其あとから、子供達が次々にあらはれる。淡紅服の十五六は、テベリア湖畔のホテル Grossman の娘。後で聞けば、Hotel Tiberias の主人は、Hotel Germania の主人と従兄弟の間柄で、而して共に戦争中に病死したのであつた。娘より小さい男の子が三人。幼児が二人。幼女の一人は、喪章をつけた婦人ので、名は英語で “Victorious” を意味する、と勝氣らしい阿母が説明する。皆次々に來て私共と握手したが、五つばかりの子は含羞んで、到頭入つて來なかつた。戦争で學校も罷んだので、此處の Emma さんが頼まれて家塾を開いて居る。私共と握手した子女は、皆 E さんの生徒である。

H さんは、主客をバルコニイに請じて、寫眞を撮つた。バルコニイは●形に窪んだナザレを見下ろす。人家高低、綠處處、山里ナザレは好い里である。南東の方には、白い回教の遙拜所を頭にのせた小ヘルモン山が見え、エスドレロン平野の一部も見える。バルコニイの下は、墓地になつて居る。先月新緑の頃は、ナザレも美しかつたと H さんが云ふ。今も美しい。今の人口は約一萬。四分の三は基督

者。残一部の回教徒も、他並に日曜を守り、祝節なども、同じく祝ふさうである。目下野羅巴人は、百に満たない。

客間に歸り、茶葉の馳走になる。色色のうまい菓子を前にして、獨逸本國の食糧不足がまた話に上る。

此處の爺さんは、露西亞の獨逸殖民地に生れ、トルストイなども読んで居る。Hさんは、昨日見た順禮紀行を、父に見せてくれ、と云ふ。生憎今日は“新春”しか持つて居なかつた。爺さんは Temple Society に屬し、其第一移住者としてパレスチナに來たので、嬢さんも矢張さうであつた。Temple Society は、獨逸 Württemberg に十九世紀の中頃起つた宗教團體である。皆農夫で、基督の再臨を信ずる。Wagner 老夫妻は、云はば獨逸の Pilgrim Fathers の中の一對であつた。

(五)

私は今、昨日の私の話の欠を補ふ機會を得て、直ちに問ふた。

“あなた達は、全く耶蘇基督を信じます乎？ 耶蘇基督を如何思ひますか？”

Spokeswoman のHさんは、一般的の答をした。私は“新春”を出して、其處に引いてあるトルストイ爺さんの言を、Hさんに朗讀さす。

“I believe in the teaching of Christ, and I believe that

Complete happiness on Earth is only possible when all men believe in his teaching.”

私は耶蘇の“劍をとる者は、劍にて亡びん”を引いた。

腕に喪章のS女は憤然として、“基督に繩で鞭を作り、商人共を神殿から追ひ出したではありません乎、”といきまく。Eさんは曰ふ、“カイセルのものは、カイセルに返へし、神のものは、神に返へせ、です。”

私は先夜ホテルで埃及獸醫との話をくり返へした。

マホメツドは、正當防禦の場合、殺人を是認した。マホメツドは、ある條件の下に、一夫多妻を許容した。耶蘇は、何方もしなかつた。一夫多妻は別とするも、あなた達は戦争を是認する。それでは、あなた達は耶蘇よりもマホメツドを愛するのだ。基督婦人ではな
クリスチャンレディズ 基督婦人ではな、マホメツド婦人だ。あなた達は耶蘇を寸寸に切りさいなむ。條モズレム
レディズ 件的に基督を信ずる。要するに、生きた基督を信じないのだ。あなた達は、千九百年前現に耶蘇が人間生活を送つた此ナザレに生れて育ちながら、全くは耶蘇を信ぜず、却て之を十字架に釘けると云ふのは、何といふ事です？”

皆黙つてしまつた。

私はいつもの Appeal をはじめた。耶蘇を信ぜよ。斯く言ふ私共を信ぜよ。眞の女になれ。生命の母となるべく、平和の母となれ。單獨ではいけぬ。Karl Marx の“全世界の労働者よ、同盟せよ”ではないが、“全世界の婦人よ、一致せよ”と私は云ひたい。

若い婦人達は、英吉利の非道について訴へはじめた。英吉利の封鎖で、獨逸の無惨な餓死が多かつた事、英吉利新聞の虚偽、英吉利婦人の傲慢無禮、それからそれと展げる。獨逸の女は、不肖ながら其様な事はない。而して昔獨逸皇后を婦人の典型、理想的婦人と稱揚する。

“それなら、白耳義や東佛蘭西に於ける獨逸人の婦人に関する亂暴は、如何です？ 獨逸婦人から食糧不足について聯合國婦人に訴へた時、佛蘭西の婦人等が、‘白耳義、佛蘭西に於て獨逸男子が亂暴をした時、獨逸婦人は何をしました？’と云ふ反問をした。あれについて、如何お思ひなさる？”

と私は突入むだ。

Hさんは答へた。“それは白耳義婦人や佛蘭西婦人には、本當にお氣の毒です。然し——”

Hさんは口籠つた。

私は云ふた。日本の諺に、喧嘩兩成敗、と云ふ事がある。如何様なソコモンが出て來た處で、喧嘩の正當な裁判は出来るものではない。神の帳簿に記入された貸借關係は、複雑きはまるもので、所詮人間の計算にのるものではない。“Alles oder Nichts!”だ。斃るるなら共斃れ、生きるなら總生き、だ。一切を忍び、一切を悔い、一切を宥し、一切を愛する外、何があらう？

何の爲に、私共は日本を出て來た乎。何の要があつて、戦後の世界をほうつき廻はるの乎。皆の人人が苦しみぬいた後を、唯慰み

に遊び廻はるのなら、それは心ないわざです、咀はるべきものです。私共は何の贈物も齎らさない。唯、來ました、日光として。照す爲に、温める爲に、悦ばす爲に。

兎に角、此一事は明白です。戦争はもう澤山。平和が今後のMotto。而して平和は特に婦人の力を待たねばならぬ。而してそれは婦人の一致に待たねばならぬ。

何とお思ひなさる？ 死者は何と言ふて居ます？ 復讐を死者は叫んで居ます？ もつと犠牲を造れ、と叫んで居ますか？ 或は血の上に血を注ぐでない、と謂ふて居ますか？”

皆また黙つてしまつた。

重い沈黙の數分がつづく。

緊縮がほどけて來ると、話は軽い方へ落ちて行く。喪服が問ふ。

“日本では、如何様な婦人を嘆美します？ 髪り毛は？”

“勿論黒。”

“眼は？”

“もとは小さな眼でした。然し今は大きな、輝やく眼をもてはやします。人形立ちの女は、もつと生じたものになつて來ました。”

日本の女は、頭は好い。然し、どうも體が弱い。だから瑞典式體操をやつて、其欠陥を補ふ事をつとめて居る。大學を出た女も居る。女醫も少なくない。

Hさんが大——君の獨文獨逸記行を持ち出して見せる。日本人

が書いた獨逸文ではなく、翻譯だらうと思ふて居た。日本製のセルロイド人形を見せる。日本製のマツチは折れ易い、と云ふて、私共を凹ませる。

私は云ふた。日本に来る外國人も多い。然し櫻や菊を見たり、日光箱根に遊んだり、Geisha girl と遊んだり、所謂日本美術をほめたり、だけでは、うれしくない。日本は獨逸や佛蘭西、英吉利や亞米利加に大分世話になつて居る。然し西が東に負ふ所も大きい。それは今迄に知られて居る彼でもなく、此でもない。あなた方が、今は知らぬ、然し氣づいて感謝する時が必来る。

家の來訪帳に、私は日英兩様に住所姓名を書いた。妻は左の歌を書いた。

姉妹 むつみし ひたに かたからば
闘ふ 子等は あらじ あらせじ
あ い

私は Rōmaji で其よみ方をしるし、左の英譯を附した。

“If only the bond between the sisters be firm,
Fighting boys will never be there, and shall be, too.”

全く其通りである。

男の私が斯く云ふは卑怯なやうだが、眞實だ。それはこうである。

“世界の平和は、男の力では、所詮駄目。如何しても、女の力を待

たねばならぬ。男が男になり、女が女になる時、初めて世界に平和が来る。”

皆英語が相應にうまいのは、それでも仕合はせであつた。

“あなた方も、私共も、あなた方には敵の言葉、英語でばかり今日は話しましたね。随分可笑しいではありませんか。”

私が言ふと、皆が同音に笑ふた。

私共も Autograph book に皆の姓名を書かす。

私が妻の歌の譯を書いて居る内に、電光がびかり光つて、凄じく雷が鳴り轟き、雨がざあと落ちて來た。

立ちかけては、しばしば引きとめられて居たが、雨は果てしなく、時刻も移るので、強て暇を告げる。

雨が盛に降つて居る。私は傘なしなので、傘を借りる。ホテルのF女も借りる。傘がなかなか開かぬので、爺さんが開けてくれた。而して爺さんは小さな Cap を冠つたまま、雨中に立つて、私共を見送るのであつた。

(六)

私共はFさんと話しながら歸る。五月に此様な雷雨は珍らしいさうな。“あんまり日光のおみやげでもありませんね。”とFさんがイヤミを言ふ。先刻の私の言をひつかけたのだ。兩親はなし、Wagner の爺さん 嬢さんが親のやうで、今は獨逸の男と云ふては此處では

爺さん一人故、何か事があれば、直ぐ爺さんに奔つて行く。Fさんは斯う言ふのであつた。

雨が止まない。平鍋をかぶつて、土人の娘が来る。阪は急なり、足に任せて先きに立つ、と

“東洋紳士、何ゾ足ノ早キヤ。”

と妻が上から聲をかけた。私は笑つて、立ち止まつた。而して三人打ちつれてホテルに歸つた。裏門がしまつて居る。Fさん手頃の石を拾つて、門の鐵頭をぐわんとたたくと、門が開いた。濡れ傘をFさんに渡して、握手して室に歸る。六時近かつた。

其 五 葡萄酒の奇跡

(一)

Wagner から歸つて、夕食の席は、私共と埃及歌醫だけであつた。

給仕のアブさん、昨日以來、食卓で私共の顔さへ見れば、くすくす忍び笑ひをする。いやな氣もちだが、何故とも分からない。

夕食の席に就くと、アブさん眞顔で、葡萄酒の残りを持つて來ませうか、と云ふ振りをする。五月五日の佳節に少し飲んだきり、私共の葡萄酒瓶は其ままになつて居る。持つて來いと命ずる。アブさん少し變な容子だつたが、それでも持つて來た。私は妻のコップに注ぎ、自身のに注いだ。口をつけると南無三——薔薇色の水!

分かつた。あのいたづら者が飲んで了ふて、水を入れて置いたのだ。だからあの“くすくす”。多分もう下用と云ふだらうと思ふて、持つて參りませうか、と云ふたのだ。持つて來い、は案外だつた。而して私が薔薇色の水を飲まず、然も化らなかつた、は尙案外であつた、に違ひない。

今日は私も氣分がよいので、可笑しさが勝つて、腹も立たない。私は戯れに妻に言ふた。“奇跡だね。耶穌はつい近村のカナの婚筵で、

水を葡萄酒にしたが、此處のAbdulさんは其裏を往つて、葡萄酒を水にした。偉い!”

(二)

五月九日。昨日の疲れで、私は頭が重く、妻は馴れぬ英語にひどく頭を使ふた爲、昨日から齒痛が劇しい。

午後、隣室に居るあの埃及獸醫が戸をたたいて来て、話したい、と云ふ。“後で。今は御免”と少し強く匂ねる。人の好い若者、東洋人のくせで、少し好意を示すと、直ぐ甘へる。

夕食には、皆盛い顔で席につく。アブが何か私に云ふたが、よく分からない。アブは獸醫に何か云ふて、やがて一瓶の葡萄酒をぬいた。獸醫のだらうと思ふと、やがてアブさん其瓶を持って来て、“あまい葡萄酒”と云ひつつ注がうとする。私共は平常砂糖と水を和して葡萄酒を飲む程の甘い酒のみなのだ。私は勃然として、“No”と匂ねつけた。が、直ぐ悔いて、“此方から云はない内に、瓶をぬいてはならぬ。”と穏やかに云ふた。アブさん悄氣る。若い埃及獸醫は、面白さうに眺めて居る。それが氣にくはぬ。私は Abdul を呼び、獸醫に通譯させて、問ふた。君は基督者か。基督者と云ふ。私は云ふた。卿が正直で親切なら、買ふものは買ふし、贈するものは贈する。不正直なら、決して何もやらぬ。此ホテルで、男と云ふは、唯君ばかりだ。だから、特別心をつけて、忠實にせねばならぬ。

獸醫は、アブが葡萄酒をぬいたのは、Politeness からだと云ふ。私は不正直からと云ふ。而して水になつた葡萄酒の奇跡を云ふた。

“君はアブツルよりも、俺の言を信じなくてはならぬ。”私の語氣が大分強かつたので、獸醫もうたれて、“御免”と言ふて居ます、とアブの語を私に取り次いだ。

私は埃及獸醫に曰ふた。不正直は、東洋の弱點です。

而して私は、エルサレムで目撃した、若い英兵と土人の喧嘩を話して、曰ふた。人を打擲するは、確にわるい。然し私はあの若い英吉利人に同情出来る。

私は尙も英吉利の印度統治を論し、“印度人が、自身の君主や政府よりも、英吉利人をヨリ信ずる間は、英吉利が印度を支配するは當然”とある英吉利人の言ふた言を引いて、私は曰ふた。“埃及人が英吉利よりもヨリ良くならねば、埃及は決して獨立は出来ない。天の父は、正直善良で勤勉な子供を愛する。”

埃及獸醫は、大分口惜しきうで、印度には階級があるけれ共、埃及には無い、など云ふ。

私は心釋けて、その葡萄酒の瓶をアブに持つて來さして、私のに、次に妻のに注がした。獸醫は、禁酒家で、飲まない。酒は甘くてうまかつた。矢張パレスチナの産である。

一盃の酒が廻ると、私は心が軽くなつた。而して埃及獸醫の懇嘆に身を入れて聞いてやる。月給 32 磅だが、拂つたりやつたりで、一文も残らぬ。仕事は多くて、識は少なし、約束にはまだ二月ある

が、辭職でもしてしまひたい。淋しくてたまらぬ。“あなたは奥さん
がおありだが。”それなら辭職してしまつて、早く細君を持つがよい、
と私は云ふ。然し同じ英吉利人の中にも、Tiberia 知事のやうに我
儘なものも居れば、Jenin のやうな如才ないのも居るので、若い歌醫
も兎や角云ひながら矢張りきずられて居るのだ。

其 六

獨逸老寡婦 と 英吉利老嬢

(一)

五月十日。朝、Wa_uner から手紙で、Mrs. Müller が今
日午後お待ちして居る云云。Mrs. Müller は、年久しくナザレに住
む獨逸の女宣教師。私共の事を聞いて、逢ひたがつて居るさうで、
其内往かう、と云ふて置いたのだ。

承知の返事を使の女に持たしてやるとやがて、ジャミレが掃除
に来て、“Sunday reise?”と英獨同盟で問ふ。出立は十六日と答へる
と、Jは手を拍つて悦ぶ。最初一週間位は逗留、と云ふて置いたの
で、明日日曜で丁度一週間になるからである。

午饗後、エネボルケ、テオドラの二幼女が、美しい薔薇を私共
の室に持つて來た。阿母の Maria さんが、其あとについて居る。
花を捧げた二人の子供は可愛ゆく、子供に持たれた、桃、黄、白の
薔薇、美しい。西洋の母は、斯様にして子供に愛を教へるのですね、
と妻は嘆じて居た。

(二)

午後三時、裏門から出かける。例の大鳥揃ひである。今日は、清涼な美日。Wagner の門には、Hさんが待つて居た。Eさんは、生徒を連れて、二時間距離の獨逸殖民地に往つたさうだ。

M夫人は、ナザレに五十年から住んで居る。中々發明な人で、獨逸本國の歴史に知り合ひが多い。

そんな話を聞きながら、私共は登つてM夫人の家に来た。Wさんの家も可なり高いが、M夫人の家はもつと高い。Hさんが門の鐵のHandleをかちかちたたくと、内から麻繩が引張られて、門がひとりでに開いた。門内は、セラニウム、千鳥草、さまざまの草花が眼もさむる程美しく咲いて居る。石段を上ると、赤帽の僕が迎へる。土人の女中などが、廊下から覗く。客間の扉をあけて、紫を被た六十餘の物やはらかなお婆さんが私共を迎へて握手する。M夫人は六週間程病臥して居たさうで、まだ嘎れ聲の、赤く腫れぼつたい臉をして居る。客間は、温室のやうに大小の鉢の花に埋れ、バルコニイはエスドレロンの平原を一目に見晴らして、心ゆく眺望である。

私共は、より小さい隣室に請ぜられ、茶菓の饗應になる。茶は印度もの、カイロ以來の好茶。茶器は、歌仙模様、赤と金の俗悪な日本物。Hさんでも見たが、此れが本當に日本物なら、たまらぬ程のものである。輸出向きの日本物か。“Made in Germany”ではあるまいか、と思ふ。私は、十三年前に一度此ナザレに獨りで来た話をする。M夫人は、Mrsを連れず一人で来るはSelfishだと笑ふ。話の間にも、妻を手持無沙汰にさせない。夫人は、名を忘れた

が戦争前に若い日本の牧師が來り會堂で説教した事を話した。

話半に來客がある。Miss Newey と云ふ英吉利の中婆さん。戦争前五年程此處の孤女院監督をして居たが、戦争が済んだので、先頃また歸つて來たのである。駒鳥のやうに小さな取りすました婆さん。Sofa にちんとかけて、据頭、据眼、薄い唇だけべらべらと動かして、はつきりした静かな調子で皮肉を云ひ、小さな軟かい手で、冷たい握手をする。

西洋の老婦人は、概して東洋の老婦人より健やかで勇氣がある。信仰と愛の貯蓄があるからでせう、と私が言ふと、Miss N は直ぐ引取つて、“此處へ來るのが、別に勇氣でもありません。”

年齢を問ふ、老婦人だから御免を蒙つて。H夫人は六十三。年寄つてもMissはMiss。Miss N は“中てて御御覽なさい”とのみ。

私は齎らした“順禮紀行”と“新春”を見せ、此旅中に死んだ母の事を話し、こうして兩老婦人を見ると、母を見る心地がする、と云ふた。M夫人は寡居己に久しく、子供はないさうだ。“あなた方のやうに”とM夫人は曰ふ。

私はMiss N. に孤女院の事を尋ねて、ではあなたは随分大勢のお子もちですね、といふと、Miss N. は肩をすくめて、土人の娘の母さんなかいやな事、といふ表情をした。

父の話をする。婆さんふたりながらうたれたやう。何で信仰に入られたのです? とM夫人は問ふ。結婚生活の清淨が、儒教にもな

い所と、父が推服して居た事を語る。

Autograph book を出してM夫人に署名を求め。Abbas Eifendi のを見て、“His Holiness なんか書いて”と駭いて居た。M夫人は別室に退いて、間もなく書いて来た。Miss Nにも、失禮でなくば、と云ふたが、眼鏡がないから、と婆さんにべもなく断はる。

私は基督再臨問題を提起した。M夫人は、世の中がもつと罪の無いものにならねば、基督の再来はあるまい、と云ふ。同伴のHさんも、同意をのべる。Miss Nは之に反して、世の罪惡喧嘩の最中に基督は来る、と云ふ。此點では、私共と同意見だ。然し私が殊に平和について婦人の力に待つ意をのべると、Miss Nは私があまり婦人に重荷を負はせ過ぎる、と云ふ。Eveが悪いのではない、Adamが悪い、と言ふ。

Mrs. Müller はさもないが、若いHさんは、Miss Nのちんと澄ました容子を、憎くさげに睨み、睨みする。

私は先日 Wagner 家で、私が皆さんは基督教婦人でなくて、回教婦人だ、と云ふた事をくりかへした。

Hさんが嬉しくない顔をして、回教も悪くない、と云ふ。而して、女は弱から、と云ふ。

私は Hugo の“女は弱、然し母は強い”の言を引いて、婦人が若し本當に婦人であり得たら、決して弱くありやうがない。愛する母は、直ぐ子供の喧嘩をとめる。私はここに妻 歌を擧げた。而して基督は斷片的に信ずるものでない、と云ふ意を繰り返へした。

此時五十位の婦人が、また一人やつて来た。私共はそれを沙に、暇を告げる。

Miss N. は、孤女院に來訪の自由を私共に與へた。

歸る途すがら、私共はHさんと話す。私は先日Hさん達が“カイゼルのものはカイゼルに、神のものは神に”と引いた言について、何がカイゼルのもので、何が神のか、と反問し、“あなたは神よりもカイゼルを愛して居る”と云ひ、到頂“カイゼルは神ですか”と詰つた。Hさんは、一寸詰まつたが、カイゼルは良い人、皇后は理想的婦人で、良い基督教婦人である事を切言する。中々乳ばなれは難いもの。私は追窮を止め、随分露骨な私言ひ方に、腹は立たないか、と慰める。お世辭より卒直が私は好きです、とHさんは眞顔で答へる。それから先日の寫眞は不出來だつたから、今一度來て欲しい、と云ふ。

W家の門前で、私共はHさんに別れて、ホテルに歸つた。

室が奇麗になり、枕、Seat、かけ蒲團、テーブル被まで悉皆新しく取り換へられて、好い氣もちが私共を待つて居た。

(三)

夕食に、英吉利の士官がこんな事を私共に話した。それは日本の驅逐艦が、各一隻の獨逸潜水艇をみやげにもらつて、それを曳いて日本に歸る、と云ふのだ。“その容子を想ひ見ると、可笑しくてな

りません”と士官は笑ふ。そんな潜水艇なんか、撃沈してしまへ、と思ふ。

其 七 埃 及 論

(一)

五月十一日。日曜日。禮拜があると見えて、獨逸婦人子供が、今日は大勢来て居る。家の二幼女が、アマリリスの花を私共の室に持つて来た。妻が紙の鶴を二羽折つて糸をつけ、Celloidの十字架を添へてやつたら、幼いふたりが大悦びする。母のMさんも悦ぶ。私共が客間で書き物をして居ると、男の子や女の子が次から次からやつて来るので、妻は鶴を折つてはやり、折つてはやりして、鶴の七羽位彼女の手から生れた。

室に歸ると Jamireh が一皿の桑の實を持つて来てくれた。よく熟して甘い。自家から持つて来たのだ。亞刺比亞語で Tūt と桑ツットの實を云ふ。Jは教會に行くと言ふて、青い服で今日はしやれてゐる。

午餐に出ると、若いシリア紳士が居る。若いシリア婦人がピアノを弾いて居る。夫婦かと思ふたら、兄妹であつた。姓は Kharry。兄は埃及歌番がほめて居た Jenin の知事の秘書官で、妹は其處の Typist。日曜で、自動車で遊びに来たのだ。Kさんは一向日本を知らぬ。支那とごつちやにする。妹は最初ピアノの上から一目見て、

私の髪が伸びて居たので、Two ladies と思ふたと云ふ。兩人は昔のサマリアのセケム即ちナブルスの人。Kさんに Nablus の宿の事を聞いて、歸途には、Haifa に出るよりも、サマリアを経てエルサレムへ歸らう、と私共はほぼ思ひ定めた。

午餐後、婚禮の行列を見に出る。ホテルを出ると、大道を一部シヤボテンの生籬で隔てた可なり潤い草地がある。私共の來たては、英吉利兵士が天幕を張つて居て、よく夕景に無邪氣なカアキイのBoys が體操をやつたりして居た。其處が、今日は、婚禮の行列と見物で一ぱいになつて居る。環を作つての踊は、最早済んで居た。私共がキモノで出かけたので、見物人が却て見物せられて、きまりがわるい程だ。其内行列がぞろぞろ動き出した。男が二列に相向ふて、“Allah……………”と歌ふては手を拍き、手を拍いては前に進む。よく分からぬが、“Allah タツチャアウントコナア”と云ふやうに聞こえる。或者是手鼓を鳴らし、振つては踊る。“アルラアタツチャアウントコナア”で、行列が踊りながら進むと、騎馬の男が後につづく。亞刺比亞風の冠り物をして、右手に花を持つて居る。男の背に紅い着物の子供がしがみついて居る。子供は革帯で前の男に結びつけてある。私共が見て居ると、土人の子供がうる覚えの英語で、あれが花婿、と教へる。色の黒い、若くもない花婿だ。而して、あの子供は一體何だらう？騎馬の後から、緑大驚絨の婦人が徒歩で隨ふ。其右手は馬上の紅衣の子供を撃げるやうにして居る。それが花嫁である。あまり若くもない花嫁だ。多分子供を連れて再嫁だ

らう、と妻は曰ふ。何れにせよ、夫は馬上、妻は徒歩——東洋式だ。云ふ迄もなく、回教徒の婚禮。

室に歸つて居ると、先刻のKさんの妹が、茶の案内に來た。客間には、色白のシリア娘が二人と、赤帽の青年が居る。妹Kさんは、Bethlehem の學校出で、二人の兄は、此ナザレ人で學友、青年は其弟である。外に若い英兵士が二人。此は自動車掌であつた。シリアの娘達が、私共と恐ろ握手する。妻が薔薇の花を娘の一人の髪に挿してやらうとすると、“否、どう致しまして”と頭をすくめた。食堂で茶菓の馳よになる。娘達は少しピアノを弾いた。名刺の交換をすると、やがてK兄妹は自動車で去る。バルコニイからハンカチを振る。

日曜で、ホテルにもオルガンが鳴り、讚美歌が響く。少し前に、私の窓から見て居ると、主婦のFさんが寫眞機を葡萄棚の近くに据ゑて、食堂横の石段に子供を立たせ、或は赤ん坊を女中に抱かせて、寫眞を撮つて居た。Fさんは、男まさりで、何でもする。先日は土人から馬何駄と云ふ櫛の根つこを買つて居た。色白の好い體格の四十女、鼻下に薄つすら毛の生えたFさんが、腰に手をあて、兩脇股つて、ぢつと斤量の目を見て居る所は、好い家もち女であつた。戦争で、此邊も樹木は片端から切り倒し、今は其根株も中々得られぬ。此頃では、暇さへあれば、私共の窓下で、Abdul が鼻歌まじりに薪を割つて居る。随分堅い根株だ。ひどいのに會へば、Abさん斧を打込むだま、薪ぐるみ背向きにして、やつと氣合をかけた

つ割つて居る。

夕方少 Jamireh が遊びに来た。風をひいて、頭痛がすると云ふので、妻は今朝 Brandreth 膏をこめかみに貼つてやつたが、また取りかへてやつた。而してアンチヘブリンをやると、Jは喜んで直ぐ服した。口が悪いだらうと云ふて、妻はまた有平糖の一片をやつた。妻は自身の歯痛の話をした、多くは手揉で。Jも歯痛の経験がある。獨逸の醫者に歯をぬいてもらうたら、あまり藻掻くので、醫師は平手でびしゃびしゃJをくらはせ、兵士にJの両手をしつかり握らせて、ぬいた。其醫師は、英吉利人が来た時、戦死したらしい。自動車に乗つて、獨逸の將校等が逃げる所を、英吉利兵がパンパン射撃した。或者は死んだ。捕虜になつた者もある、私共の室にも、獨逸兵士が五人一時間宿泊した。土耳其兵士は、實に無惨な者で、パンもなければ、着物も靴もなく、而してこればかりで、とJは虱をとる眞似をした。Jは色色の寫眞や繪葉書を持つて来て、私共に見せる。ナザレが、英軍の手に落ちる以前の模様が覗かれる。虱と云へば、妻は先夜えたいの知れぬ虫に螫され、潔癖の彼女は、其正體をつきとむべく大骨折つたが、いまだに分からぬ。

(二)

夕食に出ると、若い英吉利の士官が居る。Safed から来たのだ。ナザレには、昨年九月攻め込んだ時、此ホテルにも来て泊つたと

云ふ。Cambridge の大學をもう少しで卒へて印度の官吏になる處を、戦争のお蔭で、七ヶ年の損をしたと云ふ。戦争はもう澤山。“No, thak you.” 何の利益もなかつた。“自由もなければ、個人もなく”とこぼす。私は曰ふた。さうでせう共。獨逸人にならぬに、獨逸人と戦争は出来ないから。

食卓には他に人もないので、私共は食を終へても話しつづけた。彼が印度勤務志望から、話は印度、それから埃及に及ぶ。彼は云ふ。埃及人は駄目です。第一、一國語を有つ事が、國の強味であるに、埃及人は、自國語の外に、佛語を話し、獨逸語を話し、英語を話す。

埃及獸醫が居合はせないのは、遺憾だ。私は、私のロイドジョンオジに送つた手紙、General Allenby に書きつつある手紙について話した。私のまづい英語は、まづい爲に却て力強くぼつりぼつりぢりぢりと彼に迫つて往つた。英吉利は、何の爲に、埃及を支配する乎。埃及人の爲め乎。若し英吉利自身の爲なれば、英吉利は勿論埃及の感謝を期待する譯には往かぬ。埃及人は、英吉利を信頼する乎。十中の八までは、若し正直にして且勇らなば、否と答へる。私は斯く云ふた。

青年士官は云ふ。埃及人は犬見たやうで、言ふても聞かしても駄目、打つより外に躰は出来ぬ。私は曰ふた。犬でも、誠は徹る。愛しなれば、打つても駄目。また、よく愛さるる犬は、打つ要はない。

“唯尊敬のみ自尊を喚び起すものです。”

“それは全くです。”

“英吉利は、埃及を尊敬して居ます乎。”

彼は埃及人に尊敬すべく何ものも見出さないと云ふ。

私は私共がエルサレムで目撃した英吉利兵士が上人を打つた事を語り、東方と西洋の間には、行き方の相違があるから、己を以て直ちに他を律してはならぬ事を述べた。東西洋の別はさて置き、其東方と云ふ内にも、現に私共の日本自身が支那朝鮮に關して毎と手こずる事を私は懺悔し、それは日本がまだよく支那や朝鮮の腹中に入り得ず、兎角上手から平壓しにかかるからである、と云ふた。

回教が埃及其他の呪咀であると云ふ私の説と、埃及婦人の覺醒が埃及の曙光と云ふ彼の意見は、双互の一致點であつた。

私は言葉をあらためた。

“それで、あの弱い子供の埃及が、一人前の強健な男になつたとすると、あなたは悦ぶでせうね?”

“殖民は英吉利の天職で、文化は英吉利が先鋒”の一本鎗でかかつて來た青年士官は、否と云はれない羽目になつた。澁澁ながら“然です”と答へた。

而して今から二本手紙を書かねばならぬから、と云ふて立ち上つた。

“握手をしません乎。”

私は伊から、呼びかけた。彼は立ち戻つて、食卓感しに私共と

握手して去つた。

歸ると十時近い。二時間近く話したのだ。

窓の外は、月光が雪のやうに白い。

(三)

五月十二日。今日の温度、朝六十四度、正午六十六度。

朝食に出ると、昨夜の青年士官がピアノを弾いて居た。カムブリッジの大学生で、姓は Thornycroft。著名な彫刻家の何かでないか、と後で思ふ。茶が薄いとこぼし、持參のクリームなど振舞ふ。

客間で書き物をして居ると、佛蘭西人かと思ふた程やはらかな紳士と、レデイが二人來た。ハイファに居る獨逸牧師であつた。昨日の日曜禮拜を司どる爲に、ハイファから來たのであらう。

それからバルコニイ近く大きなパレスチナ地圖を掛けたテエブルの處に移つて、ペンを執る。

昨日もちらと見た赤帽の老紳士が、今日は細君を連れて來て居る。ナブルスの人で、女兒を病院で手術してもらふ爲に、夫婦で連れて來た事を後で知つた。亞刺比亞出身の門閥で、土耳其政府の希臘公使など勤めた人、と云ふ事も後で知つた。私は彼の短い白髯と赤い土耳其帽の映りを美しいものに見て、何となく親しみを感じたが、先方が英語を話さず、此方が土耳其語、亞刺比亞語、佛語すら

話さないで、双方もどかしいこと夥しい。然し彼は、亞刺比亞も日本も同じ亞細亞に國して居ると云ふ意を私に通じた。其處に掛かつて居るは、パレスチナの地圖であつたが、私は其地圖を指して、英語と手振りて、左様、日本は亞細亞の東の端、土耳其亞刺比亞は西の端、日本が亞細亞の右の手なら、土耳其亞刺比亞は左の手、と云ふ意味を答へる。其處に、主婦のFさんが來たので、赤帽の老紳士は、其内其妻君に會ふてくれるやうに、とFさんの口を以て私の妻に頼むだ。

其處に通るかかつた先刻のハイファの獨逸婦人が立止まつて、妻と少し語を交へる。年長の婦人は、印度に居る其姉妹が、私の妻に肖て居るので、殊になつかしい、と云ふ。

午餐の卓には、新顔の英吉利士官が一人ふえた。柔和な、と思ふたら Clergyman である。長い卓の一端には、ハイファの獨逸牧師等三人が居る。牧師と牧師、それでも敵味方で、席の空氣は重い。私は當面の英士官を相手に、構はず高聲に氷を打破つた。喧嘩の後で、所謂敵に會ふのは、きまりの悪いものだ。と云つて、私は十三年前日露戦争の後で、露西亞に往つた時の事を話した。其時は、此ナザレにも來て、ハイファから君士丹丁堡バルカン諸國を経て、ルーマニヤのガラツから船でダニユウプを下つて、露西亞のレニイに上つたが、其船が露西亞の船で、船長夫婦、船員、船客、皆露西亞人の中に、日本人の私が一人颯然と舞ひ込んだので、互にちよつと異な氣がしたが、顔見合して居る内、何方からともなく笑ひ出し

て、其笑が一切を融いて了ふた。

食卓の彼一端から、先刻妻を其姉妹に肖て居ると云ふた牧師夫人が聲をかけ、思ふ様に妻と話せないのが残念と云ふ。牧師はこれにつづいて、神の前では皆唯一の言葉を話す、と云ふた。私は、日本の諺に、“眼も口程に言ふ”といふ事があると云ふた。

室に歸ると、妻は Autograph book を持つて往つて、獨逸の人達に署名を求めた。皆悦んで書いた。ハイファの家は、英吉利人に占領され、家族はカルメル山の小さな家に住んで居る。是非歸りに寄つてくれ、と云ふたが、私共は多分サマリヤを経て歸る、と妻が言ふたので、ひどく残念がつて居たさうな。

其 八
REV. MANSUR

(一)

五月十二日。午後三時頃から、今日は洋服で孤女院に出かける。市場を通ると、ある店に、昨日二人の姉妹とホテルに來た彼赤帽青年が居て、“Good afternoon”と挨拶し、握手する。巻をぬけて、石垣下を通る。土人の娘等がきやつきやつと騒いで、私共の上から草花や木の枝など投げる。英吉利孤女院の門内には、土人の女教師が二人、二十四五人の土人の娘に遊戯を教へて居た。少女等の中には、先日私共を Nebi Sein に案内したあの娘も居た、と後で妻が曰ふて居た。來意を聞いて、女教師の一人の女生に私共を案内さす。汗になつて、高い石段を上る。

Miss Newey が機嫌よく私共を迎へ、玄關近い小さい客間で、茶を出し、菓子を出す。小さい Terrier が來てじやれる。ダマスコの犬で、名を“Punch”と云ふ。婆さんのかと思ふたら、それは別な Lady のであつた。やがて、其 Lady が件の小犬を連れて石段を下りて行く後姿を、婆さんは頭でしゃくつて、“あの Lady はあの犬の屬いぬです”と皮肉を云ふ。婆さん Müller 夫人の家でより少し碎けたが、皮肉はどうせ持ち前なのだ。パレスチナに來る前も、英吉利で博愛

的の仕事をして居たさうだが、婆さん自身孤兒ではなかつた。何で結婚しませんでした？ 気に入る程の男子がなかつたのですか？ と私も少し皮肉に出る。“否、自由が欲しかつたから”と N 女史は答へる。“成程、お望通り自由をあなたは得ましたね。而して其自由は、冷たいものであつた。あなたの皮肉が自白です。”と私は心に謂ふて、口には言はなかつた。

私共は、N 女史の案内につれて、建物の内外を見て廻る。随分大きな建物で、設備も完全して居たらしいが、戦争中に獨逸人土耳其人が占領して、思ふ存分荒らして居る。家具と云ふ家具は一切持ち去つて、これだけ残してあつた、と N 女史が示すは、耶蘇が女兒を祝する俗悪な一面の油繪だけである。それは分捕にかけて度量の大きい土耳其人すら御免を蒙つた程まづい畫であつた。客間の家具其他も、やつと寄せ集めの間に合はせてあつた。がらんとした建物に、ぼつりぼつりと掃除人夫や修繕工が仕事をして居るが、この後始末は大變であらう。N 女史の後から、建物を見終つて、後庭に上つて見る。獨逸人のうつちやつた大形の軍用輜重車などが、其ままになつて居る。こんな重い物を、よく此様な高處に曳き上げたものだ。此處は運動場で、樹木が美しく茂つて居たが、皆伐られて了ふた、と N 女史がこぼす。十三年前、私がナザレに來て、ネビサインの山に上る時、サイブレスの美しい林を擁した一區の建物を案内者は指して、あれが英吉利の孤女院、と教へた事を私も覚えて居る。其樹木は伐られて了ふたのだ。それから無花果も、葡萄も、柘榴

も、實る木は皆伐り倒してある。後の屋根のない建物を指して、あれは食堂でしたが、廢にされ、而して何のいたづらか、子供達の部屋は、屋根まで破しました、とNさんは訴へる。此處からは、ナザレが一目。獨逸土耳其の本管にした筈。本管にした上に、憎くくてたまらぬので、餘計ないたづらまでしたのだ。そんな人間のいたづらには頓着なく、今を春べと緋の野芥子や金色の春菊が咲いて居る。

客間に歸り、Autograph book を出して書いてもらう。私共も來訪帳に記名した。それから少しながら修繕の中に 1 磅喜捨する。

“戦後初めての寄附です”とN女史は悦んだ。而して石段上まで送つて来て、しばらく其處で立話した。N女史は、土人牧師に紹介の名刺をくれ、眼下の一つの建物を指さして、あれが其會堂で、牧師館は直ぐ其近所、と教へてくれた。先刻の展望より大分下つて居るが、それでも位置が高いので、此處からもナザレは一目に見晴らせる。昔のナザレは十一呎も下に埋れて居るさうな。“何でも、角でも、下に下にと埋れて行きます。”とナザレの清少納言は迷懐するのであつた。

(二)

私共は、N女史に別れて孤女院を出た。上での見當はついたが下りての路は中々分からない。土人の巡查に一度、それから此が其

牧師かと思はるる土地の紳士に一度路を問ふて、やつと牧師館に往つた。五十位の婦人が私共を階段の上に迎へる。それが牧師夫人である。牧師 Mansur 君は、眞白い頭をして居るが、五十六で、細君は四十九ださうだ。

今日は牧師の At home day と見え、客間は可なり賑合つて居る。私共が導かれて、Sofa にかけると、客は皆さざめいた。亞刺比亞字の額が掛つて居る。“我れ平安を爾に遺す”と云ふ耶蘇の言葉。水煙草を吸ふて居るは町長さん。私の銀時計につけた紫水晶の印材をひねくつて、頻に賞翫する。日本も戦争で金が儲かつたでせう、と町長さん云ふ。儲けた者もあれば、儲けぬ者もあります、其證據に米が上つて昨夏は米騒動さへ起つた、と私は答へる。女客の中には、新婚二月になる花嫁が一人。ヨリふるい花嫁は、金貨の頸飾を下げて居る。先刻私共をN女史に案内した女生徒も居る。皆珍客を迎へて大悦びである。其筈だ。日本の男子でナザレに來た者は、十數人はあらう。然し日本婦人がナザレに來たのは、否パレスチナに來たのは、妻をもつて初とする。日本から夫妻の來訪は、開闢以來の出來事である。日本服で來ればよかつた、と私共は思ふ。

珈琲が出る。干無花果、鹽豌豆、それから南瓜の砂糖漬などを私共は摘まむ。

M牧師夫妻は、結婚後二十六年になる。而して此五月十八日が結婚日ださうだ。私共の結婚も丁度二六十年目、而して五月五日が結婚日であつた、と云ふて、主客して其偶合を悦んだ。それから今

一つMさん夫妻に子供が無いのも、私共同様であつた。

Autograph book が出る。牧師の名は Asad, 細君は Lulu。
Lulu は亞刺比亞語の“眞珠”。

私共は牧師夫人其他と握手して、牧師と町長の案内で其會堂を見に行く。Christ's Church は1817年の建立、英吉利の C. M. S. の創設にかかる。M牧師が四代目（町長さんは三代目と諍ふ）で、最早職に在る事十四年ださうだ。M牧師が鍵で戸を開けて、會堂の中を見せる。型の如く質素ながら洗禮盤なども備はつて、小ぢんまりした會堂である。正面に掛けた亞刺比亞字の額は“主の靈われに臨めり——” 耶蘇が故郷の會堂で最初の説教をした時、開口第一に讀んだ預言者イザヤの句である。會衆は三百人ださうな。園には松や梅檀、畸形の仙人掌、それから馬鈴薯などが植わつて居る。牧師は薔薇の兩三枝を折つて妻にくれる。

會堂を出て、市場の方に行く。希臘僧が來かかる。Mさん達が何か云ふと、僧は私共を其寺に導いた。昔の猶太人の會堂が構内にあるのだ。第一の建物から私共は第二のヨリ低い古いのに導かれる。非常に狭い。壁など如何にもふるい。耶蘇が預言者イザヤの言葉を引いて、其豫言の應驗を主張し、果ては故郷人と衝突して、あぶなく山から突き落された、其會堂が此れか。兎に角斯様な小さな會堂であつたにきまつて居る。芥子種は小さいが特色なのだ。私共は壁を撫でて見たり、鋪石を踏んで見たりする。鋪石は、後のものだらう、と云ふ事であつた。

希臘僧は白いゼラニウムと淡紅のペコニアの花を妻に折つてくれた。

マリアの井の近くのマリア寺に案内しやうと云ふ町長さんに別れて 私共はM牧師の案内で羅甸寺の方へ行く。途中で蠟燭を一本買ふ。牧師は其信徒のレエス店に私共を誘ふた。30Pのを一つ買ふ。羅甸寺に行く。コンスタンチン時代の會堂の殘礎が掘り出されて、白く地面下に見えて居る。時刻晩く、寺の戸がしまつて居たので、私共は門前で牧師と別れて、ホテルに歸つた。

(三)

Jamireh と Rosé が遊びに來る。ジャミレは婚禮前で、赤く爪を染めて居る。日本では少女がよく鳳仙花で染めるが、ジャミレは何で染めたか、よく分からぬ。ロオゼは十六、馬の様な娘だ。支那下駄はいて、あの豌豆見たやうなハムモオスをむしやむしや食ふて居る。先日窓から覗いて居ると、葡萄棚の下にロオゼが立つて、葡萄の新芽をむしつては喰ひ、むしつてはむしやむしや喰ふて居た。Jが妻に亞刺比亞語を色々教へる、妻は齒痛で含漱するに湯を欲するので、水かわりに湯を持つて來い、と言を悉して言ふが、Jはそれを亞刺比亞語の實習と思ひ入つて、中々持つて來ない。

Wagner の姉妹が來た。Eさんが先日遊びに往つた獨逸殖民地からの花だと云ふて、美しいカアネエションをくれた。Hさんは

General Allenby に手紙を書いて来た。読んで見る。随分骨を折つて書いてある。私は私の手紙が出来次第封入して仕出す事を約束する。Eさんが私共の話をしたので、獨逸殖民地の人人が會ひたがつて居る、往つてくれまいか、と云ふ。ハイファへの半途ださうだ。獨逸の農場は見たいし、殊に先日夫妻でまた見に来やう、と言ひ合ふたあのエスドロン平原を見下ろす途の景色もまた見たいので、一議に及ばず行く事にする。Eさんは學校があるので、Hさんが同行するさうだ。明日は陥穽山に往つて見やうと云ふて居たが、それは他日に延ばして、兎に角明日の正午に馬車で Bethle'em に行かう。Bethlehem は、聖書に所謂耶蘇の誕生地のあのエルサレム近くのベテレヘムでなく、ガリラヤのベテレヘムなのである。“ベテレヘムの夕日は美しい”とE姉が云ふ。“それに歸途は月も好し、”とH妹が相槌うつ。

夕食には、埃及の獸醫が歸つて来て居る。これで都合三十箇村廻はつたと云ふ。明日は午後ハイファに歸るさうだ。General Allenby は、つい昨日テベリアを立つて、ダマスコへ往つたさうだ。パレスチナに来て居た事すら私は少しも知らなかつた。

食卓には新顔のシリア紳士が居る。眼鏡をかけて、蒼白い。エルサレムから来た財務官さうな。前に日本人を見たことがあるので、私共を日本人とは知つたが、戦後此様な處に私共が居るのに駭いたと云ふ。

私は言ふた。“私共は二人で、二人は一緒に居るから、我々の居

る所即ち我々の Home です。我々は蝸牛のやうに Home を背負ふて世界を廻はる。今我々の Home はナザレにある。十六日にはテベリアに移る筈です。”

其 九
ベテレヘム

(一)

五月十三日。美晴。ベテレヘム行きの際に、十一時三十分
分に午餐。今日ナザレを去ると云ふ埃及獣醫の影が見えないので、
主婦のFさんに傳言を托する。Fさんは一人同乗を願はれまいか、
と云ふ。よろしい。

正午少し過ぎ、Hさんが来た。妻とHさんと今一人便乗の若い
婦人は後に乗り、私は馭者座にかける。私共は今日も大島に靴。馬
は黑白の二頭挽き。

往きには別路、と云ふHさんの提議で、私共が来た時とは反対
に、馬車はホテル前から北へ、盃の底の様な處につけられた馬車道
を、ずつとマリアの井まで往つて、それから電光形に坂を上る。坂を
上り果てて、丘の頂邊に來ると、忽ち北方遙にヘルモン山が現はれ
た。

“あれがヘルモンだ。”

と私は妻を顧みる。而して私共は手を拍いた。山色は染めたや
うな碧、それに、半峰以上には雪がまだ眞白である。海拔九千呎、シ
リア第一の高山ヘルモンは、好い山である。詩情饒かな亞刺比亞人

は、之を Jebel esh—Sheikh と呼ぶ。“白髮の山”の義である。また
Jebel et—Telj “雪山”とも云ふ。“雪山”はヒマラヤに獻ぐべきだ
が、“白髮の山”は好い。山の位は別として、男體山の黒髮山と名は
美しい一對である。

馬車 丘を 上れば 北に ヘルモンの
白髮 高く そそり 立てるも

シリア なる 白髮山 は 青嵐
しろかみ

五月半 も 雪白 に して

坂の上で、路が東西に岐れる。東の大道はカナを経てテベリア
に行く。私共の馬車は小さな石ころ路を西へ少しづつ下りて行く。
行く手に、ハイファの海が青く見えて居る。海を見たり、右にヘルモ
ンの雪を眺めたりして行く。海の方から風習と吹いて來る。馭者
と並んで腰かけて居る私のヘルメット帽が、しばしば飛びさうにな
るので、鼠の絹ハンカチで帽子の上から頬かむりする。山腹には農
爺や女子供が、柄の短かい十月月位彎曲の深い鎌で、瘦せこけた大
麥を蒔つて居る。其處此處にひよろひよると立つた“つゆあふひ”
の花が、淡紅に美しい。

ヘルモンの 雪をば 北に アツカノ海
青き あたりを 望みてぞ 行く

麥刈りの 刈り残したる つゆあふひ
立てる 丘邊を 海の風 吹く

駱駝が二疋路に放してある。馬車が来たので、大にあはてる。
“臆病な動物ですから”とHさんが言ふ。今度の戦争では、英吉利の輜重兵など、駱駝に噛まれたり、踏まれたり、大怪俄した者が可なり多かつた事を、後で知つた。

小さな谷に、馬車は下りた。“柘榴の谷”と名づけたいやうに、夥しい柘榴の花ざかりである。橄欖や無花果、桑などもあるが、大部分は柘榴の木で、木は皆花の眞盛りである。一谷が皆園で、家と云ふ家もなく、人と云ふ人影も見えずに、葉は緑に光り、花は唯燃えに燃えて居る。其園を二尺幅の小川がごぼごぼ洩り洞つて流れて居る。濁り水ながら、水はゆたかだて好い氣もち。それにしても、よくも斯様に夥しく柘榴を植ゑたものだ。實の秋が思はれる。

柘榴の谷を過ぎて、相變らずの石ころ路を馬車はがとくる。“どうも路がわるくて”と、Hさん背から聲をかける。

道とあたりが開けて来た。麥畑がある。あの流れの末であらう、野水に架した低い石橋を渡り、後葉の緑な櫛の切株のちらばつて居る低い丘を上る。ベテレヘムは近い。小麥がすぐれて見事に出来て居る。

“獨逸人の麥畑は、直ぐ分かりますよ。”

とHさんは誇り親である。

(二)

やがて、馬車は低い丘を上つて、獨逸殖民村に來た。丘の上の大道をはさんで、西側に低い石塀で劃つた宅地のいくつが並んで居る。其一つ、西側の屋敷の前で馬車が駐まる、と、便乗の若い女は下りて、挨拶して往つた。それはホテルの若い方の女中 Margaret であつた。馬車は尙少し往つて、東側りある家の前に駐まつた。私共は皆下りた。時計を見れば、午後一時半。

家の主人で、英語の達者な Schmidt さんは、生憎ハイファへ往つて留守だつた。乳呑子を抱いた若い婦人が、私共を歓迎する。名は Maria。良人は獨逸でまだ兵役に服して居る。

私共が小さな客間の椅子にかけて居ると、中春のがつしりした四十前後の男がやつて來た。Hさんが紹介する。Herr Kuhnle は此殖民地の支配人であつた。Hさんの通辯で色々質問する。Kさんが板に貼りつけた大形の圖面を持ち出して色と語る。Bethlehem の獨逸殖民村は、ハイファから來て十二年になる。目下は十三戸。圖面を見ると、住宅から遠近のないやうに、土地が交互公平に劃つてあるのが面白い。

別室で茶が出る。パン、バター、蜂蜜、皆お手のもので、うまい。

夫無ふる 君が 心の たえがたや

セエクハンド に 力みなぎる

わたくしがこさへましたと出すバタの

味の濃さよ夫待てる人

あ い

私共はKさんの案内で村を廻る。先づ小學校及び幼稚園を見る。十三戸の村には恥かしからぬ建物。入口に“1917”と出て居る。1917年、即ち一昨年、本國ではまだ戦争の八合目に建てられたのである。二十前後の獨逸嬢が、七人の男女幼稚を教へて居る。皆桃の縫ひとりをして居た。壁には木銃が掛つて居る。Hさんは女教師に云ふて、子供を外に呼び出し、私共と子供との寫眞を撮つた。眩しい日光の中で、新獨逸の幼稚達とレンズに入るのも、嬉しい事であつた。

學校から私共は Margaret の家に導かれた。石垣の上に黒い犬が寝そべつて居るが、吠えもしなかつた。門内はさまざまの花が美しく咲き亂れて居る。小さな白い花をつけて居る香の高い灌木は、花嫁の飾にするさうな。何れ其花に飾らるる Margaret が出て來た。

“久しぶりに歸つて、澤山阿母の乳を飲んだらう”とHさんの通辯で廻りくどいしやれを云ふ。彼女は牝犬の如く身をくねる。二階のがらんとした客間に通る。Mの阿父阿母兄弟、他の人とも畑から來たままの装で、おのおの心からの強い握手をする。皆トルストイの讀者さうな。Hさんの通辯で、畑の話をする。甘藷は雨が少ない爲に出來ないさうだ。然し雨が少ない爲に、大小麥の收穫には好都



合である。

白葡萄酒が出る。手づくりさうな。歸りに馬車から落ちると大變だと云ふて、私共は一盞で止める。

下りて菜園を見る。甘藍や萵苣、花椰菜、苺などが何れも灌水されて居る。柑橘や果樹など色々ある。水は二吉羅米突も東の平野の泉から、器械で村のツルクに汲み上げ、而して鐵管で各家に頒つやうになつて居る。其外家毎に天水溜の井がある。

Mの家を辭して、今度は厩を見る。戦争で馬を徴發されて、今は六頭しか居らぬ。種々農具、器械がある。收穫場には、土地風に子供が平たい壓板の上に乗つて、馬が三頭それを挽いてぐるぐる廻はつて居る。此邊柵の木が多い。村はもと柵林を拓いたので、それは拓き残りの木であつた。

それから村の東側に出て見る。小高い丘の上の村、東南にはエスドロン平野の一股が、深い入江の如くさし入つて、其處には熟れかかつた小麥が西日にそよいで居る。村の生命の水の源は彼處、とKさんは半里も離れた東の方を指した。土人は交番に土地を休ませず、殖民地では化學肥料を使ふから休地はないさうだ。土人との關係を問ふ。土人は盗んで困るさうだ。Kさんは本國の戰場に居たが、殖民地が物騒なので、保護の爲に呼び戻されて歸つて來た、と云ふ事である。村の壯丁は皆戦争に出て、未だ歸つて來ない。あとは年寄女子供なので、少しは土人を使ふて居る。

Hさんは西側の一つの家を指して、これが Hotel Germania の

Maria さんの生家です、と教へる。紫の花蔓が其家を這ふて居た。

私共が Maria さんの生家を過ぎて K さんの家に往かうとする時、向ふの方からカアキイ服と一人の赤帽をのせた一臺の軍用自動車やつて来て、K さんは其方の應接に往つた。講和會議から派遣されて土地調査委員の一人が、獨逸殖民地の調査に来たのである。H さんは、Haifa に日本人の委員も一人来て居る、と云ふ噂をしたが、眞偽は分からぬ。

私共は K さんの家に往つた。小さな椅子が澤山。K さんは子福者であつた。玄關で編物して居た大きな娘の一人は、K さんの姪さうな。H さんは其姪に寫眞機をとらして、自身も私共とレンズの中に入つた。

K さんが歸つて来た。蠅の多い食堂で、またまたパンやバター、蜂蜜や茶の馳走になる。租税の事など聞く。殖民地は土耳其政府に、収入の十分一を拂ふて居たさうだ。それから水の税も出た。殖民地は全然自力で、何處からも補助を受けない。

客間に額が挂つて居る。“Dein Haus ist Dein Welt。”私がそれを見て居ると、H さんが讀めるでせうと云ふ。“左様、Your home is your world —— たしかカイゼルの語でしたね。”カイゼルの語では多分無かつた、と H さんは曰ふ。それから K さんと少し話して、私に向ひ、“分かりませう”と云ふ。“いや、少しも分からぬ。私の前では、如何様な密談をしても大丈夫です。”と私は笑ふ。周囲の土人が泥棒をすと云ふ事から、私は單獨幸福の出来難い事を云ふ

て、村の幸福の爲には周囲の土人がより幸福にせられねばなるまい、と云ふ意を述べると、H さんは赤くなつて、土人の不都合を色々と辯ずる。

私共は K さんの家を辭して、最初の家に歸つた。此處の Maria さんが色と取持つ。妻が赤ん坊をあやす。時刻も移るので、身仕度をしていざ歸りかけた處に、軽い馬車を乗りつけて Schmidt さん外一名が歸つて来た。握手し、Autograph book に書いてもらう間もなく、私共は馬車に上る。最初の如く私は馭者席に、妻は H さんと Margret の間に。M の家から、私共に見事なカアネエションを澤山にくれた。K さんの宅からも其他からも、カアネエションや白百合、薔薇の花の贈物で馬車の内は一ぱいになつた。

私共も粕谷で永年草花も手にかけて居るが、此處のカアネエションのやうに色の鮮麗な、而して香の高いのを見た事がない。全く乾燥の賜物だ。

(三)

午後六時、馬車はベテレヘムと見送る其處の人々を後にして、南に下つた。

谷に下り、紅く美しい薔の咲き亂れた路を少し往つて、また低い丘を上る。丘には今、後にして来た様な、農村がある。これも獨逸殖民地で、先のよりふるく、大きい。戦後の事とて、人が居ないか

のやうに淋しい。

また谷に下りる。而して向ふの丘の土人の村をさして、穂麥の掩ひかぶさつた路もないやうな處を馬車はさわさわと押分けて上つて行く。日はカルメル山に傾いた。落日の光を浴びた野づらに夕風がそよぐと、穂麥も草花もさわさわゆらゆらと波から波をうたして眼界の果てにまで及ぶ。馬車の庇から覗けば、十四日のまん丸な月がもう東に出て居る。

カルメルに日は傾きて エスドレの野に
穂麥 波よる 五月の夕

穂麥 夕風の丘 上り 行く
馬車の 庇の 十四夜の月

馬車は上つて村に來た。見た様な、と思ふと、それは私共がハイファからナザレへの途中で、馬車をとどめて晝食した、あの Jeide の村であつた。

これからは本街道である。

行く行く日が背に落ちる。月は面に上る。暮れやらぬ野の黄昏は、其ままだに月の夜になる。軍隊自動車にしばしば會ふたあの長阪の山を上つて、私共がエスドレの野の大量に駭かされた邊まで來ると、月夜ながらに最早全くの夜になつた。馬車の上から見やると、エス

ドレの大野は、月光に唯茫として居る。白白とさながら雪の布延く山の上の大道に、二つの馬の影が黒々と落ちる。白と黒との馬背に流るる月光が寒い。妻は後でショオルにくるまり、馭者座の私は夏外套を被つた。馭者も毛布で膝を巻いて居る。寒い。然し好い月夜だ。私共はHさん達に歌を所望する。若い二人が讚美歌を歌ふ。妻も唱歌を歌ふた。私も小聲で追分を歌ふ。馭者にも何か歌へと云ふたが、歌はなかつた。

黑白の馬の背すべる 月光の
五月も 寒き ナザレ の 山路

黒黒と 影馬二つ 駛り 行く
ナザレの 山路 馬車の 上の 月

エスドレの 野はも 煙りて 山路行く
月の 夜馬車ゆ 歌の 流るる

獨逸處女 二人 が 歌ふ 歌聲の
月に流るる ナザレ の 山路

ナザレの入り口に來ると、向ふから大きな Candelabra 式の炬火をともして女が來る。婚禮に行くのさうな。五月はまことに此處

の婚期月だ。

ホテルに歸り着いたは、夜の八時であつた。

其十一
Allenby

(一)

ベテレヘムからホテルに歸つて、不圖客間を見入れたら、エルサレムのGrand New Hotel で見馴れた跛のシリア紳士が来て居る。悦んで握手する。

夕食に、件の紳士と五十餘の丈高いカアキイ英吉利人が私共と相對する。英吉利人は、直ぐ佛蘭西語で妻に話しかける。“彼方は佛蘭西人なのですか?”と私は跛紳士に問ふた。勿論英吉利人を承知の上で。跛さんは笑つて、いや英吉利の方で、稅務長官です、と云ふ。エルサレムで跛さんの顔は見馴れ、一二語を交へた事があつたが、何をして居る人か知らなかつた。おとなしく、ちつと書き物などして居るのを見たから、Author かと思ふて居た。跛さんと私の問答を聞いて居た英吉利人は、フンよく話す、てな事を獨語する。私の腹の虫が眼をさます。

稅務長はさもくたびれたと云ふやうに、其長い體をぐつたり椅子に寝そべるやうにして、顔調子を下ろして、東京は好い City かなどと問ふ。私は虫を抑へて平凡な答をする。稅務長が葡萄酒を私のCup に注がうとする。“No. Thank you.”妻のに注がうとする。妻

も “No. Thank you.”

主婦のFさんが入つて来た。ある書状の届け先きを聞きに来たのだ。税務長官長い體を振り向けて、尻目にかけるやうにして、何か云ふ。笑顔と手振で、Fさんは去つた。

私の不機嫌を笑止に思ふたか、跛さんはエルサレムで私共と知り合になつた Foa さんの話をする。埃及英吉利銀行頭取、並に南米の二銀行頭取で、英吉利の皇后にダマスコからみやげを買つて往つたなどの話を半長官に、半私共にする。私共の爲に債券を上げやうとしてくれるのだ。私は勉強して生返事をする。

跛さんが二つの新聞を私に與へた。General Allenby がつい先日此ナザレを通つてテベリアに往つた事、今一つは講和會議で青島が日本に一任ときまつた事。私は曰ふた、それはつまらぬ事です、青島なんか、あれは元來支那のもので、日本にもらつたつて仕様がなない。

跛さんは、吾意を得たと云ふやうに、相鏡をうつた。

然しこれは會議の経過と、議決の内容を知らなかつたからなので、日本の血を以て獨逸から受取つた青島は、日本の手を経て支那に還るが當然である。詩かなものは苛れぬ。價を拂はずに、得る権利はない。自然は公平だ。人間は正直だ。日本も對獨戰に投入しただけのものは獲たのだ。それ以上を望むは、無理である。それ以下に甘んずるのは、卑怯である。

私は快快として妻と室に歸つた。ホテルに来て以來、食料は少

なくも、午夜の食後に好物の柑橘は一つ宛必添ふたが、それが追まづくなり、小さくなり、到頭盡きたと見えて、今夜から卓上に跡を絶つたのも、物足らぬものの一つであつた。

(二)

五月十四日。早朝から General Allenby に下の手紙を書く。

Nazareth, 14 May,

The first year of The New Era.

General Edmund. H. H. Allenby

Dear Sir:

Of course you do not know me. But I know you. It was in Cairo on the afternoon of 25th of last March that I happened to see you.

We—Myself and my wife—were coming back from the Museum to Shepheard's Hotel when our carriage had to stop before Esbekia Park. The street has been cleared for some purpose. Presently, we saw several motor cars coming in succession from the direction of the station. Surely some important personage must have arrived. Cars passed.

On a car, a general in khaki was sitting with most serious,

we thought, mien. And well he might, for what he had come to undertake was much more heavy and trying task than to drive away the Turks and stray Germans from Palestine.

Now, let me introduce myself to you.

I am Tokutomi Kenjiroh, a Nihonese, 50 years old, literary man by profession, Christian by faith. I and my wife left Nihon on 27th of January to make a trip round the world. What for? Who sent us? That I do not know. Perhaps we are a pair of sunbeams sent to make a golden girdle around the world. We landed at Port Said on 13th of March and directly went to Cairo where we stayed over half a month, waiting for the permission to proceed to Jerusalem.

It was during that stay that we had the chance of seeing you. At last, by the end of March we were allowed to come to Jerusalem. Whole April we spent there. On the first of present May, we left Jerusalem, and on 4th inst., came to this Nazareth where we have already stayed more than a week. For me the Holy Land is no strange land at all. In the summer of 1906 I had come to Palestine as a pilgrim. I spent some three weeks in this land, and then I went via Constantinople to Russia. I intended to make trip round the world then, but had to return directly from Russia by Siberian railway to Nihon. Why? Time

was not ripe yet.

I had thirteen years more to wait. Thirteen years have passed. The stupendous war is just over. And now, lo, we have come!

I know you are a good Christian. We too love, and entirely believe in, Jesus. Here at Nazareth where he led thirty years of earthly life—1900 years ago? Nay, but yesterday it seems to me!—musing on the condition of humankind I have come to the conclusion that at this moment he must appear again to establish the kingdom of God over the world. Neither war, nor peace conference, nor anything, nor any one could renew the earth. None but he could reform the world.

Come he must, not in spirit, but in actual flesh. What were promised so distinctly in Bible shall be fulfilled, not in dim future but in vivid present. We have had enough of the Cross. Of dead Jesus and dying Christ we have had enough, nay, more than enough. For nineteen centuries we professed to be Christians and yet we did nothing but to crucify him over and over.

Are we to crucify him forever? No, general, the reign of the Cross must cease, for the reign of Cross must mean the reign of devil. Indeed, Devil had had too long a reign. Away

with the Cross! No more of the bleeding Christ! Let death with it's pain perish and Life with it's joy shine in it's glory! To cross we must cling no more. Living Jesus, risen Christ—to him we must look up. Bloody war without pararell in the history of mankind, is over. What a gigantic cross! Down with the cross!

Almost two thousand years have passed since his first appearance here. Is it not the time the world should learn to do better by this time?

Decidedly he must come, the Prince of Peace! New Era must begin.

As for your task in respect to Egypt, I would not like to say anything at present. But I pray and hope that Egypt will find not merely a friend but the very father in you—father who would be glad to bestow anything needful for the growth of his child and who take delight and pride in making his child a man.

Yours truly,

Tokutomi Kenjiroh

Hotel Germania,

Nazareth,

Palestina.

P. S. Here at Nazareth, we have come to know a German family by the name of Wagner. Melchior Wagner the father, miller by trade, old man of seventy-three and his wife the old woman of just seventy, emigrated here from Germany fifty years ago. They were married in Jerusalem. All their children were born at Nazareth. They seem to be good Christians, upright and hard working. Their two daughters live here with them. But two sons are at present in Heliopolis near Cairo as the civil and the military prisoners. Of course the old ones sadly miss their sons. They trust they will be given back after all. But the uncertainty as to the time hangs very heavily over them.

More over, madam Wagner's sister-in-law, an old woman of over seventy, is with her husband and daughter imprisoned in a hotel at Helwan. 800 Germans are made to live in that one hotel, it is said. The great heat and close living tells much on them. The afore said old woman—Gertrud Frank is her name—is said to be seriously ill—in fact dying. Wagners here are in great anxiety. But they could do nothing. They themselves are a kind of prisoners here. So they asked me to write a line to you to somewhat lighten the heavy burdens of their

relatives and the fellow country men and women. I persuaded them to write their own appeal to you. So the letter here enclosed. There is no need of adding any word of mine. You know how to deal with. Only I assure you that even a cup of fresh water given to them will make me glad and grateful as given unto me.

P. P. S. I have just heard of your passing through this very Nazareth to Tiberias and thence to Damascus a few days before. Well, at Cairo I saw you, but you did not know. Here at Nazareth, you passed, but I did not see. Over this letter which I send to Cairo, I hope we meet face to face.

* * *

上の手紙を書き終ると、Hさんが齋らした陳情書を封入して、私は郵便局に持参し、書留で仕出した。土人の局員受取つて、器械的に受取をくれた、受取人ゼネラル Edmund として。

其 十 二 F o o l s !

(一)

Allenby 状を書いたので、一荷下ろした私は、最早Hotel Germania も後一日ノ名残になつたと云ふ心で、ぶらぶらそこらを歩いて見る。私共の室の隣、埃及歌醫が居た室には、扁平な大盥を据ゑて、Bath の用意が出来て居る。此戦後不自由な女ばかりのホテルに来て、Bath の贅澤などするは、例の長身の税務長官だらう、と思ふ。客間と食堂の間を少し行くと、右手に薄闇い窖のやうな室は、即ち帳場で、晝間はFさんが、其處で裁縫したり、計算して客の bill を書いたりして居る。表へ下りる階段口を踏み切つて突當り、右に折れると、壁に珈琲の畫びらが貼つてある。土人の爺が跣足で水邊に立つて居る。珈琲の箱をやつこらさと負ふた畫模様が、大きく出て居る。其口の處から、誰のいたづらか、ペンで大きく泡を吹かせ、中に“Bihk sheesh”と云はして居る。何れ東方人の金ねだりにつくづくたんのうした若い英吉利士官でも滞留のうさはらしに書いたのであらう。それが私を含笑ませる。然し私自身も東方人である。ある處は全く西洋人に共鳴しても、ある處は如何しても東方人を脱けきれぬ處がある。永い月日の累積は、なかなか一朝に

轉換し難いものがある。私はカンタラ驛での私の失策を書いたが、ナザレでも一つ失策があつた。

主婦の Maria さんに今朝會つたので、昨日はベテレヘムに往つて “Your home” を見ました、と云ふたら、おとなしい Maria さん少し憚びない貌をして、“私の家は此處です。”と私は一本參られた。日本人も白装束して花嫁は生家を後にする。支那人でも嫁ぐを“歸”と謂ふ。嫁した婦人の Home は夫の家、子女の家でなくて何處だらう？私は“あなたの生家”あるひは“最初の Home”と云はねばならなかつたのだ。

五月五日の山のぼりに、花を摘むとて妻は指に薊の刺を立てたが、追々指腫れがして、昨今は痛みがひどくなった。主婦の F さんに談じて、醫師を呼んでもらう。それは先日牧師 M 君を訪ふ時、路に會つてそれが牧師でないかと思ふた其人であつた。名は Farab。シリア人だが、細君は獨逸人で、母者も獨逸人さうな。宿の主婦に云ふて沃度丁錢を取寄せ、それで妻の指を塗つて、血も出ない程に一寸截開し、而して繃帯し、時々指を湯に浸して、搾るやうにせよと注意してくれた。

客間に話して居ると、赤帽白短袴の Kasim さんが同じく赤帽の息子を連れて話しに来る。醫師とはナブルスで知り合ひさうな。K さんの身分や、息子が秀才である事を、Dr. は私共に話す。Dr. は Beirut で勉強したさうな。Beirut はハイファから北へ航程四時間左右の港町。十三年前君士丹丁堡に往く時、私も其處に寄港した

事がある。シリア第一の歐化した町で、其處には米國人の建てた大學があり、舊幕時代の長崎のやうに、シリア人は皆バイルウトに洋行する。バイルウトを御覽でしたか？と皆が問ふ。少し氣が利いた若者は、皆バイルウトで勉強したと云ふ。妻が綠茶を入れて來た。Dr. も赤帽も好い茶とほめたが、矢張砂糖を和して飲んだ。妻は先刻主婦の F さんの通辯で、K 夫人に會つて來た。K さん回教信者なので、細君は一室に閉居し、黒いズエルを被らずには外に出ない。

* * *

午餐に跛さんと話す。長官は今日は見えない。跛さんの名は Rizk。家はレバノン山下にあつて、息子二人もつて居る。蘇丹に十九年も居たさうな。レバノンの景色を自讃し、是非留守宅にも寄つて見てくれと云ふ。日本の同情者嘆美者だが、唯一つ、支那をいぢめぬやうにして欲しい、日本と支那と提携したら東方の覺醒に非常な働をせやう、と R さんは云ふ。R さんは四十前後の温かい男である。

* * *

晚餐の同席は、私共の外に三人の紳士。R さんと、眼鏡をかけた蒼い顔の財務官と、今一人四十左右のカアキイの英吉利人。これも稅務官の類でもあらうか。人の好きさうな顔。一寸私の從兄横さんに會つて居る。昨夜の押柄な稅務長官は見えない。會話は専ら三人の間に行はれる。R さんは英語が達者だ。蒼い顔のも、可なり話す。話題に Abbas Effendi が出て來る。英吉利人は、ちつとも知らない。R さんは知つて居るが、あまり信ぜぬらしい。蒼い顔は、アツ

バスを父の友人と云ふ。Baháism の教義や、禮拜形式の無い話から、然し近來はそろそろ偶像崇拜をはじめたやうです、と蒼い顔は云ふ。Rさんは、もうはじめる時分です、と云ふ。はじめたのはありがたい、とRさんは熱くなつて云ふ。私は黙つて聞きながら、Baháismのやうに集而大成教が、米國で持てるは無理もない、米國そのものが寄合世帯だから、とそんなことを考へて居る。

スープ外一皿の夕食が終へて、珈琲になる。三人は筭笈をふかし始めた。妻の眞向きが、英吉利人である。はつと気がついた時、私はもう口を切つて居た。

“あなたは英吉利人ですか？”

“然です。”

“Ladyの前で、挨拶なしに煙草をふかすといふのは、あなた方の風習ですか？”

“え、戦時ですから——”

“一應挨拶をするが穩當と私は思ひますが、あなたはさう思ひませんか？”

英吉利人はにやにや笑ひながら、あらためて妻に向ひ喫烟の挨拶をしはじめた。

“You are Foolish！”

ナザレ中に響き渡る大音で怒鳴つて、私が右の拳は破れよと食卓を

たたいた。

“Fools！”

と再び怒鳴つた。

英吉利人は、顔額になつて、すつくと立つた。而して眞面目な明瞭した言葉で言ふた。
はつかり

“I beg your pardon.”

私の鬱憤はまた霽れない。此一兩日私はさまざまの事から頭が焦焦して居た。日光の前の雲が邪魔になる。ふり拂ひ、刃を飛ばし赫赫と照り出でれば、胸が霽れなくなつて居た。私の裏には、怒のLavaが噴出口を求めて煮えくり返へる。如何したら、これが漏らせるか。私も日本語では毎々怒鳴るが、英語で怒鳴るのは始めてだ。言ひ捲くりたいが、中々思はしく英語が出て來ない。それで一方には“*You are fools!*”と怒鳴つたそのFoolsは複數を使つたが、これは單數であるべきでないか、など咄嗟の間に思ふたりする。然し近景には、無挨拶にふかすか煙草をふかす失禮者が三人、遠景には煙草を飲む飲みぬに關せず馬鹿の數には限りがないから、これは複數が至當であつた。

私は怒に振れ振れになつたそれでも英語でこう云つた。

“注意しなさい。それが日本のレデイであらうとも、土人のそれであらうとも、誰れであらうとも、決して失禮をするでない。

“You are fools!”

ナフキンを食卓に投げると、私は立上り、妻を促して出て了ふ。

私は気がつかなかつたが、私共が立つと共に、英吉利人は起立して、私共が出るまで立つて居た、と妻は後で曰ふた。

室に歸ると、私はひどく疲れを覺えた。襟首から脊髓をある感がずいと下つて、尾骨の處で一しきり、きりきりと錐で揉むやうに痛むた。

これは私に最初の経験である。私は初めてこれ程に力を出したのだ。私の叱つた英吉利人は、唯一人である。然し彼の背後には、アングロサクソンの何千萬が居る。否、何億萬の白哲人が居る。延いて十何億の人類が居る。私は人類の高慢を叱つたのだ。私は、私の全力を擧げて叱つたのだ。身に反應があるのも、不思議はない。

妻は女らしく、私の怒が他の恨を買ひはすまいか、と心配する。

若、ジャミレ、それから年長のジャミレが、妻の指痛如何を問ひに来た。主婦がやつたのかも知れぬ。色々にまぎれて居たが、今朝の小切目で、妻は殆んど指の痛を忘れて居た。

其十二 終の一日

(一)

五月十五日。朝餐の席に、Rさんに會ふ。Rさんはおどおどして、“Good morning”すら、ろくには出ない。昨夜の英吉人も、蒼い顔も、居ない。

主婦のFさんに、明朝出立の事を話し、借切の馬車の世話を頼む。高慢な四十女、先日来すねて、ややもすれば炭にかからうとして居た獨逸女が、私の顔を見ると、堅唾をのみ、堅唾をのみして、やややくに口をきく。

後庭に出ると、食堂外のベンチにかけて居た Abdul が、すつくと立つて、不動の姿勢をとつた。

昨夜の一喝の利き目が、あまりに著しい。だから、皆が戦争して勝ちたがるのだ。一番手取早い勝負は、何の力にせよ、力の勝負だ。私はいやな氣もちになつた。

(二)

正午少し前に、主婦のFさんが、私共の扉を敲いて來た。巡査が來たから、一寸出てくれと云ふ。客間には、若い主人の巡査が待つて居た。それは、先日牧師館を訪ふ時、路を問ふた其巡査さんであつた。Fさんの通辯で話す。昨夜の面倒かと思ふたら、巡査さんは私共の身分、旅程など問ふたきり、握手して歸つて往つた。

午餐にFさんに會ふ。今朝出發の筈だつたが、自動車の破損で明日に延ばしたと云ふ。蒼い顔も、昨夜の英吉利人も見えない。今一人の押柄な税務長官も見えない。昨夜の英人が若し居たら、皆の前で握手して、“よく Beg pardon した”と云ふてやらうと思ふたが、居なければそれもよい。人の眞價は、勝ちぶりよりも、負けぶりにあらはれる。勝つて寛大は、誰もする。堂堂と負ける事は、自信自尊がある者でなければ、能くせぬ。あの英人は、英人として中人以上でもあるまいが、負け惜みをしない負けぶりは、John Bullの強味を自づから顯はして居る。

今日は陥穽山に往つて見やうと云ふて居たが、空模様も怪しいし、疲れて居るので、又の事にする。マリアの井や、マリアの寺、大工ヨセフの仕事場、其他ナザレの所謂古跡の見物も、今度は見合はず。

重な荷造りは済ましたし、着のままで少し Bed に横になる。此處の Bed は、分外に低くて、如何にも寢心地が悪い。その Bed も、今宵限り、當分の別れである。

扉をたたいて、主婦のFさんが牧師 Mansur 君の來訪を報ず

る。Mさんの来訪は、實は待つて居たのだ。昨日、赤帽のKさんが私を捕へて、Asad, Asad, — Asad が何とかしたと云ふ。何の事だか分からずに私が居ると、レエス賣りの女が通辯して、Asad が来訪すると云ふて居たと云ふ。Asad とは、誰の事か、分からぬ。レエス賣りの女が、“あなたは英語がよく分らんのですね”と輕蔑した口調で云ふ。やつと Asad は牧師の Mansur の名である事が分つた。

客間に出て會ふ。Mさんは、私共を明日茶の案内に来たのだ。明朝出立と聞いて、がっかりして居る。私は下の歌を書いた短冊をMさんに贈つた。表に、

ナザレの牧師マンスウル君に。

君結婚廿六年、子なき我儕に同じ。

結婚の年も、月も、また。

もる人を 子とし はぐくめ いくしめ と

子 と いふものも たまはざるらん

徳富健次郎

と書き、裏に、

新紀元 第一年 の五月十五日、ナザレのホテル

ゲルマニアに於て書之。

實に、我儕が結婚廿六年の紀念日の後十日にして、

マンスウル君夫妻が結婚紀念日の三日前也。

日本 徳富健次郎

それを英語に譯して聞かすと、Mさんは早速短冊に紫鉛筆で亞刺比亞文字のそれを書いた。

私は、Mさんの教會の會計を問ふた。Mさんは、問が急所に来たと云ふ顔をして、熱心に話した。外の事では、教會員も喧嘩するが、獨立を目がける事に於ては、皆一致して居る。英吉利の Church Mission Society は、年額二千磅を出して居るが、追々教會を獨立さす爲に、毎年20磅づつ減す事になつて居る。戰爭の結果、今はC.M.S. は壹千磅出し、士人が200磅出して居る。其内全然獨立するやうにならう。其話は、私に満足を與へた。

M夫人も今K夫人の室に来て居ると云ふ。妻は其方へ往く。私も往かうとすると、Mさんが引とめる。“回教徒の婦人は、男に顔を見せません、見せるを許されません。”私は曰ふた、“私の妻がKさんに握手をするに、私がK夫人の顔を見ることが出来ぬ、と云ふ法はない。”私は其室に押入つた。而して黒い服を着たまだ若やかなK夫人を見た。

“おと、それがキモノ?”

と喜ぶはM夫人であつた。何の事かと思ふと、キモノであつた。二人の Lady は和服の妻を賞讃した。M夫人は妻が結婚指輪をはめて居ないのを不思議がつたさうだ。女三人を室に残して、東洋男三人は客間で又少し話す。MさんはKさんに回教婦人の習慣が一變せねばならぬ時が來た事を云ふて居る。亞 比亞名には皆意味がある。赤帽さんの Kasim は“分つ人。” Abdulhadi は“天命の僕。”

Mansur は“勝利”で、夫人の Lulu は前にも書いたやうに“眞珠。”
私も私共の姓名の意味を話す。

M夫妻は心を残して辭別する。Mさんは今生では再會は出来まいが、“We shall meet again around the throne” 神のほとりで會はう、と云ふ。私は答へた。いやいや、此生で復會ひませう、私共はまた来る。斯く云ひつつ、私共は階を下りて、戸口までM君夫妻を見送つた。

(三)

午後二時過ぎ、私は詰襟の夏服、妻はカイロ服、傘を持參で山を上り、先づ Müller 夫人の宅に往つた。夫人はまだ弱つて居る。妻が下の短冊を贈ると、Müller 夫人は悦んだ。

花園む 君が 家居を 訪ふ 子等は
天つ 御園の 香に そむ 思ひ
あ い

私はそれを英譯して、名刺に書いて、贈つた。

今日は他に來客もなく、三人はしんみりと話す。Müller 夫人の父は宣教師で、パレスチナに四十五年働いて、ガザで死んだ。良人も宣教師で、子供が一人出来たが、生ると直ぐ消えた。良人は此處で孤兒院なども經營して居た。此處の地所は父の遺産であつた

を、土耳其政府が横領して中と渡してくれなかつた。丁度其時カイゼルがパレスチナに来て、獨逸人に、何か所用があるなら遠慮なく申出るやうにとの事で、夫人が手紙で地所の事を訴へたら、カイゼルから土耳其政府に話して、直ぐ夫人に下げ渡された。それで此家が出来た。あんな高い巖ばかりの處に、と皆が笑つた。夫人は下から土を取り寄せて、花壇なども造つた。家の名を“岩の巢” Rock nest とつけた。随分と心を入れて使ふやうにしても、土人の奉公人や口傭などが何の感謝もなく、泥棒ばかりする、と夫人はこぼす。“時は逝いてしまいたくなる”と云ふ。私共は種々に夫人を慰めた。夫人も頷いた。“然です、短氣を起すではありませんね。良人も‘神は案外賢い’と云ふて居ました。”と云ふ。然云ふた人は大きな寫眞になつて、賢實な顔して客間を見下ろして居た。

茶桌の馳走になる。此處のバルコニーの眺望は、恐らくナザレの何の家よりも好い。私共は永く永く其大景を見とれた。エスドロン平原と周圍の山山に、五月中旬の午後の日光と雲の影が相追ふて戯れて居る。此世のものとも思はれぬ美しさである。

客間には 鉢の 白蔘が美しく咲いて居た。

花 いづれ まして うれしき 老の花
白蔘の 軀 白蔘 垂るる

あ い

“また來ます、御達者で。”と私共は堅い握手をかはして、Müller

夫人も Rock nest に残して下る。

門を出て、行く行く私は妻に云ふた。生活状態があんなに違ふて居ては、ちつとやそつと與へても、主人の感謝は得られまい。トルストイが、ヤスナヤボリヤナに居たたまれなかつた筈。

(四)

Wagner では、皆居た。例の客間に導かれ、葡萄酒の馳走になる。Hさんが Bethlehem で撮った寫眞をくれた。私は Allenby 將軍に昨日手紙を出した事を話す。

獨逸の食糧不足の話がまた出る。獨逸の將來は如何なるだらう!

私は答へた。食糧の點では、亞米利加や、英吉利だつて、座視はしない。獨逸の將來については、私の意見では、歐羅巴で將來最も有望なのは、露西亞と、獨逸だ。だから私共は露西亞と獨逸に一番に往つて見たい。私は獨逸の敗北を喜ぶ。勝つたら、獨逸の破滅であつた。獨逸の頭が下れば、獨逸の本當の偉大はこれか。日本の諺に、“踏まれた草木に花が咲く”と云ふ事がある。否、それよりも、日本では、冬になれば、大麥小麥が霜の爲に根上りになるので、百姓がドシドシそれを踏みつける。踏まぬと、ひよる伸びて實入が少ない。踏めば踏む程、莖は勁くなり、實がしつかり入る。獨逸の頭が下れば、獨逸の將來は憂ふるに足らぬ。

“それが日本人の考でせうか?”

“然。眼がある者の見る所は、同一です。獨逸に負ふ所の多い日本は、獨逸の現在に同情し、獨逸の將來を信じます。”

“でも、英吉利は?”

“勝者たる事は、敗者たるよりヨリむづかしいものです。勝つと傲り易い。浮足になる。而して高慢は直ぐに悪魔です。悪魔の日は數へられる。英吉利は兎に角戰勝つて、今世界に覇を唱へて居る。然し英吉利は餘程努力して、自ら新にする要がある。自新の覺期が弛めば、前途は暗澹です。取つて代るべく、新家の亞米利加が待つて居ます。天命の移動は、大搖錘の揺くやうなもの。此方に來たと思へば、彼方に行く。五十年前には、佛蘭西が獨逸に負けて鞭たれた。其處から佛蘭西の新しい力は湧いて來た。今度は、獨逸が鞭たれる番でした。今搖錘は英吉利に寄つて往つて居る。次は如何。天命のある所、洵に畏ろしい。”

Wagner の人とは、肅んで聞いて居た。

私共は、日本人でも少し變つて居る、事を言ふて置きたい、と此時妻が注意する。

尤な注意だ。

私はあらためて Wagners に云ふた。私共は日本人、勿論日本を愛する。然し我儕は愛國者である前に、先づ男であり女でありたい。私共をただ日本人として見ると違ふ。“We are no more Nihonese than Jesus Christ was a Jew.——耶蘇基督が猶太人であつた以上の日本人で私共はない。”

皆不思議な、然し眞面目な顔をして、此語を聞いた。

阿父、阿母以下家族の一同に握手して、Wagner 家を出る。H さんが門に送つて、“淋しくなります”と云ふ。

(五)

私共がホテルに歸つたは、日の暮れ方であつた。主婦の F さんは、巡査が二名待つて居る、と云ふ。客間には、人が大勢高聲に話して居る。客間外のテーブルには、若い顔が書き物をして居たが、ちらと私を見上げて直ぐ眼を伏せた。巡査は私に軍政署まで同道すると云ふ。書類持参で、と云ふので、私は Passport を入れた小さい case を提げて、巡査の後に跟いた。懸念顔で見送る妻に、“ひよつとしたら、日本に歸りが早くなるまいものでもない”と私は云ふた。

軍政署はマリアの井の近くにあつた。

土人の若い警官が、私に向ふて、英語で、旅行許可を見せろ、と云ふ。私がエルサレムで貰つたのは、ハイファまでの許可で、それはハイファの停車場で係官に渡して了ふた。馬車でナザレに行くにはあらためて許可を受ける要はない、とナツサルのホテルで云ふので、私共は其ままで來た。宿帳にはちゃんとつけたので、別に届出の要も感じなかつたのだ。

若い警官は、此處ぞ威嚴の見せ所、且は奉公振りの見せ所と云つたやうに、聲色を厲まして、

“免狀は何處にある？何處にある！”

と迫る。私はハイファで免狀を貰はなかつた失策を告白し、Passport を出して見せた。若い警官は、私を連れて別の建物に往つた。入口の處で、土人の番兵が五人、銃をさし措いて寝そべつて居たのが、驚いて起き上つて、不動の姿勢をとつた。私の案内者は眼玉と叱咤を彼等に與へ、番號を唱へさせた。それから、奥まつた室に連れて往つた。其處には大學生年配の若い英吉利士官が、ランプの光に快活な顔を上げて私共を迎へた。案内の警官と彼の音を聞いて、Passport に眼を通すと、士官は微笑して、テベリアに往つたら、警察に届けて下さい、と云ふて直ぐ旅券を返へしてくれた。案内の警官は自室に歸ると、私に椅子をすすめて、しばら 雜談なぞする。私は警官と握手して、マリアの井に下り、星あかりを歩いてホテルに歸つた。F さんが迎へて、何事かと問ふ。

“何でもない。巡査さん達が、なぐさみをしたのです。”

“おお、多分何でもないだらうと思ふてました。お氣の毒さま。”

妻は私の顔を見て、安心した。留守に M 牧師が、夫婦の寫眞を持つて來たが、私の警察行きを聞いて心配して居たさうだ。

(六)

夕食は、珍らしく十四人の大一座。肩に米の肩章をつけた六十

近い米國の軍醫夫妻と少し話す。教師ですか、と私の職業を問ふた。Kと云ふ日本人の事を問ふたが、私は知らない人であつた。毎毎問はるる同胞の一人を、滅多に知つて居た事がないのを、私共は心苦しく思ふ。軍醫は赤帽のKさんの息子と獨逸語で話して居た。

それから、一同喫煙をはじめた。Rさんが私の方を見た、と後で妻が云ふた。然し、私は禁煙の取締りに世界を巡回してゐるのではない。

室に歸る。

ナザレも今夜限りである。誰か來ると待つたが、ホテルの勘定も來ず、Jamirehも來ない。いざ寢やうとして、窓から覗くと、白い月夜。十六夜であつた。犬が吠える。誰やら歌ふて居る。

其十三

ふるさと さらば！

(一)

五月十六日。朝七時朝食。Abdul からレエス 50 p買ふ。好いのが賣れてしまつた、と妻がこぼして居た。それから 1 磅紙幣一 心附をしたら、アブさん悦んで、20 p程のレエスを一枚“Bahk sheesh”と云ふて、くれた。此方も悦んで收める。

妻が若いJamirehを呼んで、婚禮前の彼の女を祝ふて、菊の縁繻をした絹手巾と、一磅紙幣をやつたら、おJamiはそれをホテル中に持ち廻はつて、見せ歩いて居た。

主婦のFさんが、Billを持つて來た。十二日間の逗留で、1000 pに25p缺ける。水仙模様のノシ袋に一磅紙幣を三枚入れて、“エネボルケさんとテオドラさんへ”と云ふて渡す。Fさんの顔が輝やいた。私は尙も銀の三日月に鷺鳥四羽の扇を贈り、末廣の意味を説明し、私共の祝福のしるしと云ふと、好い記念です、とFさん悦ぶ。獨逸女中二名に心附を頼む。Fさん多過ぎると遠慮したが、餘程嬉しかつた容子で、急ぎ室に歸つて、一冊の本を持つて來て見せた。それは、ラフカヂオ、ヘルンさんの日本に關する著作の一つの獨逸譯であつた。まだ讀んで居ない。讀んで御覽なさい、其ヘルンと云

ふ人は、ある日本人よりもヨリ多く日本を愛した人です、と私が云ふ。“奥さんは、日本人です”と妻が言ひ添へる。

やがて Maria さんが莞爾と笑ふて、小供へ贈物の禮を言ひに来た。Teddy が二三日前から少し熱があつて、寝て居るさうだ。忙しいので、妻と話す機会もなかつた、と残念がり、懇に握手して往つた。

それから、年長の Jamireh と、赤ン坊を抱いた Rosé が別れに来た。年長の J は私の季の姉に肖て居る。まだ娘なので、好い犬をおもち、と祝ふてやる。

Abdul と若い馱者が、荷物を取りに来た。

日につもれば二週間足らず。然し随分と多事なナザレ滞在に、落ちついた氣分を與へてくれた私共の室を祝し、ホテルを祝して、私共は階段を下りて、馬車に乗つた。今日のは、ハイファから来たと同型の乗合馬車で、三頭挽である。借切りで、客は私共と荷物だけ。若い馱者と共に、昨日打合せに来た親方が乗つて居る。

Abdul が私共を呼びかけて、馬車の上と下とで懇に握手する。

赤帽の Kasim さんが、階段を下りて来て、私共と握手する。奥さんによろしく、との意を妻がのべる。

馬車が動き出した。妻はバルコニイを仰いで、手巾をふつて居る。其處には、ベテレヘムに同行した Margaret と Rosé と年長 Jamireh が、別れの手をふつて居た。

(二)

馬車が山手への岐れ路に来ると、親方はひらりと飛び下り、“御機嫌よう。”と挨拶して去つた。時計を見ると、午前八時が少し過ぎた。空は、今にも降りさらにうちかぶつて居る。

マリアの井に来ると、私共は暫くと馬車を駐めて、飲むべく下りた。甕を持つた女達が、私共の爲に側寄つてくれたので、私共は魔法罐の蓋の Cup で、銚口から落ちる水をうけて、かはるがはる飲んだ。冷たくはないが、和らかい佳い水である。マリアの井の名にしおふ耶蘇の母マリアの乳が多分こんなであつたらう。水は、向ふの山側から湧き、マリアの寺の祭壇下を通つて、此處の井に溜まるやうになつて居る。ナザレの泉は、他に今一つあつても、泉らしい泉は古來唯此れと云はれて居るので、千九百年前に耶蘇も此水を飲んだのだ。つづげざまに三ばい飲んで、立上る時、“すべて此水を飲む者はまた渴かん”の語が自から浮んだ。

朝曇り ナザレを 立つと 日子 日女 は

マリアの 井に 飲みて けるかも

山の窪 天の恵の 露凝り

生命の水 と 湧き出で けらし

* * *

マリアの井 抱へば 口に やはらかき
 いのちの泉 とこしへ なれや
 あい

近くに結婚する若い方のジャミレが、“わたしの人”—— My man”の家はマリアの井の近く、と云ふた。何の家だらう、と妻はあたりを見廻はして居た。

先日ベテレヘムへ行く時上つた電光形の阪を、馬車は上つて行く。ナザレは行く行く下に沈む。私共は、ふりかへり、ふりかへり、ナザレを見る。赤黒い屋根に大きな白い mark の病院で、其直ぐ側の Hotel Germania は分かつた。ナザレの清少納言が住む孤女院は近くて、いちじるい。Wagner 家、Müller 夫人の“岩の巢、”牧師夫妻の住家などは、あの邊と指しても、家はしかと分からぬ。朝曇りの冷冷した空気の中に、樹樹の緑と、赭や灰色の建物の錯綜した巴形歪形の山里ナザレは、ちつと眠つて居るかのやうに静かだ。

馬車が阪の上に達した時、私共はナザレを見下ろして、相共に昔昔の此ふるさとを祝した。

またも 來む ふるさと ナザレ 山里の
 ナザレ は 戀ひし ふるさと なれば

第七 テベリア湖畔

其 一 テベリアへ

(一)

今日は曇つて、ヘルモン山も見えぬ。馬車は阪を下りて、東に駛る。

若い馱者は、少し英語を話す。まづ馬の話をする。馬の値段は50磅。駱駝は30磅で買へる。埃及から攻め入る英吉利軍を防ぐとて土耳其軍が蘇西地帯の沙漠に對抗中、水なく、秣なく、無数の軍馬が餓死、渴死、病死した。それ以來パレスチナも馬匹が乏しい。標馬に乗つて、土人が行く。其あとから、青い頸玉をかけた小馬が、ひよこひよこついて行く。あの小馬は、生れてまだ十日とたたぬ、と私共に馱者は告げる。私共の馬は、頸にはかけぬが、尾の根に青い玉をかけて居る。すべて蠅除けである。

馬車をとめて、路傍の土人が何か云ふ。赤兒を抱いた女が立つて居る。馱者の言によれば、子供が病気でナザレの醫師に往つた歸

り途、直ぐ途中の村まで乗せてもらへまいか、と云ふのであつた。後方の席が空いて居るので、快く承知する。女は子供を抱いて、喜んで乗つた。“Kathir Khèrak”と云ふて、亞刺伯頭巾をかぶつた男は、直ぐ山畑の大麥を苜りに上つた。私が“Ükbairak”と大聲で云ふと、男は莞爾とした。前のは“ありがたう。”後のは“どういたしまして”。

少し行くと、赤帽で跣足の十四五の男の子が、馬車に駆け寄つて、馭者に何かぐどぐど云ふて居たが、少し往つてふりかへると、馬車の後の踏段にちやんと立つて居る。其ままにして置く。

九時半に、仙人掌 多いカナに來た。ルナンは、カナを耶蘇の母マリアの生地とする。約翰傳に、耶蘇が弟子とカナの婚筵に招かれ、水を葡萄酒にした記事があるが、其家で母マリアの At home 振りを見ると、成程マリアの實家であつたらう、と思はれる。十三年前は、此處で下りて、古跡を見物したり、少女等がたかつてレエスを賣りつけたりした。下りて見物する程もないし、レエス賣りの女は居たが、丁度軍隊自動車が一臺とまつて、英吉利の兵士達がレエスを買つて居たので、私共の馬車はずうとカナを素通りする。

やしばらく往く。ぐいぐい私の衣の裾を曳くので、見かへると、一臺の自動車が間近にやつて來る。馭者も氣がつかなくなつたので赤兒の女が私の注意を促したのであつた。傍寄つて、自動車を通す。それは、先刻レエスを買つて居た兵士のそれではなく、ナザレのホテルで昨夜見た顔の幾個が乗つて居た。

やがて、便乗の女は、深く禮言ふて、馬車を下りた。女が下りると、赤帽の子が心得貌に罷り上つた。叱ると、飛び下りて舉手の禮をする。前の如く、馬車の後に居らす。

道は狭い谷を通る。雨期には、水浸りになりさうな谷の路。土人の男や女が大勢寄つて、路普請の最中である。石を割る男。割栗石を運ぶ女。女は土だ、とは私の持説であるが、土運びだの石運びだのは本來男の領分で、女の労働に適したものは決して思はぬ。今此等石運びのシリア女を前にして、石炭運びの長崎女、土擔ひの香港女が、幽靈の如く私の頭に現はれる。

降るかと思ふた空は、晴れて來た。谷は追々爪上りに淺くなり、軟かい風が青い空から吹く。妻は私の右に、うとうと馬車に揺られて居る。右手に圓つこいタボル山の頭が、谷を割る丘の上から、覗いて居る。

(二)

谷が盡きると、馬車は潤潤した高原に出る。エスドレロン平野から來る路も、此處で一つになる。羅馬時代の大道も、此處を通つたと云ふ事である。説教山、又の名は祝福山が現はれる。圓く、低く、心易い、子供でも跑け上れる丘。其ゆつたりした傾斜は、南に流れて、また上り、うねうねとゆるく丘又丘の波をうたして居る。

行手には、地中海面からさへ七百尺を下るテベリア湖、ヨルダンの深い谷を隔てて見ふの山山が青く、説教山のうしろも湖北の連

山との間が窪い谷になつて居る。深い二方谷に押し出されたやうな高原臺地である。高原は今人參の葉、女郎花男郎花の花をした黄白野草の花ざかり。馬車は其花野を輻輳と東に駛る。説教山下は黄ろい花が多く、両の裾野は白花雪の如く適かに咲き亂れる。其雪を分けて、小さな裸馬に騎つて小さな人が走る。あとから尙小さな小馬がついて駛る。晝の様。五月中旬の、正午近い日は熱して、風は涼しく、うねうねとした野山を、雲の影が蒼う這ふて行く。黒い羊の群が来る。白い羊の群は、遠くに草を食ふて居る、水の様な眞晝の空に、鶯がゆたかに舞ふて居る。遠くに駛せた眼が、馬車の左右に還ると、黄白男女郎花の間々には、私が十三年前擅に命名したシリア撫子、晝貌に似たモントレルバアル、鮮紅の薊、淡紅の薊、白い薊、黄いろい薊、紫の藥玉の様な薊、棘棘して居て色は美しい花の限りが、咲いて居る。

忽ち碧玉の一片、テベリア湖が遙かの下に見えて來た。湖東の山山が、はつきりと現はれる。ヘルモンは見えないが、湖北の山山は、青く屏風を列ねたやう。

“Safed は何處だね?”

私が問ふと、馭者は左手の山の高處を指した。

“あ、見えて居ますよ。”

と妻が云ふ。私には、青い雲湧く山の上、チラチラと人家のやうなものが見えたが、はつきりせぬ。Safed は、昔から名を得た猶太の邑で、エルサレムの Hensman さんの言によれば、山上の垂訓で

耶蘇の“山の上の城は隠るるを得ず”と言ふた山の上の城は、Safed であつた。成程、此處の草生の説教では、草花や小鳥と共に、耶蘇の指して語りさうな山の上の邑である。先日ナザレで埃及論を私と闘はした Cambridge 大學生も、あの Safed から馬で下りて來たのだ。

野花 雪に似たり 走るは 晝に似たり

寸馬 豆人 つづぐは 子馬

春の雲 蔭這ふ 山の 頂を

荒鶯 舞へり 五月の 眞晝

“隠るるを得ず”と 山の上を いそのかみ

耶蘇の 指しし Safed の邑

テベリアの湖 見えて 里 見えて

道は 下りに なりに けるかな

* * *

君と ゆく 幸山裾は 花ざかり

千九百年 永かりし かな

あ い

黄白の 花の 裾野を 馬車はしる

説教山の 五月の縁

アラビヤの 駒は 疾風と かけて 消ぬ
はやて

花野 はるけし テベリアの道

あ い

道は下りになった。湖の全體と、山から湖畔にころげ落ちたやうなテベリアの邑が見えて来た。

馭者は、一番若い一頭を輓からはづして、赤帽の子に乗らせ、二頭だけで徐徐に下りて行く。

赭い屋根三四軒、山腹に集くうて居るのは、猶太人の殖民村さうな。私が十三年ぶりに来て、パレスチナに見出した變化の一つは、赭い屋根の猶太人殖民村を、前に何もなかつた處にしばしば見出した事である。

山を下りて、町近くなると、湖水歸りの印度兵が馬に騎り、ズツクのバケツを提げたりして、數多やつて来る。

やがて馬車は、Pepper tree が一樹其前に立つ Hotel Tiberias の下に駐まつた。Hotel Tiberias には、私も十三年前ナザレから来て一泊した事があるが、あたりの容子が違つて居るので、一向それらしくも覺えぬ。馭者に念を押すと、確にそれと云ふ。下りて看板を見る。やはり Hotel Grossman であつた。Grossman は主人名である。

帳場もなければ、迎ふる人もない。客の一人らしい四十年配の英吉利士官が、裏庭から臺所の方に往つて、私共の到着を報じて呉れた。やがて三十五六と覺しい痘痕の婦人が出て来て、自身手荷物 of 幾個を引提げて、私共を二階の一室に導いた。ホテルは満員で、此外に室がない、少し辛抱してお出だつたら、湖向きの室があくかも知れぬ、と云ふ。それは、西向きの室で、狭長い裏庭は、高い石塀で劃られ、其處には、一重の莢竹桃の大株が、滿樹の紅を午の日に燃やして居る。ナザレの清涼の後には、えらい日責めだが 他に室がなければ、詮方はない。いよいよ荷物とここに納まる。痘痕の婦人は、主婦の Frieda Grossman であつた。

其 二

琵琶の湖日記

(一)

大正八年五月十六日。十三年ぶりに、ナザレからデベリアに着いた。午餐に下りて見る。脚の短い丹頂の鶴の剝製など天井からぶらさげた食堂の容子も、一向覚えがない。ナザレには、殆んど蠅を見なかつたが、此處の食卓は、蠅で眞黒。ハイフアにもまさる蠅だ。料理はまづく、飲水は生温く、うんざりして了ふ。

歸つて、日よけをしめて午睡。三時頃さめる。西日満室、頭腦も沸きこやう。これでは、たまらぬ。

主婦に言ふて、二階の南端の小さなバルコニーで茶を飲む。湖の一部と、町を見晴らし、それでも風がそよ吹いて、いくらか凌ぎよい。海拔千五百呎の山の上のナザレから、地中海面下 631呎のデベリアに下りて来たのだから、暑いのに無理もない。ベテレヘムでもらつたカアネエションの、まだ生生して居たのを、馬車の上も氣をつけて持つて来て、着くと早速水にさしたが、其甲斐もなく弱つて了ふた。

ナザレで懲りたので、茶後警察に届けに往く。湖畔近くの建物

で、土人の巡査が、煙草をふかしながら、遊び半分事務をとつて居る。土地の娘つ子が、窓に腰かけたりして遊んで居る。好い消閑の客として、私共は歓迎された。

湖水に沿ふて、少し北へ歩く。景色は好いが、磯は牛馬糞、人糞狼籍として、腰かけたいやうな石の蔭には、ちやんと不潔が蹲つて居る。うんざりして、歸る。

此處は電燈だ。カイロ以來の電燈。但室内は蠟燭。

Bed は、ナザレ同様低く、少し大形で、圓い蚊帳がついて居る低い Bed は、獨逸式と見える。Kaiser の頭が、せめて其 Bed のやうであつたら！

* * *

五月十七日。朝、Bath。ナザレでは、約二週間の逗留に、つい Bath をとらなかつた。湯好きの私共も、女ばかりの水不自由に Bath を云ふのも氣の毒で、つい冷水で拭いて済ました。此處のホテルは、器械で湖水を汲み上げるので、水には不自由なく、従つて Bath も出来る。エルサレムと同様、薪を燃すのだ。二週間ぶりに入浴して、好い氣もちになつた。Bath と、W. C. の比較的清潔が、此ホテルの取柄である。

浴後、私は縮の單衣で、バルコニー近い廊下に書き物をする。此處の病院に勤めて居る若い亞米利加の眼科醫が、Zangwill の小説“Children of the Ghetto”を持ちながら、東側の室から出て来て、少し話す。パレスチナには、トラフオムが夥しいさうだ。父は

米人、母は猶太人、ハイファの者で、此處の病院の給仕をして居る十五になる男の子が、Dr.に甘へ、私に甘へる。

私が廊下で書いて居る間に、妻は室内で蠅の手捕りをする事実に二百疋。翌日まで、腕が痛い、とこぼして居た。

私共が廊下に居ると、年頃の娘を連れて蘇格蘭の宣教師が来て話す。三十五年からパレスチナに居るさうだ。特に蘇格蘭人で、英吉利人ではない事を、彼は切言する。

妻は室に去り、私は廊下に残る。シリアの若いハイカラが来て話す。私に會つた事がある、と云ふ。何處で？ Panama で！ 私はまだ Panama に往つた事がない。シリア、ハイカラが見たのは、他の日本人なのだ。それ程、類似はあるものだ。私自身、往一の白人と他の白人を間違へたり、此シリア人を彼シリア人に誤つたり、彼黒人を此黒人とごつちやにしたりする。

宿帳を取り寄せて見る。宿帳は、1900年から始まつて居る。即ち、獨逸のカイゼルがパレスチナ、シリアに来た其年に、此旅館は開かれたのだ。私が来たのは、1906年だから、私の泊つた宿がこれに相違なくば、宿帳に私の書いたのがある筈。繰つて見ると、果して、あつた。

“ 8—9 June, 1906.

Kenjiro Tokutomi

T. kyo, Japan.

一九〇六年六月八日來り、一泊して去る。

さらば、ガリラヤの湖よ！

神 許し 玉はば、

吾れ ふたたび 來らん。

徳富健次郎。”

十三年を経て、再びガリラヤ湖に來て、同じ宿帳に十三年前の己が筆の跡を見るは、嬉しい事だ。私は、ペンをとつて、新に記入した。

“十三年の後、再び來りぬ、妻と共に。

日本 徳富健次郎。”

更に書き加へた。

“父若し許さば、我儕夫妻は、三たび來らん。”

又 來んと するしし 君が 筆の跡

ふたり して 見る けふぞ うれしき

あ い

十三年の間には、さまざまの人が、さまざま書き入れて居る。日本人の姓名も、五六見受けた。

夕方町外を南に歩いて、湖水に出る。今日は土曜日、猶太人の安息日で、猶太人は着飾つて歩いて居る。此處には、猶太人が殊に多い。それに土人、英吉利の軍隊と印度兵、亞米利加人などが、一處にごちやごちやして居る。磯に下る。穏やかな夕、湖東は山紫に水は白く光つて居る。北にヘルモンが高く、中景に帆かけ小舟が一

隻。つい近くの水中には、馬や牛や羊、驢馬などが、かはるがはる来ては、頭を低れて、ゆるゆる水を飲んで居る。

白光る 夕の湖に 駒 二つ

脚 ひとひたに 立ちて 水のむ

あ い

蠅が多いので、食堂には必扇を携ふる事にした。食卓には、面識が多い。跛のRさんも来て居る。ナサレで會つた米の字の肩章の米國の老軍醫夫妻も来て居る。銀行の要務で來たと云ふ金縁眼鏡の佛蘭西人は、葡萄酒の瓶のベエバアに己が名を鉛筆で書き書き、晝も夜も同じものばかり出して、と食事についてぶつぶつ云ふて居る。今日の午餐には、黒鯛の様な魚が出た。あまりうまくもないが、湖の魚だけに、悦んで食ふた。夕方は、また寸分違はぬ其魚の、何の愛想もない繰り返へしだ。佛蘭西人がこぼすも無理はない。水がまづいので、れもん水を造つてもらつて、飲む。

夜、スキツチヨが私共の部屋に入り込んで、盛んに鳴いた。

* * *

五月十八日。Rさんの上官、あの押柄な稅務長官が来て居る。顔見合はすと、ぢろり白い眼をくれる。

午餐後、玄関前のエランダの椅子にかける。一樹の Pepper tree がだらりと枝を垂れて、湖面に午の目がぎらぎら光る。

斑白のレデイが来て、私共と話す。シリア人で、老嬢で、一家

盡く教師である。少し鼻聲で、詭々と話す。テベリア湖邊の一番好いのは、二三月で、六七八と十月が一番あつい。戦争で、シリア地方の饑饉はひどいものであつた。レバノン山地では、百中の四十四まで餓死した村がある。其様な中を、土耳其將校の中には夫妻腹を合はせて賄賂を貪り、富を作つた者もあつた。日本軍が救助に来てくれるか、と期待して居た、など彼女は言ふ。此處のホテルの主人 Grossman 君は、好い人であつたが、二年前に心配から死んだ。Gさんは、ナザレの Germani Hotel の主人Hさんと、従兄弟の間柄で、従兄弟同士同じホテル家業をして、同じく心痛の爲に死んだのも、深い因縁であらう。寡婦さんも“良い女”と婆さんほめる。

午後三時、私共は其“良い女”を私共の室に招いて、綠茶を喫する。主婦は、瀟洒と服を更へて、頸飾などかけて來た。綠茶をうまいとほめる。結婚は十四年前、主人がホテルを創めて六年目であつた。ナザレに往つて居る娘が、十三になると云ふ。Wagner の家で會ふた紅い衣のあの娘なのだ。さすれば、私が此前來たのは此處の夫妻が結婚の二年目で、あの娘が赤ン坊の頃であつたのだ。其時私はナザレから來ると、直ぐ舟でカペナウムに行き、一泊して、翌朝はまた舟で南に去つたので、私には主人の記憶も、主婦の記憶も赤ン坊の記憶も、ない。唯二十歳前後の獨逸人の若者が居て、裏庭に縞蛇が出て來たのを直ぐ撲殺してアルコールに漬けた事と、其若者が毛布を着て露臺に寝た事を記憶するばかりだ。あたりはもつと静かで、ホテルもずつと小規模であつた。娘の外に、男の子が二人

ある。兄はナザレに居、弟は此處に居る。五歳になる。私共の部屋から見て居ると、裏庭に出て来て、“デイ、デイ、デイ、”と女の子の様な聲をして鶏に餌をやる男の子がそれなのだ。阿父は何處に往つたの？と其兒が問ふさうだ。“阿父さんはね、此方へ入らつしやれないの。でも、お前は阿父さんとこへ往ける、と申しますとね、彼が喜びまして、お母さんも、一緒に来るのね？”と申すのでございますよ。”ホテル仕事は、骨が折れて、仕様がな。然し此ホテルは、初から創めて、年年擴張し、何もかも投入してあるので、今更やめる譯には行かない。主人、主婦、父、母、一切を自分でやつて居る。それに義妹と、ハイファから来て居る人が助けて居る。食卓に給仕する三十餘の獨逸人が、それなのだ。私は最初彼を主人かと思ふた。然し飲湯を一つもらうにも、彼は主婦の許諾を得に行くので、主人でないだけは分かつた。

私共は、Wagnersでの話や、ベテレヘムで撮つた寫眞を出したりして、色々慰める。主婦は亡夫が、宗教は何でもない、心情がすべてだ、自身には區別はない、来る人は皆俺の客だ、と云ひ云ひした事を話し、其心をついでやつて居る、と語る。妻は子供にと有平糖少し、落花生少し、やつた。主婦は悦んで歸つて往つた。

夕食に、食卓の向ふの端から、シリアの一紳士が聲をかけて、お忘れですか、と云ふ。私はちよつと思ひ出せなかつた。それは、ハイファで會ふた Nassar さんの従弟であつた。私は、パナマで會ふたと先刻シリアの一紳士が言ふた事を話して、よく顔を忘れたり

人違へをしたりする、と詫びた。私の英語がよく腑に落ちない様子であつたので、あとで差向いになつた時、また其事を言ひ出して、會得してもらつた。

室に歸ると、妻は私の聲があまり高過ぎる、と注意する。カイロでは、ぼるねお丸のおとなしい方の支那人が食卓行儀の上品であつた事を舉げて、私の亂暴な食事を忠告に及ばれたが、今度は聲が高いとのお叱りだ。今夜に限らず、私が言ふと、皆がびたりと話をやめるさうな。少しも知らなかつた。私は非常な小心者で、自分の膽に正比例した聲の小さいには、毎々自分ながら愛想が盡きて居る。聲が高過ぎると云はるる事は、はじめてだ。何時の頃からか、私の左の耳が少し遠くなつた。其故もあらうが、多分は十餘年來の田園生活のお蔭であらう。野ら聲は、太いものだ。

(二)

五月十九日。今日は、湖上に遊ぶつもりで居たが、西風が大分吹いて、天氣も怪しいので、見合はせる事にしやうとして居ると、永年パレスチナに住んで居る彼蘇格蘭の宣教師が、一寸はらはら来るかも知れぬが、大した事はあるまい、と保證する。其内、晴れても來たので、いよいよ出かける。

ホテルを出て、埠頭から舟に乗る。舟子が三人。色々暇どつて、舟が出たのは、午前十時を十分も過ぎて居た。私は、最初ヨル

ダンの入り口 Bethsaida Julias に往つて見たかつたが、今日は西風が烈しく、往くには往つても、歸りが困難、と云ふので、それを見合せ、直ぐカペナウムへ行く。

引あげると、帆は一ぱいに西風を孕んで、舟は箭の如く湖を北へ駛つて行く。忽ちにテベリアの邑は後になる。向ふの山屏風の根もとに、ぼつちりカペナウムの木立が指さされる。ヘルモンは、今日は見えない。

テベリアの 湖淨し ヘルモン の
雪の 雫を 胸に たたふる

五月晴 白帆 玉ゆら ゆらゆらと
翡翠の 湖を 舟すべり 行く

あ い

舟子の一人は、HamburgでCook會社の舟子であたさうな。私は單語の Arabic と手様で、十三年前一度來た事を話す。

伊香保の木の椀で、湖水をすくふて、飲む。好い水である。

西風のお蔭で、漕げば二時間の舟路を、一時間足らずに駛せて十一時にはカペナウムに着いた。ヘルメット帽をかぶつた老僧が出迎へる。“好い風でした”と云ふ。僧は獨逸人、英語は少ししか話さぬ。

私共は、舟から上り、老僧の案内で、發掘された昔のユダヤ人

會堂の跡を見る。エリコの發掘と同じく、矢張獨逸人の事業で、私が此前來た後に進捗したのである。戦争で中止して居るが、今見られるだけでも、耶蘇時代の此處の會堂の面影が歴歴と認められる。鋪石の石灰石などは、遠方から來たものさうな。柱礎や、建築の斷片に残る彫刻が美しい。婦人の座席などがある。耶蘇時代のテベリア湖畔は、繁華な土地で、會堂なども、ナザレのやうな山里の會堂などとば、比べものにならぬ、立派なものであつた事が分かる。朝來の曇り空は、何時しか晴れた。白雲の飛ぶ青空に映つて、會堂跡の近くに、午日を浴びた金雀花の大株が一樹満開の金を輝やかす。得も云はれぬ美しさである。

藍青の空 に 一樹の 金雀花の
金黃 燃ゆる 五月の眞晝

私共は發掘の跡を見終つて、僧について小院に上る。虫よけの網を張つた中に、ナザレでは蕾でもつた葡萄が、最早小指の先程になつて居る。外の午熱に引かへて、冷やりとした一室に腰をかけると、土人の婦が、茶菓を持って來る。坊さんはパレスチナに來て卅六年、此發掘事業にかかつて十三年になるが、一度も獨逸に歸らぬさうな。名刺を交換し、それから來訪帳に署名する。八年前、日本の軍人が二名來たと坊さんは云ふて居た。茶代に一磅紙幣を置く。“發掘の爲に?” “否、あなたに。”坊さん喜んで居た。

湖邊は非常に暑く、華氏 150度になる事もあるさうだ。今日も随分あつい。

妻が土人の婦に10pやつて、名を問ふと、婦は喜んで、妻を抱いて、Kissしたさうだ。

私共を送つて來がてら、坊さんは、莢竹桃の花盛りを二枝折つてくれた。“八重です”と云ふ。エリコの程ではないが、美しく芳しい花であつた。莢竹桃の一重は、野生にあるが、八重は栽培を経たのである。昔豫言者エリヤが、暴王の怒を逃れて、其蔭に人事不省になつたと云ふ金雀花なども、庭には見るが、野生にはあまり見かけなかつた。私共が舟に下ると、坊さんはヘルメット帽を振つて歸つて往つた。

午餐は、ゲネサレの濱、とする。

三人の舟子が漕ぎはじめた。陸に沿ふて、西へ行く。西風が強く吹いて居るので、舟子の骨が折れる。丘腹には土人の男女が大麥を刈つて居る。ベドインの黒い天幕がある。丘の根は、大きからぬ岩石起伏して、水邊にも、水中にも、野生の一重莢竹桃が淡紅に花咲いて居る。

ベドインの 麥刈る 丘の 籠磯

ひた ひた 水に 莢竹桃 の 咲く

涼しげに樹木の茂つた獨逸の僧院や、別荘めいた建物は、森閑

として人無きさまである。やがてベテサイダの跡と一説に曰ふ邊に來る。高く築き上げた水道から水が落ちる。水車がある。勢よく小川の水が湖水に流れ入る。“七泉”と呼ばれるだけに、水量の多い處である。但、好い水ではないさうだ。

其内舟はゲネサレの小さな濱に果てた。

私共は舟から渚に下りた。

十三年前には無かつた大きな風車が、ゲネサレの野には建てられ、ゲネサレの濱は、牛糞狼籍として居る。小川の口に行つて、牛糞の無い處に持參の敷物を敷いて、腰を下ろす。小川は舊に仍つて淙淙と流れ、其處には鮪のやうな小さな魚が夥しく遊んで居る。跪いて掬ぶ氣にもなれぬ。

私共は敷物の上で、辨當を開く。ホテルからくれた新聞包を抜くと、先づ出て來たチイスやバタを塗つたパンと羊肉のフライ。これは悉く舟子に振舞ひ、私共は全熟卵、胡瓜、オレンジ、菓子など食べる。

綠色のものが泳いで來る。見れば、眼がさめる様に美しい綠色をした一尺ばかりの蜥蜴類。其綠色の鮮麗さ、“新春”の表紙そつくりである。美しいだけに、氣味がわるい。舟子に問へば、“No good”と云ふ。有毒なのだらう。ずんずん私共の方に泳いで來るので、小石を投げたら、少し離れた處に這ひ上つて、一寸傍見た間に灌木の蔭に隠れて了ふた。それは多分此處に私共を待つて居た私共の“青春”であつたらう。それにしても、何と云ふ美しい色の

“青春”であつたらう！

“青春”は美しかった。然し此處の境地は、何と云ふ體たらくだらう？十三年前の厭禮行に、あれ程興に入つたゲネサレの濱、十三年間夢寐にも忘れかねたゲネサレの水、そんなものは何處に往つた乎？否、否、人生の旅に、同じ處を二度は決して通れない。現在を大切にすの事だ。存分に今を楽しむ事だ。

十三年の昔揃ひし ゲネサレの

泉も 濱も あはれ 汚れぬ

此次に来る時は、また淨くなつても居やう。然し、さし當つての今日は興さめ、辨當をしまふと、私共は直ぐ舟に乗つた。

西風がまだ盛に吹いて居る。斜に帆を張つて、舟は左に欹ぎながら、悉悉と水を漕つて走る。舟脚を重くす可く、舟底には大きな石を四箇も入れてある。

マグダラの MARIA をもつて其名今に残る マグダラの エルメジテルの三家村を右手に見て過ぎる。

水の美しい處で、私は右の袖をずぶ濡れにして、魔法瓶に一ぱい湖の水を盈した。

舟行箭の如く、三時には最早ホテルに歸つて居た。

~~~~~

~~~~~ (三) ~~~~~

五月二十日。昨日の夕食に、私共は四十近い Uniform の Lady と同席した。肩章を見ると、カナダの人らしいが、聞けば倫敦子でホテルの名にも知られた Claridge 姓の Miss であつた。看護婦長をして居て、埃及から遊びに来たさうな。長い天幕生活の經驗を話して、夏は暑く、冬はまた無暗に寒くて困つた、と云ふて居た。教で某某の日本人を識つて居たと云ふが、皆私共の知らぬ人ばかりであつた。何の用で来たかと私共に問ふので、イザヤの豫言を引いて、“To teach Lions and young Lions how to behave——獅子や若獅子にお行儀を教へる爲”と云ふたら、聞き返へして、少し鼻の下を長くした。

今朝、朝食の席に 件の Lady が拂子を持つて現はれた。蠅拂ひなのである。食卓の上の蠅を、件の拂子でばつた、ばたとはたき殺すので、“軍人的ですね”と私が言ふと、Lady は少し顔を赧くした。

* * *

テベリアの南一哩餘に温泉がある。今日は其温泉に往つて見やうとして、午後三時近く出かける。

温泉までは、湖に沿ふて坦坦たる一本道。十七八丁には過ぎない。テベリアから乗合馬車も通ふ。然し私共は、町で買つて来た胡瓜を渚に下りて食ふたり、景色を眺めたりして、ぶらぶら歩いて行く。右方丘の中腹に出張つて居るのは、昔ヘロデ王の邸を構へた址である。

間もなく温泉に着く。馬車、軍隊自動車、馬や驢馬もつながら

カアキイの軍人、白いレデイヤ、男女上人の湯歸りの姿も見え、天幕を張つた湯治の家族も見えて、温泉場らしいが、珈琲一杯飲む茶店も見えない。勝手に分からねぬので、天幕を音づれると、簡便寢臺に寝そべつてマンドリンを弾いて居た赤帽のシリアハイカラが出て来て湯番爺に談じ、貸切りの湯は今ふさがつて居るので、少しお待ちなさい、と云ふのであつた。

湯番の爺が、椅子を持つて来てくれた。浴場前に腰かけて、長いこと湯のあくのを待つ。今日は空よく晴れて、湖の景色がよい。昨日遊んだカベナウムあたり、薺のやうに木立が小さい。ヨルダン川の落ち口も、山と山との襟をかき合はしたやうな峽がはつきりと指さされる。其上にのつかつて居るヘルモンが、今日は殊に雪さやかに眺められる。あの山から出る川は、三十にも及び、シリアの地は皆あの乳房に養はれて居るのだ。私は眺め、妻は鉛筆で Sketch をする。天幕から、マンドリンが聞こえる。

さざ波や 湖の 西風に 雲 消えて

雪 さやかなり ヘルモンの山

ヨルダンの 湖に入るてふ 山の峽を

うてなに なして ヘルモン 立てり

白髪り 頭をば かざして 琵琶の湖に

水鏡 見る ヘルモンの山

(テベリア湖、形容により、琵琶の湖とも云ふ。)

三十すぢの 乳房かき垂れ 永久に

シリア はぐくむ 軀 ヘルモン

あまり長いので、湯番爺が戸をがたがたと鳴らして、催促する。ややあつて、うだつたやうに赤くなつて、土地の女達が三人出て来た。入りかほりに、私共が入る。と、湯番が外から扉に鍵をした。天幕の紳士が教へてくれた此貸切湯は、無論最上のものではないらしい。脱衣場は板張りて、巢をくふた燕が、庇の間から出入する。浴室は石を舗いてある。湯槽は一坪餘、深くて私が爪立つ程なので、妻は石段にかけた。湯は可なり熱く、少し鹹い。ヘルワンの程奇麗ではないが、温泉だけに、人の沸かした鑛泉とは、自づから違ふ。

三十分許りすると、もう湯番がごとごと扉を敲いた。25p の湯錢に、5p の心附を爺さんにやつて、好い氣持もちになつて、歸る。

美しい夕、当紫水明の湖畔の路を、そよ夕風に吹かれて歸る心地。“暮春者、春服既成、冠者五六人、童子六七人、浴乎沂、風乎舞雩、咏而歸”と諷誦しつつ、私共は歸る。

中途に、馬車が一臺顛覆して居る。自動車を避けやうとして、顛覆したのであらう。馬も人も、引きのけられてあつたが、まだ人

立ちがして居た。醫師と看護婦をのせた自動車は、テベリアの方から駈けて来る。

* * *

五月廿一日。ホテルの背の山手で、朝市が立つ。今早朝、私は単衣の着流して往つて見る。野菜市である。トマトと胡瓜を3P買って歸る。菓物を見に往つたのだつたが、何も出てなかつた。

午餐に、給仕が一通の手紙を持って来た。ナザレのMrs. müllerの手紙。小さな寫眞が三枚入つて居る。妻の和歌の體を述べ、寫眞のお望みだつたが、然るべきものもないから取りあへずこれを、と云ふのであつた。

私共は其禮状を書いて、末節に下の數句を書いた。

“ May Father bless you and strengthen you in your old age !
May Your loneliness itself be the source of inspiration to you,
and as the “ Whitehaired ” Hermon (as Arabs call it) with
thirty streams of her milk nourishes eternally the land of Syria,
even so may your love, increasing in depth and breadth, nourish
the all about you !”

夕食に拂子の Lady Miss Claridge が、今日は Uniform でなく平服で出たので、私は其方が餘程似合ふとほめる。Cさんは、今日自動車で Safedに往つて来たさうだ。今朝、Cさんは蠅よけだと云ふて、唯のゴエルでなく、わくとりつけた額紋帳と云ふやうなものをかぶつて、眞顔で食卓に現はれたが、Safed 行きの仕度であつた

のだ。カペナウムまでは湖邊に沿ひ、それから上り一方で、自動車も樂ではなかつたと云ふ。海拔2749呎の Safedは、人口三萬、大部分は猶太人が占めて居る。メシアはサフエツドから出ると云ふ傳説も、猶太人の間にあつて、重要視せらるる町だが、眺望は好いかわり、汚ない町だと云ふ。私共も往つて見やうかと云ふて居たが、Cさんの話で、今度はやめにする。

* * *

五月廿二日。最初日本を出る時、パレスチナから、成る可く小亞細亞を通つて、君士丹丁堡に出で、それからオデツサに渡り、ヤスナヤボリヤナに往かう、と思ふた。然しカイロで己にR少佐からオデツサまでは兎に角、それからは逆戻りする外はあるまい、と言はれた。パレスチナに来て、斷續露西亞について耳にするのは、入國の困難でないものはない。私は土耳其を経て南からの露西亞入りを斷念した。歐羅巴を歩いて居る内には、また露西亞入國の機會も來やう。然しせめて一本の手紙は出して置かう。私は Tolstoy 夫人に手紙を書いた。

郵便局に往つて、書留で此書状を出さうとすると、日本人を珍らしがつて、他の日本文の書はがきの文句を私に讀ませたりして喜んだ土人の局員が、露西亞への郵便は一切取扱はぬ、と斷はる。是非に及ばず、持ち歸る。

それから、軍政署に往つて、ダマスコ行き許可をもらう。Nさんの従弟も、居たが、私共のを取扱ふのは、他の若シリア人であつ

た。何處でもする様に、下級の事務員は土人を使つて、英吉利人が統べて居る。若い Syrian は、私共の汽車の等級を問ふて、“無論二等ですね”と云ふ。“否、一等です。”と私は答へる。

今日は非常に暑い、無風で。ナザレとは、寒暖計が十度から違ふ。

午後 Miss C を茶に招く。父なく、母がある。七人の同胞の中三人はカナダに居る。緑茶をほめたが、矢張砂糖を入れた。Abbas Effendi と懇意さうな。Suffragette ではない。Autograph book を出して署名を求めたら、書いて來ると云ふて、持つて往つた。やがて持つて來た。其 Fly leaf に私が“新紀元の第一年”と書いて置いたのにうたれたと云ひ、自身も同じ事を思ふて居る、と云ふ。

妻は湯をとりて勝手に往つて、“Katterfarak” ありがたう、と亞刺比亞語で云ふたら、臺所の土人の婦達が非常に喜んだと云ふ。

全く主人が無いやうな此パレスチナ、シリアでは、愛の缺乏が見るに傷はしい。“牧ふ者なき羊の如く、衆人惱み、又ちりぢりになれるを見て、あはれみ玉ふ。”と馬太傳の記者も耶蘇の心を書いた筈。英吉利は政治を布き、亞米利加は物資を送り、此處に與ふるが爲に來て居る白い醫者宣教師の数も多いが、色の隔ては奈何ともする事が出来ぬか、して、土人は天から降つて來たやうに私共夫妻を同種とし歎ぶの情が私共の眼にも著しく見られる。時時は心易立てをし過ぎて、私に腹を立てますが、それも白づからな吾儘であらう。何と云ふても、血や色の引力は争はれぬ。先日も夫妻湖畔を歩いて居

ると、八歳ばかりの小さな赤帽が、舉手の禮をして“サイド”——今日は——と莞爾莞爾笑ふた。

主婦は“Daily life in Palestine”と手製の菓子を贈物として私共に持つて來た。私共も出發前に 1 磅紙幣を二枚ノシ袋に入れて子供の Kurl にと贈る。その子は土地の風習で、掌を紅く染めて居る。お見せと、手をとれば、はにかんで逃げて往く。

テベリア湖畔には少しゆつくり逗留して、書くものも書き、妻が執心の佛蘭西語も少しなりとやらうと云ふて居たが、暑さと雑沓で興もつき、逗留を打切つて、明日はダマスコへ行く。

第八 ダマスコ

其一 ダマスコへ

(一)

五月廿三日。朝食の席で Miss C に別を告げる。C も
は、自動車でナザレを経て、ハイファに今朝立つと云ふ。私共は、
ダマスコへ向けて立つ。

午前十一時に、土人の Boy 等が荷物をとりに来た。私共は早
午餐を下りる。午餐を終へて、室に歸ると、女中達が石炭酸をま
いて、さつさと掃除をして居る。私共の帽や手廻りは、玄関に下ろして
あつた。追ひ出されるやうにして、ホテルを出る。土人の女中が一
人見送りに来た。

埠頭に下りて、Semakh 行きの Motor boat に乗る。客は Boat
に、荷物は曳舟にのせられる。ハイファの Nassar 君のあの従弟
が親類を見送りに来て居る。記念として 新調の網袋を贈る。まだ
獨身ださうな。此次に會ふ時は、大勢の家族の長であつて欲しい、

と云ふと、大に悦ぶ。その親類と云ふのは、瀟洒とした若夫婦。ハ
イファに歸ると云ふので、多分歸途には寄るまい、と Nassar 家
傳言を頼む。美しい杏を手巾にくるんで有つて居た。先日ホテルの
エランダで話したシリアの老女教師も、知邊を見送りに来て居る。
蘇格蘭宣教師も、棧橋に立つて居た。

今日は、ヘルモンが殊にはつきりして居る。雪が少し多くなつ
たやうだ。

Motor boat は満員である。しやくむだ額の若い英吉利兵士が、
機関部の眞鍮蓋に靴を踏みかけ、踏みかけする。土人の船員が注意
しても、中々聽かぬ。切符賣りの若い猶太人が嘆り、血相變へて兵
士に詰め寄り、皆が見る前で執念深く兵士をやり込める。而して私
共の前に来ると、別人のやうに顔をやほらげ、丁寧に切符を賣る。

この騒ぎの中に、先日来た温泉をも何時しか後にして、湖の南
岸のセマアクに着いた。人足に荷物を持たして、棧橋から停車場に
行く。十三年前には、此處の停車場から汽車でハイファに往つた。
其頃は汽車も開通即下の隔日運轉で、停車場は淋しい事であつた。
今は英兵が多く屯して、附近には、掃除を注意して、蚊をふやさぬ
やうに、と告示などが出て居る。

(二)

間もなく、汽車がハイファから来た。カアキイで、満員。兎角

して乗る。人足等が荷物を後から押し上げる。一等なんか見つける暇もない。上つた車の室に入らうとすると、若い士官が他に往つてくれと云ふ。他は皆満員なので、最初の室に逆戻りする。列車係が来て、私共の Portmanteau が大き過ぎるから、荷物車に移してくれと云ふ。急ぎ人足を呼んで移させる。直ぐ汽車が出る。急遽の際、私はポケットから小さな銀貨を三つつかみ出して、人足にやつた。六片が二枚に、埃及の十銭貨が一枚であつたつもりであつたが、六片と思ふたのは一志であつたかも知れぬ。窓に憑つて居た四十位の好い小父さん顔をした將校が見て、“少し多過ぎましたね”。と云ふた。“ええ、然でした。”と私は答へる外はなかつた。全く與へ過ぎると、人の子を賊ふ。私共の問答を見上げて居た人足は、私が別に取り返へしもしないので、舉手の禮をして去つた。

妻は饅かけて居た。室は木の腰かけの六人詰で、同乗は皆英吉利の士官。一番の年長が人足にやりすぎたと私に忠告したその士官。一人は先刻他の車室へ往つてくれと云ふた若中尉。他の二名は人の好いぼつちやん士官。中尉の手に、長柄のついた小さな方形の金銅を持つて居るのを何ぞと見れば、蠅たたきであつた。同僚のズボンなどにとまる蠅を、びしやりそれで打つ。他に今一人居つたのは、私共に席を與へる爲に、始終通路に立つてゐた。

午後二時發車。湖水を後に、深い谿を次第に上る。鉛青色をした谷川。それを縁どつて淡紅一重の野生莢竹桃が満開である。中洲にも咲いて居る。水の流れ面白く、牛の群が飲ふて居たりする處へ

來ると、若い士官達が立騒いで、ばちばち寫眞を撮る。やがて小さな瀑が白く挂かる。小父さんが大騒ぎして皆に教へる。

稀に Bedouin の天幕があり、また極めて稀に淋しい村がある。此深い谿を、川に沿ひ、川を渡り、迂迴又迂迴して上る。約四時間を費やして、汽車は初めて潤とした高原に出る。程なく大きな停車場に來た。Derat 停車場。即ちダマスコ、メツカ本線の停車場である。地中海面下 681 呎のテベリア湖から、海拔 1735 呎の高原に上つて來たのだ。左手にヘルモン山が顔を出す。夕照満目、西風が冷たい。外套を取り出す。最初私共を排斥した中尉は、一度巻蓆を私にすすめて私が受けなかつた以來未だに打解けぬが、人の好いぼつちやん士官は、窓の開閉にも妻に日あたり風あたりを注意する。

カアキイの車掌が來て、切符を賣る。ダマスコまで一磅。荷物は無貨。

汽車は入り日を横目に、ひたすら北走する。此夥しい高原は、一面大小麥の畑。收穫が最早始まつて、停車場には麥粒が山の如く盛り上げてある。

士官達は、夕食を喰へはじめた。

* * *

人の好きさうな年上の將校は、立つて棚から帶革のきれた、口金の曲つた破靴を下ろし、新聞包と小さな鐘づめを取り出した。新聞包には、大塊のパンがつつまつて居る。ポケットからペンナイフを出して、左腕にかかえた大塊を、幾切にか切つた。そ

うして向うや隣の若い將校にとらして居た。小さな鏝で、鶏肉か豚かの挽肉らしい。名名ペンナイフで取つては、パンにぬつてたべた。パサパサしたパンは、不味さうであつた。不斗若い一人は、パンの小片をとり落した。コロコロと靴の近くに轉がつたが、小片は見むきもされなかつた。年長の彼の人の好い丸い感じの將校は、にっこりして、身をかがめ、其パンを拾ひあげ ふつふつとほこりをふくと其ま口に入れて、もぐもぐたべてしまつた。微塵の街氣もなく、皮肉や苦笑の影も宿らず、よにも無邪氣な様である。

此將校は騎兵科で、昨秋土耳其軍追撃の際、急先鋒でダマスコに乗り込み、輜重が續かずに、餓じいめにあつたといふ事を後で知つて、わたくし達はほろりとさせられた。 あ い

* * *

私共は餓よりも渴を覚え、魔法爐から幾回となく飲み飲みする。セマアクの停車場で土人の子から買ったオレンジも平げる。

日が暮れた。

車燈はあるが、點火が出来ぬ。しかめ中尉は燃えさしの太い蠟燭を取出し、長いことかゝつてそれをランプの中に立てる。中尉も立たぬので、私が提灯を出さうとすると、彼はそれを押止め、到頭蠟燭を立てる事に成功した。而して其薄ぐらい光りで、隣のぼつちやん士官と共に、活字ペタ詰の紙表紙の小説など読んで居る。敷物は敷いても、硬い腰かけ。W.C. は、なし。疲れ果てて、時計ばかり見る。

十時、やつとダマスコの中央停車場に着いた。

エルサレムで懇意になつたFoiさん達が先日来た時は、機關に故障があつて、汽車は途中に一夜を明かしたさうで、それに比べれば先づ順當の着であつた。

(三)

星の夜である。

荷車に荷物ほのせ、私共は馬車で先づダマスコ第一と云ふ Victoria Hotel に往つた。満員なので、次のホテルに行くと、此處も満員。到頭 Central Hotel に往く。即ち Haifa の N さんが紹介状をくれた土人經營の其ホテルであつた。

明朝室の都合をするから、今夜は客間に寝てくれ、と云ふ。荷物一切を小さな其客間に持ち込ませ、茶を呼び、扉を閉ぢ、テベリアから持參の辦當を食ふ。而して椅子を寄せて各自ソファの狭きを補ひ、汚ない赤毛布は廢して Shawl や外套を被り、電燈を消して寝たのは十二時であつた。疲れた眠の中にも、むづ痒いと思ふたら、翌朝眞赤にふくれた南京虫が壁にぞろぞろ這つてゆくのを發見して、妻は恐毛をふるうた。

其二 ダマスコ

(一)

ダマスコが英軍の手に落ちたのは、昨年の十月一日で、土耳其がいよいよ無条件降伏をしたのは、其月の卅一日であつた。英軍の騎兵隊が懸軍長驅ダマスコを占領するには、餘程の強行軍で、糧食つづかず、非常の苦を嘗めたものだ。私共が同車同室したあの人の好い年長の士官なども、其突進隊の一人であつたのだ。ホテルに着いた翌日、バルコニーから眺めて居ると、一つ置いて隣の室から莞爾と出て来たのは、即ち彼士官であつた。他の中尉達は別なホテルに往つたか、顔を見なかつた。彼の小父さんは、友人を訪問かたがた遊びに来たと云ふて居た。ホテルの客は、英將校が大部分を占め、廊下などは印度兵がごろごろ寝て居た。亞刺伯も大分見えて、食事の時など別に大食卓を賑やかに占めて居た。

ダマスコは人口約二十五萬、シリア第一の都會で、回教徒が大部分を占めて居る。電車が通ふたり、電燈がついたりしても、カイロ以上に東方色彩の濃い市として知られて居る。古い處では、耶蘇信者を迫害に来たパウロの前名サウロが、此處へ来る中途で心機一轉して、十二使徒以外の自薦使徒となり、最負の引倒しをする迄耶

蘇を捕にするやうになつた舊跡も此處で、使徒行傳に所謂“直ぐと云へる街”は今も其名が残されて居る。アラビアンナイトで毎々お馴染のダマスコ、ダマスコの絹、ダマスコの刀劍は響いたものだ。海拔 2200 餘呎。三方は山、一方は緑の野から行く行くシリアの沙漠に續いて居る。市の直ぐ北は Jebel kasyûr と云ふ四千呎ばかりの緒禿山が聳えて居る。中腹には獨逸カイゼルが來遊の時、特に設けた展望臺が今もあつて、山腹には人家高低、夜は高い處まで電燈がついて、香港の夜を私共に思ひ起させた。

ホテルに泊つた翌朝、不圖見ると此緒禿山のつづき、もつと西に寄つて、雪の山が近近と見えるに驚いた。それはヘルモン山であつた。ナザレから望み、テベリア湖から望んだのに引易へて、それはあまりに心易く、近く、而して雪があまりに美しい。其距離は、日光から男體山を望むより少し遠い位のもの。雪が幾條にもなつて扁平な山頂から流れ落ちて居る處は、長い白髪を被つたやうで、成程亞刺伯が“白髮の山”と名をつけた筈だと思ふ。熱沙の亞刺比亞から北上し、シリアの沙漠を経て來た亞刺比亞人が、此雪の山を望んだ時の歡喜が思はれる。ダマスコの Cafe ではヘルモンの雪を賣る。私はレモンに和してヘルモンの Talj を賞した。此白い雪の山のお蔭で、ダマスコは緑であり得る。Hermon をはじめ山山のお蔭で、不盡の水はダマスコ及び其附近の野を瀧して、桑が茂り、絹織物が出来、果樹園が豊かに實のつて居る。水の乏しい亞刺比亞人には、ダマスコは天國の様に思はれたであらう。私共のホテルの横を、小濁

つては居るが滾滾と水が流れて居るのは、好い氣もちであつた。私共が三日でもダマスコに居たのは、ヘルモンのお蔭だ。

中央亞細亞の沙漠 西に盡くる處、

天際に嘯いて立つ ヘルモンの山。

其額に 白髪のを雪をかき垂れ、

其懐より 三十筋の川 流れ出づ。

渴けるシリアは 爾に養はれ、

綠なるダマスコは 爾が裾にあり。

青磁天下に 白日の光降る晝、

朝暉夕陰 星月の夜、

美はしのヘルモン 白髪の手！

昔 爾か上にして貌輝やきし 人の子耶蘇、

今 爾を眺めて笑む 人の子われ。

二千年は 東の間。

立てよ ヘルモン とこしへに！ 輝やけよ、雪、とこしへに！

アラブ人の 戀よ ヘルモン 雪白う

みどりの 郷に 清水流る

あ い

私共のホテルは、市の中部にあつて、大通りに面して居る。西向きの私共の室のバルコニーから、雪のヘルモン山は一目だ。朝暮

の山色美しく、日の午にうつとりした山の容も美しかつた。通りの向ふに、Mosque がある。其 minaret に、朝と暮と人が上つて、美しい聲で祈禱を呼ぶ。ヘルモンは暮れ、三ヶ月が其 minaret の上にかかる頃、佳い聲が高塔の上から流れる。

朝ぼらけ モズレム塔の 頂ゆ

メツカを よばう 聲 ほがらなる

あ い

(二)

エルサレムの主は、あれでも基督と云はれぬ事はないが、ダマスコはマホメツドのダマスコだ。ダマスは基督者より回教徒が多く、殊にダマス人は高慢で意地が悪い、とせられて居る。英軍の手で壓へて居るが、人氣は中中荒い。何かは知らぬ人の呼び聲、騷擾を厭する軍用自動車の轟き、騒々しくて寝られぬ夜があつた。其明るる朝は、土人の巡査が十數人を珠數繋ぎにして行くを見た。エルサレムには、土耳其貨を見なかつた。ダマスには、埃及貨幣も通用するが、土耳其貨幣が通貨である。

ナザレのホテルは女ホテルで、男一人の Abdul が威張つたが、此處の私共のホテルに女は Cook が唯一人、餘は皆男で、女 Cook の權高な事夥しい。シリア人の主人は、ハイファの N さんの親友と

云ふ條、紹介状出しても愛想一つするでなく、全く気がぬけたやう。息子の若者は、昔の羅馬人が着たやうな Toga を裸身の上に被つて、ぶらぶら歩いて居る。晝も電燈をつけて居る帳場は、さながらしびれたやうで、ある英吉利土官などはいつまでも勘定書が出来ぬので、汽車におくれるではないか、と拾圓札を帳場のテーブルにたたきつけて去るのを見た。W. O. は夥しい不潔で、食堂は相應ながら、卵をうでた湯を珈琲瓶にさして来るのを見ると、胸が悪くならざるを得ぬ。私共のバルコニーに羽蒲團を曝らして置くと、何時の間にか風に落され、拾はれたと見え、新しいものだけの損害を拂つた。

朝私共の眼がさめる頃には、下の街できまつた物賣りの聲が聞こえる。何とか何とか何とかして、アゲエヴと下がる。それはパン賣りの聲だ。パンの籠を傍に、鋪石に臀を下ろして膝を抱いて、思ひ出したやうに——アゲエヴと云ふ。出かけの労働者や、かなりの身なりをした者までが、それを買つて頬ばりながら行く。それと相對した屋臺店は、甘酒見たやうなものを賣つて居る。桑の實賣りが盤臺を並べる。紫が普通、白もある。盤臺には、花など撒いて、賣り物を飾つて居る。皆小皿に盛つて、立ちながら食ふて居る。私共も給仕の Boy に買はせて食ふた。れもんの黄を満載した車が通る。腹這ふやうにして驢馬にのり、尻驢に騎る男がある。見て居ると、中々面白い。此處の杏はうまく、ホテルで食はず杏のジャムは案外にうまい。食堂の隅に大きな土鍋の餅に冷やしてある水も、相應に好い。

ホテルの附近は古物店、寧ろ樓屋が軒を並べる。面白い物もあらうが、不潔が第一に私共を威嚇する。ダマスが悪疫に悩むと云ふのは、こんな不潔が醸すのであらう。

歩いて見、馬車でも通り、電車にも乗つて、町の見物をする。重なる町は、硝子の屋根を張つてほの闇く、下の車馬道は凹凸がひどく、其處を驢馬が通り、騎馬が通り、馬車が通り、歩行者も通れば、時には軍隊自動車も通る。稀に大きな歐風の店もあるが、多くは狭い店口がさまざまの貨物を擁して並んで居る。みやげにすべくダマス絹の一枚も買ふつもりで、名高い商館に住つて見た。潤い中庭を二つた回字形の大建物、其一方の階段を上つて行くと、絹物舗が四角い蜂窩の如くに小さく割據して居る。エルサレムで見た Foà さん夫妻の買つて来たやうな金糸銀糸入りのや、黄、紅、紫、茜、碧、色美しい織物の數々を持ち出して来る。皆一層分に織り成したのである。東方の絹織國から來ては、眼を驚かすやうなものを見る事は難い。何物も買はずに出て了ふ。

寄木細工や金物の彫刻で名高い Nassar 工場を見る。金物の彫刻では、女達が蠢しく模様に従つて彫つて居る。珍らしい客を見て騒ぐ。寄木細工の處では、足が手程に利く工人が轆轤仕掛で見見る小さなクリヌキの玩具様のものを造つてくれた。半年かかつたなど云ふ象牙を嵌したテーブル、鏡臺、色々ある。代價も高い。出来品を並べた室の彫刻した眞鍮花瓶や盆を指して、此等の原料は、皆日本から參るのです、と支配人が曰ふた。今度の戦争から際立つて日本が

近東に入込んで居る。私共の食卓に、麥稈細工の楊枝入れがあるのを見れば、日本製であつた。Cafe の女は支那下駄をはいて居る。

ダマス三日の逗留中に、私は已にエルサレムで下したあの斷案をいよいよ確めた。それは“赤帽を脱げ”である。全く私共の亞細亞の西の親類達は、マホメツドと縁を切つて、生れ變はらない限り、亡國が前途に待つて居る。

ダマス逗留中、私は床屋で香港以來の伸びた頭髮を五分苜りにした。丁度五月廿六日で、父の第六忌であつた。それから、旅行許可を受けに Permission office に出かける途中、カアキイの一士官が跑けて來て私共に握手するを誰かと思へば、ハイファの Hotel Nassar で會つた士官で、英吉利人は現代の羅馬人で平和の君の先驅だ、と云ふ話を私がした彼士官であつた。握手して別れ、程なくホテルに歸ると、今度は階段を下りて來る其士官とばつたり會ふた。“今度は倫敦で”と士官は笑ふのであつた。

(三)

ダマスコに見るものは、まだいくらかもある。然し回教徒の氣分の如く、晝は暑くて夜は寒く、安心ならぬ季候と、病菌の飛漫して居さうな不潔とが、ダマスコは久戀の地でない、と私共に告げる。ダマスコから汽車で、跛のRさんが絶景是非見に往けと自講したレバノンを通つて、半日程で、シリアの一番歐化した、皆が其處に押

行する Beirut 港に行かれる。テベリアで Nassar さんの從弟は、私共に是非 Baalbek に往つて見よ、とすすめた。其處には埃及のヘリオポリスを摸して、日の神を祭つたヘリオポリスの古跡がある。奥から奥へと遊んであるけば、際限もない。然し小亞細亞から土耳其を経て露西亞入りが出来ない以上、私共は昔のパウロのそれではないが、ダマスコを回歸點として、そろそろエルサレムに歸り、エルサレムからぼつぼつ西へ故國を指して歸らねばならぬ。

第九 ナザレ(ニたび)

其 一 アフウレの一夜

(一)

五月廿七日の朝七時、私共はダマスコのホテルを出て、馬車で停車場に往つた。来た時の鼻の悪い荷夫が居合はしたのに、荷物一切を任せて、私共は切符係が来るのを待つ。ホテルで言を交へた英吉利の看護婦が三人来て居て、妻と何か話して居る。

時間が切迫して、切符賣りの若いカアキイが来た。乗客が先を争ふて其てえぶるに群がる。今日の汽車には一等連結と昨日係りに聞いて居たので、私は荷夫に荷物を運ぶ可く命じた。妻も先づ乗りに往つた。唯一人の若い切符係は、命令書と附合はしてはスタンプを捺して帳簿に記入する。後から後からとカアキイの軍人がやつて来る。“もう軍隊の方はありませんか”と切符係が叫ぶ。最早終りかと思へば、また後れ馳せにやつて来て、先になる。詰めかけた土地の人達に、不平の色が現はれる。私は心に叫むだ。“諸君、腹が立つた

らう。獨立して、早く他の厄介にならぬやうにし玉へ”。

上官らしい年長のカアキイが来て、切符係りに“日本人を”と注意した。英吉利軍人が済んだので、日本人たるお蔭で、私が土地の人達より先きに呼ばれた。私は通行券を出した。昨日出頭して、“最早席がない”と云ふ係官を無理に口説いて許してもらつたのだ。其時念の爲、此れで直ぐ汽車に乗れますね、と問ふたら、此方で許したからには無論、と答へた。私はそれで安心して居た。来て居る土地の人達が、何れも私の持つて居るやうな紙片の外に、尙紫のタイプで書いた紙片を持つて居るを、少し變には思ふたが、其まゝにして置いた。切符係は私の出した紙片を見て、これつきりかと云ふ。然。添書がなければいけぬ、と云ふて刺ねられた。折角好意で先にされた特權を、此方の不問から他に譲つて、私は其添書をもらうべく走らねばならぬ。

二階と云ふから、二階にかけ上る。此處ではない、別の建物と云ふ。停車場を出て其處へ奔る。二階はひっそり、室はから室。下らうとすると、カアキイが上つて来る。仔細を聞いて、“それは昨日来る處でした”と不機嫌顔をする。“詮方がない、往つて汽車係に御相談なさい。”いよいよ乗り後れと覺期して、然し大膽に停車場に戻る。日本人を先きにと切符係りに注意した年長カアキイが“早く早く、奥さんが待つて居る”と先きに立つて最早烟突が煙を出して居る汽車にかけつける。妻が心配顔を窓から出して居る。急病で私が卒倒でもしたかと愚念したさうな。私が乗る。と、彼係りが通行券の裏に鉛

筆で走り書きしてくれる。と、禮を云ふ間もなく汽車は動き出した。私は額の汗を拭ふた。

それはから空きの一區であつたが、来た時の様な硬い木の腰かけである。隣の一區には、印度兵や英吉利兵がのつて居る。一等はあるが、赤帽が私共の荷物を其處に運んだら、士官が荒々しく追ひのけたさうだ。先刻の看護婦達は皆其軟らかいCushionの一等車に納まつて居る、と妻が云ふ。先刻停車場で買ったオレンジを喰ひつつ、まあそれでも乗れてよかつた、と自から謙かし妻を宥める。

外は美しく晴れた五月末の日である。ヘルモンの雪 殊にさやかに、何時までもと右の窓に傍ふて送つて来る。其ヘルモンのすぐ麓までも麥は金色に熟して、薫しい西の風がそよそよとそれを波うたして居る。

薫風や シリア 高原 麥熟れて
雪 なほ 白し ヘルモンの山

Derat では “Nuts, nuts,” “Eggs, eggs, eggs” と子供が胡桃や、うで卵を賣つて来る。私は下りて魔法罫に水を盈たした。高原の水は好い。ホテルから持参のパンと熟卵で、午餐をしたためた。

Derat に着く前、車掌が切符調べに来た。係官が鉛筆で裏書きした通行券を出すと、切符は Derat でお買ひなさい、何ならデラを過ぎてから庫内で上げてよい、と云ふ。車内にする。デラを過

ぎて、車掌が来たので、汽車賃を拂ふ。ダマスコからアフウレまで二人分 347p は、二時間程の相違しかない往路のセマアクからダマスコまでの二人分 100p に比して、ちと高過ぎるやうだが、欲しいだけやる、取るだけ出す、と云ふ方針で、快く拂ふ。“Are you satisfied? それでよろしいか” とカアキイ車掌念を押す。よろしい處ではなく、約 20 p のつり銭までも快く與へる。“Thank you” と感謝して去る。あのダマスコ行きの時の小父さんが居たら、お目玉ものだ、と思ひつつ笑坪に入る。

妻は疲れて横になつた。私は茫然と外を眺める。高原から谿をうねりうねつて下る。川谷を彩どる桃色の莢竹桃は、毎度ながら美しい。

アベリア湖の南端、セマアクに来た。大勢乗る。私共の車室にも、赤帽が二人乗つた。蘇格蘭の宣教師も隣區に乗る。歸國すると云ふ。

風が吹き出した。汽車はセマアクでヘルモン山とガリラヤ湖を後にし、やがてヨルダン川を渡る。一月前には、此川の末に遊ぶだ。あの時上流の谷を見やつた同じ心地で、遙に下流の谷を見やる。風はますます強く、西日の光を吹き散らしさうに吹く。淋しい野山がつづく。羚羊の一種 Gazelle が、いきなり崖の上から顔を出したりする。

やや久しく南下し、更に西に折れて一二の淋しい小驛を過ぎ、日没アフウレの驛に着いた。

人足も居合せないので、隣室の英吉利兵士が手傳ふて荷物を下ろしてくれると、驛に居合した他の Khaki が、受取つてくれる。兎

に角、私共と荷物と共に下りた。

エルサレムの Hensman さんが来る時私共に紹介の名刺をくれた。それは Alexander と云ふ H さんの俘虜仲間で、アフウレ近くに住んで居ると云ふ事であつた。名刺を見せても、カアキイの Deacon 君は一向知らぬ。此處には泊るべき宿もなければ、馬車は一臺もない。一臺居たのは、猶太人の殖民地から来たので、それは汽車から下りたパラソルの女をのせて先刻行つて了ふた。サマリアのナブルスに往くには、矢張ナザレに往つて、其處で馬車を雇ふて出直す外はない。明朝になればナザレから軍隊馬車が来るから、便乗の都合が出来やう。今夜の處が困難で、と名の Deacon にふさはしい、教會出の人らしくも思はるる老實な D さんは心配する。二十歳をまだいくらか越すまいと思はるる驛員のカアキイが、何なら驛長室が空いて居ますから泊つて明朝ナザレにお出でなさい、と云ふ。

私共は悦んで厚意をうける。

土人の荷夫が兎も角も荷物一切を二階に運んだ。私共は若い Khaki さん——蘇格蘭人で Bullingall と云ふ——の案内で、所謂驛長室に入った。六疊位の狭い室、素床によどれた白木のテーブル一つ、椅子一つ、蚊帳つきの Camp bed が一つ。壁には長劔が一振、銃一挺、外套一領が掛けてある。驛長は亞刺比亞人、今は不在である。Bed が狭いので、B さんがきれいに四足とれた體ばかりの Sofa を持ち込んでくれた。

窓は北向き、夕暮の野のあなた、山の上に、まざまざとナザレの

色が見えて居る。先日彼方から此方を見下ろしたが、今は此方から見上げて居る。つい近く右手には小ヘルモン山が青黒く、其麓からかけて一帯の麥原は、風そよそよと黄昏れて居る。

眺めやる 山の上なる ナザレの邑

燈火も見えず 暮れて 行くはも

B さんが蠟燭と、栗色の大きなせと引きの Cup 二つに紅茶を入れて来てくれた。

私共は用意の携帯手燭に蠟燭をともし、食籠から辨當の残りのパンを出して、蠟燭の光で夕食をしたためた。

中一つ置いて向ふは食堂で、其處に四五人食事をする容子であつたが、やがて静になつた。

妻は綠茶を振舞つたら、と云ふ。それは好い考だ。

B さんにそれと話して、湯を沸かしてもらつた。湯は長柄のスウブ鍋に沸かして持つて來られた。あらん限りの湯呑を食籠の中から出した。茶は自國の綠茶で、葉子はテベリアホテルの主婦が焼いてくれたのがまだ大分残つて居た。用意が出来ると、私はBさん達の部屋々々を廻はつて、“Gentlemen, tea is ready”と Waiter 役をつとめた。一人病氣で寝て居る人があつたやうであつたが、七人の khaki さんが二階の食堂に集まつて來た。五人は英吉利、蘇格蘭、愛蘭の人達で、二人はパレスチナの猶太人。何れも綠茶を喜び、菓

子を珍らしいと賞飯し、私共の小さな茶瓶や、九谷の湯呑や、木製の水呑を珍らしがった。私共は英字の名刺に和様の文字を書添へて人人に贈り、それから Autograph book を出して皆に署名してもらう。猶太人の一人所要あつて中座したのの外は、皆喜んで下の如く書いた。

“An appreciation from a few British “Tommiess” at Afule Palestine, 27th May 1919. in remembrance of a happy evening.

Sapper. W. West — Ireland

Pte. Bullingall — Scotland

Sapper. A. W. Whit — London

Pte. H. C. Deacon — Nottingham

Sapper. A. J. Mojunes — Glasgow

S. Schweersdhn — Palestine”

皆喜んでそれぞれに歸つて往つた。

私共は、提灯をつけて外の W. C. に下り、給水槽の栓を捻つて手を淨めた。空は星だらけ。停車場は、蟲の音に溺れて居る。二階に上つて、私は亞刺比亞驛長の Camp bed に、妻は足なしの Sofa に横になつたが、何だか體がむづかゆく、寝ざめがちな一夜であつた。

エスドレの 原の 眞中の Afulé に
一夜を 明かす 縁 奇しも

其 二

ニたび ナザレ に

(一)

五月廿八日。給水槽の水で洗面し嗽ぎ、そこらを歩いて見る。停車場と附屬の炊事などする土人の小舎と、外一軒の建物があきり、淋しい Afule である。貨物列車が朝になつて一度通過したきり、何の音もしない。

私共は二階の窓からナザレに通ふ大路を今に馬車が来るかと待つたが、中々来ない。時たま来たと思へば、それはゼニンの馬へ行く乗合馬車であつた。

其内 B さんが何か云ひに来た。B さんの蘇格蘭英語が私によく分りかねて、今に来る、と云ふ意だと聞き做し、悠悠と寝ころんで居ると、ややあつてまた来た。馬車が待つて居る、と云ふのであつた。

それは四頭立ての彈藥車であつた。二人の khaki が其二頭に乗り、他の二頭を馱して行く。荷物の大部分を停車場に預け、手廻はり少々積んでもらつて、私共も乗つた。昨夜の人人は見えない。私共は否む B さんに 50 p を贈つて禮意を表した。車箱には、甜瓜

を入れた大きなズツク袋が二個と、印度兵が一人乗つて居る。私共は前方の馱者席見たやうな板にかける。

十一時馬車はアフウレを後に、ナザレに向ふ。エスドレの野を貫いた大道。左右は野人蔘の花雪の如く、つゆ葵や色色の草花が麥秋近い畑を彩どつて居る。二人の若い兵士は、面白半分びしゃびしや馬に鞭つて、疾驅する。馬車は天地の間に舞踏をつづける。私の側に疊んで置いた夏外套が、忽ちもんどり打つて地に落ちる。印度兵が飛び下りて、拾つてくれた。私共も自分落ちまいとして、横の鐵欄に絆とつかまる。

彈藥車 平和の君の めをと のせ

舞ひつ 躍りつ ナザレ に はしる

平野盡きて、山阪になり、馬車が徐行する。私共は初めてほつと息をついた。

馬車が Hotel Germania の前に駐まつたのは、午後一時少し過ぎであつた。荷物など下ろしてくれる若い兵士兩人に禮云ふて、各一磅贈ると、悦んで去つた。

二週間たらずで舞ひ戻つて来た私共を、ホテルの主婦達もアプブルさんも驚いて、然し喜んで迎へた。ホテルも修繕を始めて、先居た室は今左官がまさに塗りつつあるので、街に面した24番室に入る。先頃此處の英吉利の孤女院が修繕に着手して居るのを見たが、

今は潤逸のホテルが修繕して居る。バレスチナ、シリアの何處のホテルも戦後まだ其ままにして居るのが多いに、此處の修繕が始まるとは悦ばしい。改造がナザレから始まるは、不思議でも何でもない。私は斯く F 女に悦びを言ふた。

縁あれば 五月も更へず ふりはへて

二たび 來つる ふるさと ナザレ

(二)

五月廿九日。妻は殆んど氣が狂ふて居る。今朝發見した寢衣の虱の爲に。それは私の Bed にも、妻の Bed にも、従つて私共の何れの着衣にも居る、夥しく。ホテルのか？否、まさにアフウレの驛長室から持參のそれであらねばならぬ。ダマスコの南京虫に、アフウレの虱、テベリア、ハイファの蠅は、此行の三絶である。

然しナザレは好い。私共は、明日の馬車を取りきめた後、見物もせず、人も訪はず、寝たり起きたりして一日を休養する。

主婦の F さんは、Wagner 家の人人と、子供を連れて、アフウレの方へ、辨當持參で遊山に出かけたさうである。主婦の Maria さんが私共を二階の客間に請じて、色々もてなす。主人は古錢など愛したさうで、青錆び赤錆びた澤山の古錢を M さんは出して來て見せた。羅馬時代の珍品もあれば、乾隆通寶の何でもないものなども

あつた。M さんが持つて來て見せる寫眞の主人は、若い好い風采の男である。三十二であつたさうな。ダマスコに是非行かねばならぬ要があつて往つたが、其處で腸室扶斯に胃され、歸ると十日ばかり寝て亡くなつた。“逝つてしまひました”とさめざめ泣く。妻も泣いて、其手をとつて慰める。M さんは嬉しさうに、橄欖の木片に油繪で描いた“マリアの井”の小額と、ナザレの花のカアドを私共に持つて來てくれた。子供の病氣はなほり、今日は伯母さんに連れられて遊びに往つて居る。さては、ダマスコ行きで病氣に此處の主人はなつたのか。成程ダマスコは、何様な病菌でも浮遊して居さうな處だつた。私が永居しなかつた筈。而して、再び此ナザレに來たのも、偶然でない。Maria さんは、妻の前に泣いて、慰められたかつたのだ。而して色色の禮も言ひたかつたのだ。

静かなホテルにも、客は絶えない。自動車に乗つて來て、馬で歸る將校や英吉利のレデイの連れがあつた。將校は緑の鸚鵡を、レデイは小犬を食卓に侍らして居る連もあつた。夜食には、長壯二人の khaki が同席する。一人は三度も日本に往つた人で、日本の歴史の大要を伴侶の若い士官に話して居る。二夕言目には私の方を向いて、“さうですね？”と確かめる。

今度は年長の方の Jamireh が私共の用を足す。若い方の Jamireh は、カアネエションと薔薇の花を持つて來てくれたきり、あまり顔も見せなかつた。八歳から此ホテルに奉公して、両親のない彼女は、結婚前で何角とふさいで居るのだ。

第十 Nablus

其 一 ナブルスへ

(一)

五月三十日の朝六時二十分、私共は馬車でナザレのホテル
ゲルマニアを立つ。三頭挽きで、テベリアに往つたのとは違ふが、や
はり若い佛蘭西語を話す馭者である。

一昨日来た路を、其まま山を下つて、エスドレの野を南に奔
る。野はしつとりと朝露白く、風は冷や冷やと面を吹く。

朝風や 山を下りて 我馬車は

エスドレの野 を 南に馳る

七時二十分には、フフウレの停車場に來た。預けた荷物を馬車
に積み込み、それから先日荷物の取り下ろしやらナザレの軍隊馬車
の世話やらしてくれた D さんに、贈るべくナザレから持つて來た花

の束を托する。他の驛員は皆ハイファに往つて、B さん一人居た。
其 B さんに別れて、馬車をすすめる。

ナザレの山上から見下ろしたエスドレの平野は、平一面に見え
るが、横断すれば、其處に麥の穂波の其ままにうねうねする低い丘
があり、水草などの生えた澤地があり、土の家仙人掌の廢墟に似た
村もある。馬車はそれ等を過ぎて、ひたもの南に奔る。サマリアの
山は行手に屏風を立てた様に、幾處の邑が麓の其處此處に見える。
何れが私共のさして行く Jenin か、と疑はれる。

突然、路傍の草地に軍用輜重車がひつくりかへつて居る。それ
はナザレの孤女院の裏山に引上げ捨てられてあつたのと、同様な車
だ。信管其ままの砲彈が轉がて居る。昨年九月十七日に、英吉利
騎兵の突撃で、土耳其や獨逸兵が敗走の紀念であらう。此平原は舊
約時代もしばしば戰場になり、十字軍の戦も戦はれ、今度もまた戦
場であつた。バレスチナの穀物倉は、兎角其地面の潤々と平坦な爲
に戦の場となるのだ。

九時には、ゼニンに來た。村の入口に、馬車がかかると、其處の
柘榴の蔭かっ、赤帽の土人が起つて來て、何か云ふ。馭者は財布か
らいくらか數へて渡して居た。入郷税を取り立てる習慣があるの
だ。馬車はすすむで水道の溝に駐まつた。暗渠を出でて、水は小さな
瀧をなして石渠に落ち、滾滾として流れて行く。底の礫も數へらる
る清水である。甕を持つた女が汲みに來る。鞭をはなれた馬が、飲
みに來る。私も馬車を下りて、木桶で二三杯を傾け、妻も車上一杯